

雪音クリスがやってきた

白黒犬カッキー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「ノイズもシンフォギアも存在しないだあ!？」

「うん、めっちゃびっくり」

「そう言うお前はなんでそんな冷静なんだ!？」

「それはもう前にめっちゃ驚いたからね」

ガチャを引いたら雪音クリスが来ました（現実）に  
注意※これは作者の夢の中で出来上がった作品です。

## 目次

### 番外編

マリアの誕生日 | 1

ハロウィン | 6

ハロウィン part 2 | 8

1月19日(前編) | 14

特別篇 | 17

戦姫じゃなくて歌姫だよクリスマスちゃん 前 | 19

### 本編

1話 目が覚めたらクリスマスがいた件について | 22

2話 本望でございます | 25

3話 やはり可愛い | 27

4話 その時少年の意識は途絶えた | 29

5話 日本からタイは5時間かかります | 32

6話 記憶抹消 | 34

7話 記憶隠して記録隠さず | 37

8話 1人は寂しいもの | 41

9話 そこには怒りの推しがいた | 44

10話 正座は続くよいつまでも | 46

11話 お金?野暮な事は聞いちやいけねえ | 48

12話 少年はダメージを負った! | 50

13話 これ以上はダメ | 53

14話 信じたくない | 56

15話 集まる者達 | 59

16話 後悔と謎 | 62

17話	初めまして	66
18話	部屋は片付けよう	68
19話	別に運動音痴ではない	71
20話	彼女は外堀を埋め始めた！彼は逃げた！	74
21話	修学旅行班決め	78
22話	彼はクリスマスには敵わない	80
23話	どうしてノイズが	83
24話	狙われた彼	86
25話	ボロボロの彼	89
26話	知らない記憶	92
27話	食欲が上がってきている	95
28話	メデイカルチェック	97
29話	甥っ子の春	100
30話	動き出す者	103
31話	ありがとう	105
32話	未だ謎は深まるばかり	108
33話	現れた腐女子少年は崩れた	111
34話	またしても暴かれる黒歴史	114
35話	良い拳でした	117
36話	隠したはずなのに	120
37話	少年は意識を失った！	122
38話	そこにいないはずの者	125
39話	突然の介入者	127
40話	彼の夢の中なのに…	130
41話	修学旅行開始の宣言をしろ！	133

42話	内心ドキドキがとまりません	137
43話	振り回してもそんなに効果はないですよ	139
44話	流石に恥ずかしい	141
45話	少年は隠れた	143
46話	ホラーはやめて	145
47話	ガチかよ	147
48話	最近こんな役回り	150
49話	遅かったプレゼント	152
50話	温泉イベントはやっぱりこれよ	155
51話	迫る女子達	158
52話	響の気持ち	161
53話	聞いてしまった	163
54話	黒い影	165
55話	黒い雪音クリス	168
56話	モデル イチイバル	171
57話	不明な目的	173
58話	まだ気付かない	176
59話	違うそうじゃない	179
60話	親友の優しさ	182
61話	彼女は彼の夢を見る	184
63話	謎の部屋と屍の部屋	186
64話	察知スキルはだてじゃない	189
65話	グイグイ攻める響	191
66話	響の告白 クリスの思い	194
67話	少年の思い	197

68話	クリスの告白	200
69話	少年の告白：消失	202
70話	彼は何処に？	205
71話	突然の海外と少女	208
72話	少年は絶好調になった	211
73話	海外のシロップって結構濃いめよね	213
74話	以外と数年ぶりに会っても忘れる事はある	215
75話	当時の彼は泣き虫だった	218
80話	真実と襲撃	220
行間	これは誰の夢？	223
81話	変化	225

## 番外編

### マリアの誕生日

「和さん！和さん！」

「ぶふう!?・・・つてえ！なんだ突然!?!」

少年の部屋の扉を思いきり開けて乱入する切歌に優雅にCCレモンを飲んでいた少年は椅子から転げ落ちてそしてCCレモンを全身に浴びて驚きながらも切歌の方に視線を向ける。

「聞いてください！今日はマリアの誕生日デスよ！」

「マリアさんの?」

手をパタパタさせて大袈裟に伝える切歌に少年は起き上がってカレンダーを見る。

(そうか・・・今日は8月7日。マリアさんの誕生日だったな)

「あくそう言えばそうだったね」

「デス！デス！」

そう言つて切歌は頷いて少年のベッドに正座して座れば少年は何故そこに座るのか疑問に持つがとりあえずはなしを聞くことにする。

「・・・つまり、マリアさんの誕生日プレゼントを用意したいけどあんまりこの町に詳しくないから案内をして欲しいと」

「そうゆう事になるデス」

切歌からの説明を一通り聞いてから少年は纏めあげて問いかけると切歌は頷くのだが少年は1つ疑問に思ったことがあり、問いかける。

「それはわかったけど・・・調ちゃんは?切ちゃんの事だから一緒だと思ただけだ」

「あく・・・調はデスね・・・」

「・・・?」

いつも一緒にいる調がないことが気にかかり聞いてみると切歌は気まずそうな顔になり少年は首をかしげる。





パァン!

つと響の号令によりクラッカーが鳴り誕生日パーティーが開催される。

「みんな・・・ありがとう!」

それぞれがプレゼントを用意していて主人公であるマリアは嬉しそうにしていた。

「マリア!これどうぞデス!」

切歌の番になりマリアの所に向かうと袋の入った小包用意する。

「和さんと一緒に選んで来たデス!」

「ありがとう、切歌。・・・へく和と行ってたのね」

「和君?そこんところ詳しく」

「あれ?二人ともなんで俺に視線向けてんの?」

切歌の発言で二人の視線が少年に集中し、響は少年の後ろから肩を掴んで問い詰めようとする。

「なんで切歌ちゃんと二人でえええ!私も誘ってよおお!」

「だつてお前呼ぶとめんどくさいってか揺らすな揺らすな」

涙目で少年の肩を揺らして抗議する響に少年は揺らされながら答えて離れる。

「めんどくさいって言われた・・・和君に言われた・・・」

「まあまあ、和雪君もそうゆうときつてあるよね」

膝について項垂れる響に背中をさすって宥めている未来。

「あはは・・・ねえ良かったら開けて見ていい?」

「良いデスよ!」

そんなみんなのやり取りを見て微笑えんからマリアは切歌に開けても良いかと尋ねて切歌は頷いてマリアはそれを開ける。

「あっこれって・・・」

小さい包みを開けるとそこに入っていたのはペンギンのぬいぐるみだった。

「ペンギン・・・」

「デスデス!いつか聞いたときペンギンがどうのって言ってたからこれがいいと思つたのデス!」

「まあこれ支払ったの俺ですけどね」

マリアはペンギンのぬいぐるみを抱えて切歌の方を見ると胸を張ってエツヘンと答えその横で少年がジト目で見ていた。

「二人ともありがとう・・・」

「やったデース！・・・」

「良かったな」

二人にお礼を言って二人はやったねとハイタッチをしてるのを見てマリアは微笑み再度ぬいぐるみを見る。

「じゃあ次は俺かな・・・と」

「あら・・・なにかしら手紙？」

少年がプレゼントを取りに行こうと抜けてその間にマリアはぬいぐるみの手に封の入った手紙を見るける。

「あつこれはデスね、マリアが喜ぶと思って用意したデス！」

「私が喜ぶ物?・・・!?!」

そう言つてマリアが手紙を見ると数枚の券が入ってるのを見つけそれを見た瞬間固まる。

「あれ?どうしたんですかマリアさん・・・」

「お待たせええ!!」

響が心配そうにマリアの顔を覗き込んでいるところに少年がやってきて少年が声を掛けると同時にマリアの姿が消え気が付けば少年を抱きかかえていた。

「良し！切歌ありがとう！」

「え?・・・え?・・・いったいなにいいいい!!」

そう言つてマリアは少年を連れて何処かに消え去つてしまいその奥から少年の悲鳴が聞こえてくる。

「ねっねえ切歌ちゃんなにを渡したの?」

恐る恐る響が質問をすると切歌は笑顔で答える。

「なんと和さんを弟にできる券なのデス！」

「・・・え?..」

笑顔で答える切歌に響達は首を傾げてさらに続けて・・・

「こうゆうものがマリアが好きと言っていたし和さんもこれが好きと

聞いたからお互いにwinwinになると思ったのデス！」

「それって・・・和雪君は隠してたやつなんじゃ・・・」

姉・妹系の同人誌を良く揃えてた少年の私物をマリアがよく見ていたので天才ばりな顔で説明する切歌に未来が答えるがもうマリアを止められるのはいない為、次の日にはやけに肌艶の良いマリアの姿とやつれた少年の姿を見る事となる。

## ハロウイン

「ただいバア!？」

「トリック・オア・トリート!」

「お菓子をくれなきやああ!イタズラするデーリース!」

少年達が帰宅すると入るや否やコスプレをした調と切歌がやってきて、調は少年と一緒に来たクリス、未来、響にも言うが隣にいた切歌が入ってきた少年のお腹に頭から思い切りのいい飛びこみを行い、少年に激突して少年は悲鳴を上げて突撃してきた切歌と一緒に倒れる。

「おお、良い飛び込み」

「はいはい、お菓子ね。はいどうぞ」

「和君大丈夫?」

「…痛いっピ」

倒れていく少年を響とクリスが見て寄るが、心配しているのをよそに調にお菓子をあげていく未来。

「あつ調ちゃんと切歌ちゃん。私もあるよ!これ、切歌ちゃんのもあるよ」

「ほら、二人ともこれが欲しいんだろ?」

「…やった!」

続けて響とクリスも用意していたのかお菓子を出して調に渡していきそれを受け取ると調は小さくガッツポーズを取り喜びを表していく。

そのやりとりを見て切歌も喜んでから下にいる少年を見る。

「和さんはないデスか?」

「いっつつつ…。ん?ああ、良いよってかもうすでに俺とはしてはイタズラされているんですが?」

等と言いつつつ少年もしれっとお菓子を用意していてそれを切歌に渡していく。

「ありがとデス!それじゃあ和さん」

お菓子を受け取った後、お礼を言えば少年の上に乗ったまま動

かず、ニカッと笑って見せて少年を見て答える。

「トリック・オア・トリートデース！」

「……は？」

突然切歌の一言に少年は思わず顔を引きつらせる。

あれ？俺、今お菓子あげたよね？今日の前にいやがる子はなんと？  
等と困惑した顔で切歌を見る少年。

「おややくもしかしてお菓子は無いデス？」

「いやあるわけ…ハッ！まさかお前…」

そこで少年はあることに気付く。切歌の顔が「イタズラしたい」と  
ゆう顔をしている事に。

「お菓子が無いのは仕方ないデスね。それじゃあイタズラをするデス  
！」

そう言つて切歌が腕を構えて深呼吸をし始める。

「ああ、嫌な予感…」

すでに構えをとった切歌を見て悟ったような顔をした少年はこれ  
は止められないなど悟った目をして、そして切歌の腕が振り下ろされ  
た。

「デスデスデスデスデスデスデスデスデスデスデスデスデス  
デス！」

「あばばばばっ！」

振り下ろされた手は的確に少年の胸元に打ち付けられていき少年  
もなすがままに打ち付けられて叫びをあげる。

「まるで仲の良い兄妹だね」

「未来さん？これが仲が良いと思います？」

## ハロウィン part 2

「これで、ボクの準備はできました！」

少年の部屋で準備をしている子が一人。エルフナインである。

本日はハロウィンということもあり、お菓子を用意していて少年の部屋で待っていたの

だが…

「ちよつと早すぎましたね…」

魔女っ子のコスプレもしてお菓子も用意した。後は少年達が返ってくるのを待つだけだったのだが…

時計を見ると昼の14時を回っていて少年達が帰ってくる夕方の時間にはまだ早く、エルフナインも待っている間は何をしようかと考える。

「他の皆さんは何をしてるんでしょうか…」

マリアや翼達はどんな事をしているのか見に行こうかなとお菓子を持って遊びに行く。

~~~~~

目的の部屋に着いたエルフナインは早速開けようと戸を開けよう手に掛ける。

「失礼しま「またなの!?!」…?…」

戸に触れた瞬間、部屋の中からマリアの8怒号が飛び交い、なんだろうかとちよつとだけ戸を開いて覗き込むとそこに見えたのは…

「どうやったらかここまで散らかるの!?!私この洋服をダンスにしまうだけだっていったのになんでダンスから服が飛び出すのよ!?!」

「うう…面目ない」

見えてきたのはマリアに説教受けている翼の姿があった。

「私は普通に服を押し込んだだけなのだが…」

「そこが問題なのよ…」

しょんぼりとした顔で説明している翼を見て頭を抱えてとても困った表情をしていて、マリアはとりあえず服をたたんで入れなおしていた。

「とりあえず、今日はハロウィンなんだからそこで待ってて！」

「わかった。だがマリアよ…」

布団をたたんでいるマリアに問いかける翼。

「何よ…今忙しいんだけど？」

不機嫌そうな答えるマリア。

「その、それはわかるのだが…その恰好はいいじゃない」

「何ってハロウィンだから仮装してるだけよ？」

「マリア、それはたぶんハロウィンで着る服では…」

そうマリアは現在ミイラの恰好をしており真っ白な包帯『のみ』で巻いており柔肌もチラホラと見えていて外に出ればきつと痴女認定されてポリスメンが特殊召喚されず事案が発生したであろう。

「安心なさい。流星にこの恰好で外にはでないから」

「そっそうか…」

「和の部屋には行くくらいだから」

「もつと問題だ！」

うんうんとさも当然のように答えるマリアに翼もようやく声をあげてツツコミをいれる。

「そんな恰好で彼と何をするつもりなんだ!？」

「なについて決まってるでしょ。この恰好で和にイタズラして反応を楽しむのよ。結構可愛い反応するのよ。あの子」

「…」  
そう言ってマリアはとても良い顔でこれからどんな形でイタズラをしてあげようかと微笑んでいてその表情を見て翼は軽く引いていった。

「…取り込み中みたいですね」

二人のやり取りを見ていたエルフナインは関わらないほうが吉と考え、スつと戸を閉めてはその場を後にして再度少年の部屋にもどつていく。

「ふう…まだ帰ってくるまで時間はありますね」

ベッドに座って時間を見ればまだ全然時間はたつてはなく一人でみんなの帰りを待ちながら気長に待つことにする。

「ふあゝ。急いで準備をしちやったからなんだか眠くなつて…」  
数分待っていると疲れが出てきたせいか睡魔に襲われてうとうとと顔を揺らし始め、ベッドに横になる。

「少しだけ仮眠しましょう…起きれば良い時間になつて…」  
そう言つてエルフナインはそのまま目を閉じて睡眠を取ることにする。

「なんか可愛い魔女っ子が俺のベッドで寝ている件について」

切歌からの猛攻を受けた少年はようやく解放されてたうえに、包帯だけを巻いた姉を名乗る歌姫にも襲われかけてなんとか逃げ切る事に成功し、深いため息をついて胸元をさすりながら自室に入つていくと自身のベッドに可愛い魔女っ娘コスをしているエルフナインが寝ているではありませんか。

「とりあえず起こしてあげるかのう」

そのままに寝かせてあげるのも良いと思つたがせっかく遊びに来てくれたのだから起こしてあげようと魔女っ娘をさすつてあげる。

「おいその可愛い魔女っ子ちゃん。起きてクレメンス」

「…ううん。…ふえ？」

「やあ」

「…和雪さん!? あつえと、すみません! 寝てしまつて」

「いや。別に大丈夫だよ」

魔女っ娘エルフナインを起こしてあげると、ゆっくりと目を開けて少年の顔見れば恥ずかしそうに顔を赤くして謝り、あたふたしているが少年は笑つていてエルフナインを見ていた。

「それで? エルフナインちゃんはいったい何をしにきたのですかな?」

「あつそうでした! 和雪さん!」

「はい和雪です」

「覚悟してください!」

「え? そんな必死になる事!？」

構えだしたエルフナインに思わず自身も構えだしてしまった少年。



「トリックオアトリート！お菓子をくれないとイタズラします！」

「…思ったより普通？」

「はい。そうですね？」

思ったより普通の行動に少年は拍子抜けの顔をするが特に何も起こることは無かった。

なにか変な事したかなとキョトンとしたエルフナインに少年が部屋にから出ようと扉を開ける。

「ちよつと待ってて、今温めてくるくるから」

「あつわかりましたけど…温めてくる？」

そう言っ出ていく少年に首を傾げて待っていると数分してからまたすぐに何かを持って戻ってくる。

「はい、熱いからから気を付けてね」

「これは…」

少年に渡されたのはコップでその中をのぞくとカボチャの匂いが漂ってきて直ぐに気付く。

「これってかぼちゃスープですか？」

「おう、カボチャのポタージュスープやで。ほら、寒い時期だし温まるのも良いかなって思ってたさ」

「なるほど」

納得した顔でカボチャのポタージュスープを一口飲む。

「とても温かいです」

「そいつは良かった」

とても喜んでる様子でポタージュスープを飲んでいるエルフナインを見て少年も頬を緩めて眺めているとふと何かを思いついてポーンと手を置く。

「あつそうそうちなみに聞いていい？」

「はい。なんですか？」

「エルフナインちゃんはどんなイタズラ考えてたの？」

「…あつ」

他の人連中にはイタズラされてしまったのかその説明をしていてもうこの際だから全員うけてやろうと死んだ魚のような眼をして伝

える。

「あつと…考えてませんでした」

「なんと」

実は考えてなかったと苦笑いしていて少年は少し考えている。

「なーんだイタズラも考えてなかったのにお菓子貰うつもりでいたのかくそうかそうか」

「えっあつ待つてくださいい！」

そう言つて静止させてから深く考え込み悩んでいるのか苦悩し始める。

「別になんでもござれよ」

「そうですか？それじゃあ…」

「…まじで？」

少年の提案にエルフナインは思いついたのか答えると少年の顔が驚愕の顔に変わり、イタズラが執行する。

「あのエルフナインちゃん？…」

「はい？なんでしようか」

「これってイタズラなんです？」

「はい。イタズラですよ」

どうも皆さん私は絶賛寝ています。え？誰とだつて？エルフナインちゃんに決まつてるでしょうや。

「ボク、こうゆうのしてみたかったです」

「ほんとにこれが？」

「はい！」

そう言つてエルフナインはえへへと嬉しそうに少年の横に潜り込んで少年の顔を見る。

「それに皆さん和雪さんと寝た事があるらしいのでボクも気になつて」

「いや、まだ3人ですが？」

マリア、響、クリスの事を言っているのかエルフナインは自分もしてみたいと答え少年は遠い目をしながらこの子もかと思つて天井を

見つめていた。

「じゃあもう寝ましょう和雪さん！」

「元気だなあ……」

そんな会話していると気が付けば二人とも同時に眠りにつき、朝になり……

「あっせつかくお菓子用意したのに忘れてしまいました！」

「元気だなあ。……この魔女っ娘」

## 1月19日（前編）

場所は某レストラン。時刻は昼の12時30分頃

少年が親友にちよつと相談があると電話があり、親友も特に断る理由がないので久しぶりの食事のレストランの集まってテーブルに着くと少年は飲み物を一口飲むと口を開く。

「なんか今日クリス達の様子が変なんですが」

「おっそうだな」（思考放棄）

日付は1月19日。なんかみんなの様子がおかしいのだ。この1〜2週間程あたりからなん距離を感じるようになってるんです。

風鳴さんの場合

「あつ翼さんおは」

「おはよう、すまないが私は用事があるから失礼する」

「あつ了解です」

マリア姉さん（少年は調教されて姉さん呼びをしている！）場合

「あら、和」

「あつ姉さん聞きたいことが」

「デートの誘い？ごめんさい。ちよつと時間がないわね」

「いや違いますけど」

響・未来の場合

「かーずくーん！」

「なんぞ響」

「和君プレ…」

「はいストップ」

「ムグッ」

「ごめんね和雪君。ちよつと私達用事思い出しちゃったからまた後でね」

「おっおう」

「ムググ！」

「ほら行くよ響」

エルフナインの場合

「エルフナインちゃ…」

「和雪さんごめんなさい！」逃亡の呼吸壺ノ型「激走」  
「…」

「とまあこんな感じでみんな避けられてんよ。しまいにはエルフナインちゃんにも避けられたから俺泣きそう。泣いていい？泣くわ」  
「やめろや」

机に向かって涙を流しては愚痴を溢す。

そんな少年の気持ち悪い姿を見て親友は問いかける。

「お前なんかしたのか？」

「…心当たりがありすぎてわかりません」

「お前…」

気になった疑問をぶつけると少年は真顔で答えてそれを聞いた瞬間にゴミを見る目で少年を見くだした。

「同棲してるからって最近調子に乗りすぎとちやいまつか？正直羨ましいのにそんなんで悩んで相談される俺の身にもなってみろや」

「やーい、ボッチー」

「よろしい。ならば戦争だ」

本当、なんで相談しに来たのかと思うのかわからいまま少年と親友は他の人に迷惑が掛からないように静かに喧嘩を始める。

「はあ…結局解決できんかった」

16時00分

あの後解決することなくだらだらとだべってしまい時間だけが過ぎたのでお開きにしてトボトボと家に帰っていった。

「ただいまー」

「突撃！和雪の誕生日デース！」

「エイー！」

「ゲヘエ!?」

入り口を開けたとたんに暁切歌とエルフナインが目の前に現れ、少

年の腹部に頭から突っ込み少年はガードもできずに二人を受け止める事もむなしく後ろに倒れて後頭部を強打する。

「いってええええ」

「行くデスよ！」

「和雪さん！」

「…はい？」

頭を摩りながら少年はなんだと見てると二人は笑顔で少年の顔を見てせーので答える。

「「お誕生日おめでとうございます（なのデス）!!」」

「…………え？」

## 特別篇

「ふあ〜…ねむ」

とある休日の朝、少年はなにもやる事なくぐで〜つとベットで横になりながらスマホで本格スマホカードバトル〇〇（ひよつてる為名前は伏せる）でポチポチと遊んでいた。

「やっぱネメシス気持ち良すぎるなあ…盤面とリーダーに10点与えられるのは魔剤だぜえ」

次のターンで倒せる盤面なので顔面にやついてふひひと笑っているとコンコンつと扉をノックする音が聞こえる。

「和雪君いる?」

「未来じゃん。今開けるで」

部屋の外から聞こえてきたのは未来の声で和雪は返事をして扉を開ける。

「おはよう、和雪君」

「おはよう。どしたん?」

「ちよつとね。和雪君今日は何月何日かわかる?」

「ん、今日?…9月3日だね」

「そう…もつと言えば令和3年だけど」

「あっなんか察したわ」

未来の質問の意図が理解できたのか和雪は思わず身構える。

今日は令和3年9月3日。つまり393（未来さん）である。

「大丈夫だよ!別に変な事するわけじゃないんだから」

「…本当に?」

こういったタイプのイベントには特に大変なめにあっていたから和雪には疑念の目で未来を見ていて未来はそれを直ぐに否定し、更に続ける。

「まさかまた響とマリ…ウツ…姉さんみたいに一緒に…」

「ツ!そんな事するわけないでしょ!」

未来は和雪の言葉に顔を赤くして直ぐに否定すると同時に彼の

ベットにあつた枕を持って和雪に投げつける。

「確かに響とマリアさんは良く来るけど私はそんな事するわけないでしょっ。」

「…まあ確かにそうだけど。違うなら何しに?」

良くマリアと響が寝室に侵入する事がある為、彼の心労はマツハで削られていたのである。投げつけられた枕をキャッチして和雪は枕を抱きしめて質問をすると未来はふうつと軽く息を整えて和雪に声を掛ける。

「今日暇なら一緒に出掛けない? 響もみんな用事ででちやつてるから」

「なんだ…そんな事か別に良いよ」

「そつか。じゃあ準備するからまた後でね」

「オツケーだよ」

「和雪君もちゃんとデートだと思ってしつかり準備してね」

「はいはい、わたくし大木和雪しつかりと準備させていただきました」

お出かけのお誘いだったようで和雪は全然大丈夫と答えると未来は嬉しそうにしながらじゃあねと部屋を出る。

「ん?…デート?...あれ?...これってもしかして...まあ荷物運びだろ...」

うんうんと頷いて準備しようスマホを置こうとし

「あっ! 負けてる!」

未来との話で時間切れで敗北したらしく画面にはyou losesの文字がうかんでいた。



## 戦姫じゃなくて歌姫だよクリスちゃん 前

世の中には常識では計り知れない事が確かにある。

突然アニメのキャラ達が現れてしまう事もその一つだ。

まあそんなこともあったが自分にはこれにはありえないと思いつつ  
もみんなと過ごせてとても嬉しかったりする。

大好きな子と一緒に過ごす日々はとても幸せな日々だ。とても幸  
福だ。

だけど俺は過ごしていく内に少し疑問に思うことがあります。

そうそれが今この…

とてもひらひらで本人が着ないようなそれも【アイドル】が着てい  
る服を脱ごうとしているクリスを偶然見てしまつて羞恥で涙目にな  
りながらも彼女の平手を顔面に受けるまでは仕方ないのですが、何  
故、俺の部屋で着替えてるのがお兄さん何一つ理解ができません。

「…ぐっぐめんなさい！」

「…え？」

少年の部屋着を着てる雪音クリスが深々と頭をさげて謝罪してそ  
れを聞いた少年は目を点にして彼女を見ていた。

「本当は直ぐに外に出たかったんですけどこの格好じゃ目立つからそ  
こにあった服をもら…お借りしようと思いだら貴方が入ってきたか  
ら…？」

「…あつあの、どうして首を傾げてるんですか？」

「んんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんんん」

必死に弁明をしている雪音クリスに少年は大きく首を傾げて大変  
困惑していた。

普段の彼女なら少年を殴り飛ばして正座でお説教をくらうまでが

彼のハッピーセットだったはずなのだが今の彼女はどうか。首を傾げるところか身体を大きく傾けて困惑してる俺を変な目で…ではなく心配してくれてるではないか。

「あのくクリス？」

「？…はい」

「…」(ドツ)

少年の呼びかけに応じるクリスが可愛く久しぶりに心臓が止まった少年はなんとか金ノツクダウンシールドで自己蘇生してなんとか持ち直した。

だがどうしてクリスがこんなことになったのかがわからず少年は無言で彼女の額に手を当て、もう片方の手で自分の額に当てる。

「なつなにを!？」

「…」

額に当てた後数秒で手を離す。

「熱はないようだ。…え？本当にどうした？」

どうやら彼は本気で心配してるのだがそれを彼女は頭の中を心配されたのだと感じ彼女は突然笑顔になると手を振り上げる。

「いきなり…何をするんですか!？」

「…ゲフウ!!」

彼女の手刀が彼の頭部を直撃し彼の意識は一瞬暗転する。

ドサツつと倒れこんだ彼を見て彼女は息を整えてからそれを眺める。

「どうしよう…此処の家の人はずだよ…ね？」

倒してしまった少年を見て彼女は周りを見ると、あるポスターを見つめる。

「【戦姫絶唱シンフォギア】…？あれ…この子」

ポスターを見つけた後彼女は自分と同じ姿をした抱き枕を見つめる。

「ふーん…なるほどねえ」

何かに気付いた彼女は少年をもう一度見てから悪い笑みを浮かべる。

## 本編

### 1話 目が覚めたらクリスがいた件について

「・・・え？」

少年は今の状況が飲み込むことが出来ず酷く困惑していた。

ベットで目が覚めた彼の腕には少女が眠っており少年の腕を枕に  
してゆつくりと静かに寝息を立てていた。

状況だけを説明するだけならこれだけでだいたいは伝わるが今の  
彼にはそこまで至る経緯がまったくわからなかった。可愛らしい  
寝息を立ててる少女は見た目でもわかる胸、白く長い髪、誰から見ても  
可愛いというであろう少女の正体を少年は知っているが《それ》  
だけはあり得ないことであった。

だが現実には起きている以上理解しないといけない・・・のだが。  
「なんでこの子は俺のベットに俺の腕を枕にして寝てるんですかね？  
□□□□□が」

少女の顔をもう一度見て名前を呟く。

「ガアツツツデエエム！」

学校の帰り、とあるファミレスの一席で叫びを上げる少年。

他の客達は一瞬驚いて視線を少年の方に向け視線を向けられた少  
年はすぐさま頭を下げて謝り再び席に着く。

「また来なかった・・・不幸だ・・・」

「毎度のガチャ爆死お疲れ様、もう少し静かにして貰って良いですか  
ねえ」

テーブルにスマホを置いて頭を置いて某幻想殺し少年の使う「不幸」を言いながらぼやけ、一緒に同席していた少年をドリンクバーで持ってきたメロンソーダを飲みながら先程叫んだ少年を見ながら呟く。

「今月のガチャは絶対来ると思ってたのに来ないのなんで……乱数教・大成功教・肉球教とかいろいろ試したのに」

「因みに爆死何連突入したん？」

「100連ですが？」

「お前の爆死が俺のドリンクを美味しくするありがたいでございます」

「死んでしまえ！」

愉悦顔で見えてくる親友に中指を立ててもう一度スマホの画面を見る。

『戦姫絶唱シンフォギアXD』

スマホアプリのゲームのシンフォギアがリリースされ少年はずっとこのゲームをプレイしておりあるキャラが来てくれずため息を付いていた。

「なんで来てくれないんだ……ネフシユタンギアの雪音クリス……」

「推しキャラが来ないなんてかわいそうに」

そう、この少年はこのゲームにおけるヒロイン雪音クリスがめっちゃ好きなのである。

きっかけはアプリの宣伝からシンフォギアを知りそこから始める中見つけた雪音クリスに心を奪われ、グッズも集めるほどにはその推しっぷりを発揮していた。

「あつ俺、推しキャラの切ちゃんきた」

「ド畜生が……くらえレモン汁の水鉄砲」

「生レモンの汁強烈すぎい！目ガア！目ガア！」

悶える親友を見てこれ以上はもういいやと少年は帰ろうぜと親友に言いオケとを閉じながらグッドサインを送って一緒に会計をすまし、互いにファミレスを出て家に帰宅する。

「ハア……」

家に到着し少年は眠気もあつたためすぐにベットにダイブし横になりスマホを起動しもう一度アプリを開く。

「……次は眠り前单発……きょう……で」

そう言つて少年はガチャ画面のペンダントを揺らし結果を見ずに意識を手放す。

そうしてスマホの画面が一瞬輝きだしたのだが少年は気づかず深い眠りに付く。

そして朝今に至る。

「なんで雪音クリスが俺の腕でねてるんでせうか？」

## 2話 本望でございませす

「……んう」

「……！」

驚いている最中少年の腕を枕にしていたクリスが少年の動きに反応し瞼を開け、寝ぼけていながらも少年と目が合う。

「……」

「……」

数秒はの沈黙、お互いの距離は滅茶苦茶近く互いの呼吸が聞こえるくらいには密着していた。

「なあ……」

「はい……なんでしよう」

沈黙の壁を最初に破ったのは口を開いたクリスだった。

『お前誰だあ!?!』

『グホオ!』

この瞬間彼の未来には殴られ吹っ飛ぶまでの世界が予想できてしまっていた。

彼女の性格ならきつとこうするであろう、だってファンなんですもの。

少年はこの一瞬この後クリスが言う言葉が思い浮かび返事をする。

「アタシ達って初対面だよな?」

「はい……そうですね」

「なるほど、つまりこの状況に対してなにか言うことは?」

「ん?なんか予想してたのと違うぞお?クリスの性格なら殴られると思っただのに……」

予想してたのと違う返答に疑問を持つがそれよりも先に質問に答えるのだが……

「ええと……こうなったことに関しましてはきつと不可抗力なんだと思います今別に言いたいことがあるんですよ……」

「いいぞ……言ってみろ」

「めっちゃ幸せです」

「そう・・・ならそのまま逝きやがれこの変態！」

「やっぱこうなるのねえ！」

自分の気持ちを素直に答えた結果クリスはうんうんと頷くと少年の顔にビンタをおみまいし腹部に蹴りを入れベットから転げ落ちる。

「・・・ここ何処だ？」

落ちていった少年を見てクリスは現状を把握しようとするのを見たと信じられないものを目にする。

「なっ・・・なんだよ・・・これ」

目に映るのはまず入口の扉にあるポスター・・・ポスターぐらい何処にでもあるのだがそのポスターのタイトルに目がいつてしまう。

『戦姫絶唱シンフォギア』

そう、目の前にあるのはクリス本人が出ている作品のアニメポスターであった。

「アタシだけじゃなくあの馬鹿と先輩達もいるだど？」

他にも数々のクリスマスグッズを見つけ自身の置かれている異常さに気付く。

「アタシのストーカーならともかく・・・シンフォギアの事も知っていないしあいつらの事も知ってるとなると・・・」

いまだに伸びてている少年を見て詳しく話を聞くしかないかとまづ適当に見つけてた紐を使って少年の手を縛ろうと動きその際に抱き枕に目とおすが・・・

「・・・あの抱き枕は見なかった事にしよう・・・」

自分の絵が描かれている抱き枕は見なかった事にしよう、これ以上受け止められる自信がないと思うクリスマスであった。



### 3話 やはり可愛い

「(。D。)ハッ!・・・知ってる天井だ・・・普通か」

目が覚めるとそこは自身の部屋でボケを言い、起き上がると身体に違和感を感じ見ると両手が縛られていて辺りを見わたし犯人を捜そうとするとその人はいたのだが・・・

「・・・」

「あのお・・・!」

目の前にいる犯人ことクリスに声を掛けるがクリスのいる位置に気付き言葉を詰まらせる。

今彼女がいるのは本棚、そしてそのうちの一冊を読んでいる。

・・・そう、問題はその本簡単に言えばそれは少年がコミケで購入した同人誌タイトルは

『剣と銃の恋愛事情』

つばクリ本である。

「なっ・・・ああ・・・」

「あっこれはやばい、あっ俺縛られてるんだった」

「アタシはこんな恥ずかしい事はしねえよ!」

「いや!これは想像で作ってるものでしてグヘエ!!」

ワナワナと震えだしたクリスを見て身構えようとするが縛られている為なにもできずに頭部にゲンコツを喰らう。

「つつうく・・・」

「なんだよこの本は!アタシと先輩が・・・そ・・・その・・・」

顔を真っ赤にしてモジモジしだしたクリスにめっちゃ可愛いと思っただがグツと堪えようと

「やっべえめっちゃ可愛い!」

「っ!うっせえ!」

「ああ!しまったあ!ノブア!」

堪えようとした気持ちはどこ行っただのか素直に言っしまい、再度ゲンコツを喰らわせられる。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・話が進まない・・・」

「・・・進みたいのなら殴るのをやめてもらっていいですかねえ!？」

「お前があんな恥ずかしいセリフ吐くからだろ!？」

「俺は素直に言っただけだし! 大好きな推しキャラがんな事したら可愛いに決まってるだろ」

「まだ言うか! この変態!」

「いくらでもいえるぞこのかわいいこちゃん! 後ありがとうございます!」

「コイツ!・・・その辺のナンパ男よりたちが悪い」

「これぐらいなら30分は語れるぞ!」

「まだ言うつもりなのかよコイツ!」

そう口論して30分経過・・・

「・・・」

「・・・」

言い合い続き二人は互いに疲れ、激しく息切れをしていた。

「・・・雪音さんやい・・・」

「・・・なんだよ・・・まだやるのか?」

「とりあえず、この話止めませんか? 疲れたし、それに雪音さんがいる状況もホントにさっぱりわからないんです・・・」

「・・・わかった・・・」

疲れ切った二人はちゃんと本題に入ろうお互いに納得し話をやめてとりあえず休んでから話し合うことにしました。

「・・・できるならこれも外してください」

「あつ、それは嫌です」

## 4話 その時少年の意識は途絶えた

「さてと・・・」

どかつと椅子に座って我が物顔で座るクリス。

「この状況説明できるのか？お前・・・」

「いえ、まったく・・・なんでこんな摩訶不思議体験ビックリアンビリバボーになってるのか俺にわかりません」

「いまだベットの所で縛られている少年はうーんと考えるもわからず、真っ直ぐクリスを見る。

「・・・ハッ！もしやこれは」

「？・・・なんかわかったのか？」

「これが噂に聞く逆異世界転移か！」

「なんだそれ？」

「あつごめん、たぶんていうかこれ絶対間違ってるわ」

「だったら閃いて言ってるんじゃねえ！期待しただろうが」

「まじごめんと謝る少年にクリスはため息をついて自身の携帯を取り出してカチャカチャと動かすが反応せずまたため息をつく。

「あの馬鹿達も連絡繋がらないしいったいどうなってんだ？」

「それってたぶん此処の電波がそれに対応できてないだけじゃない？」

「え？なんでそんなことわかるんだよ？」

「だって雪音さん・・・此処の人の世界の人がじゃないしこの世界と向こうの世界が繋がるとは思えない・・・かな」

「・・・」

「ん？」

「なんか普通にその通りすぎて納得しかけたんだけどずいぶんと詳しくそうだな」

「アニオタの理解力と無限の想像力・・・なめてもらっちゃいけない」

黙ってこつちを見るクリスにあれ？つと首を傾げて見ては詳しくそうに話していたことから、ああ・・・そうかと少年は想像力豊富な為こうゆうのは簡単に想像できるとえへんと威張り散らして見せる。

「あつ一応補足するとね、この世界はノイズもいなければシンフォギアなんて存在してないよ」

「ハア!? ノイズもシンフォギアも存在しないだあ!？」

「イエスでございます」

驚くクリスに頷く少年。

「そうは言ってもなあ・・・直ぐに信じられるわけないだろ」

「まあそうだよね・・・突然言われたら怪しき満点だもん、でも此処にあるポスター見たでしょ？」

「あつああ・・・あれか」

クリスが写ってるポスターを見てはまた少年の方を見る。

「ただの一般人がシンフォギアなんて国家機密に触れてる奴知れるわけないじゃん」

「ふーん・・・ポスターはいいとして」

「・・・?」

「これは流石に引いた・・・」

そう言つてクリスは先ほどの雪音クリス抱き枕を取り出す。

「グホア！」

クリスが見せたたん吐血しだし倒れる少年。

「自分の好きな子に好きな子の抱き枕見られた、めっちゃ死にたい・・・」

「ゴイツ・・・そうとう重症だな」

「やっべ恥ずかしくて顔隠したいのに後ろに縛られてるから隠せないつらい・・・」

恥ずかしくて悶える少年にクリスはジト目で見ながら仕方ないと立ち上がつて少年の拘束を外していく。

「ゆ・・・雪音さん?」

「勘違いするな? 少し信用してやるだけだからな!」

「・・・」  
帰る方法もあるしなとちよつと恥ずかしがりながら拘束を解いてやるともう一度少年の方を見ると少年はずつとクリスの方を見ておりどうした?と少年の前で手を翳してあることに気付く。

「・・・」

「コイツ・・・気絶してる!？」

恥ずかしがるクリスの顔を見た瞬間気絶したようだ。

## 5話 日本からタイは5時間かかります

ジュウ……

「いやー、まさか雪音さんが現代世界に来るとは思わなかったなあ」  
トントントン……

「ずいぶんと冷静に言うけどこれ、かなりやばい事だぞ?」

ジュウ……サツサ……

「そうだけど今の俺じゃ考えたところで答えなんて出ないよ。ただの一般ピーポーに出来ることなんてたかが知れてるわけだし」

トロー……

「まあ確かにそうだけども……」

コト……

「ハイ、お待たせ……」

「……ありがとう」

気絶から復活した少年は起きてからまだ朝食を作ってなかった為良かったら食べる?とクリスに提案し、クリスはそれに賛成し食卓を二人で囲むことになったのだが。

「なあ、アンタ……親は?」

周りを見たクリスはどこかいた形跡はあるのだが少年の親がいないことに疑問を持ち少年に質問をする。

「両親なら今タイにいるよ、母親がタイの人で父親が日本、そして俺はハーフでございます」

「へえ全然ハーフつてのには見えないけど」

「そりゃね、育ちのほとんどは日本だし言葉だってタイ語はからつきしよ。まあ、なんて言っているのかは感覚で分かるんだけど」

「でっなんで両親だけで?」

「ばあちゃんの葬式だよ、俺は幼少期しか関わってないし向こう行ってもなあってやめた」

そう言っって少年は朝食を持ってきて食卓に置いていく。

朝食メニュー

ご飯・コンソメスープ・チーズハンバーグ

「……ごめんなさい」

「……?……ああ、大丈夫だよ。俺は別に……高校もあるしね両親いないぶん好き勝手できるし……ほら早く食べて、冷めちゃうぜ」  
謝るクリスマスに平気な顔で答えては早く食べてと催促する。

「わかった……いただきます」

「召し上がれ……」

食べるクリスマスを見ながらじつくりと眺めうんうんと笑顔で見れば、少年も食べ始める。

「……うま!このハンバーグ凄いうまい!」

「おっホントか!いやあ雪音さんに絶賛されるとめっちゃうれしいねえ!」

もつもつとハンバーグを頬張るクリスマスを見てめっちゃ可愛いと思ひ。

「めっちゃ可愛い……」

「……また、言ってる」

ジト目で見て来るクリスマスにあつやつべと笑って見せて、食事をすすめる。

「ほんとに……そうゆうのは好きなやつに言ってやれよ……」

何度も言われ続けてもまだ慣れないのか頬を赤くしながらスープを啜ってはこの顔も見られたくないとそっぽを向く。

「……?俺は雪音さん一筋ですが?」

「……!うっさい!静かに食わせろ!」

「へい……黙りませう」

クリスマスに布巾を顔面に投げつけられ静かに食べることにする少年。布巾が顔にへばり付いた為、その時のクリスマスの赤面顔は見れなかった。

## 6話 記憶抹消

「さて雪音さんやい、俺たちは今ご飯を食べた後あることに気付いてしまったんですが……」

「いや、突然深刻そうな顔してるけどなんも説明してないからわかるわけないだろ」

突然机の上で某礎なんたらポーズで説明をしだす少年に冷静に返すクリス。

「……俺はこれから学校に行かねばなんのです……」

「おう……」

「それでもって雪音さんは必然的にお留守番という形になるのですがよろしいので？」

そう、少年は学生の為これから高校に行かねばならない。その為クリスに一人にしてしまう為、心配をしていたのだが……

「なんだ？別にどこもいかないぞ」

「まじ？てつきり調べに外に出ていきそうだったし」

「うっ……まあこの世界の事も調べないといけないしな！」

「でしようね……」

「……」

此処の事も調べたいが一人で調べるよりかは此処の事を自分より知ってる人、つまり少年といたほうが効率がいいと考え、その事を言おうと思っただが少年の事だからきつと……

『雪音さんと一緒に調べ物ができる？……ウツ（即死）』

とか変な事言って尊死的な行動をとるとめんどくさいと思ひあえて何も言わずにすることにした。

「なにも直ぐに帰れるわけじゃないんだからな。しばらくはにやつかいになる……」

「……つまり同棲……雪音さんと!?……ウツ（即死）」

「何をやってもこうなるのかよー！」

等と会話をした後少年によりしくと言われ少年は高校に向かい自



転車を走らせていく。

「・・・とまあ一人になっちゃったわけだけど・・・」

少年を見送った後クリスは少年のベットに座り込んではどうするか考える。

「・・・そういえば確かアタシ達の事のDVDがあつたな・・・」

そう言つて特に気にすることなく自分たちの姿が描かれているDVD『戦姫絶唱シンフォギア』手を掛ける。

「そんで寝て起きたら雪音さんが横で寝てたんですよ」

「いや、なに寝ぼけた事言つてんの？」

教室のHRが終了し休み時間、少年は親友と雑談しながら今朝の出来事を

話すがあまりにも信用性がないため信じてもらえずにいた。

「いや、ほんとだつて朝食だつて一緒に食つたし！」

「いやだつてねえ・・・アニメキャラが来るなんてそんな不思議な事世界が減んでもあり得ないだろ。せめてホームステイとかなら信憑性あるんだけど」

「まあ、そうなんだけどさ・・・」

親友の確かな正論に口が出せずにどもつてしまう。

「そもそもさつきから言つてるその子なんだけど」

「おつおう・・・雪音さんだろ？」

ずっと気になっていたのか少年に問いかける。

「そうそう、その雪音さんって誰だよ？」

「・・・はっ。」

その頃少年宅

「・・・アーマページしてるところまで映ってるとか嘘だろ!？」

## 7話 記憶隠して記録隠さず

「雪音さんを知らないってずっと俺がクリスマスちゃんまじ可愛ええって推してたキャラじゃん忘れたんか?」

親友の発した発言に疑問を持ち再確認しようともう一度確認しようとする。

「ん〜初めて聞いたけど・・・なんならその戦姫絶唱シンフォギアっていうのも知らないよ」

「・・・ウツソだろ」

クリスマスどころか作品自体も知らないということに唾然とし自分の席に座る。

「ん?どうしたんだよ急に黙っちゃって」

「ごめん・・・ちよつと考えるから」

「おっおう・・・」

(雪音さんどころかシンフォギアの事も忘れてるって・・・もしかして雪音さんがこつちに来たから?)

皆の記憶からシンフォギアだけ消えた理由を考え、大まかな理由としてクリスマスがこつちに来たからと推測を立てるのだが・・・

「そもそも・・・なんで雪音さんがこつちに来たんだろ・・・」

そう考えるがやはりこれが正しく正解というところまではいかずこの事を考えるだけで一日の授業を終える。

「・・・解せぬ(ω・ω)」

「いや自業自得でしょ・・・」

少年宅

「・・・」

あれからクリスマスは2期まで見終わりDVDを取り出してそれをし

まい、その場で大きく息を吸うと膝を付いて・・・

「・・・アタシの裸・・・映りすぎだろ」

今までの自分の行動がこの円盤に全て詰まっている事を知っている事に驚きしかもまだ先の話がこんなにもあることに絶望していた。

「やばい・・・これ以上はアタシがもたなくなりそう」

自分の活躍するシーンを見るのは別に何ともなかったのだがきわどいシーンのアップや他人に見られたくないシーンのアップに関してだけはとてもじゃないが恥ずかしすぎて項垂れていた。

「・・・つまりアイツ、これ全部見たつてことになるよな」

そう、このDVDは彼の物であるから自分のいろんなシーンを余すことなく見たということになる。そしてなりより彼は雪音クリスマス大好き人間、クリスマス情報はだいたい把握していても過言ではない。

「乙女の秘密を知ったんだ・・・これぐらいは罰当たることはないだろ」  
拳を固めて不適な笑みを浮かべる。

「ククツ・・・早くアイツが帰った時の驚く顔が見たいなあ」

「ただいまー雪音さんちよつと聞きたい事・・・が・・・」

家に到着すると直ぐに違和感を感じた。

「・・・あれ？なんかいい匂いが・・・」

入るなり謎のいい香りが少年の鼻に入ってくる。

「よお、いい時間に帰ってきたなご飯できてるぞ」

そう言つてクリスマスはちよいちよいと手招きをして案内をする。

「雪音さんの・・・ご飯・・・手料理!？」

「なんだよ・・・居候の身なんだからこれぐらいやるぞ?」

「あつ・・・そうなの?別にいいのに・・・」

「別にいいんだぜ?アタシの料理食わないなら」是非いただきます!!」  
おおう・・・」

クリスマスの手料理に驚きテーブルを見るとそこにはオムライスがテーブルに乗っかっており、居候の身であるからこれぐらいはと自分の頬を搔いては少し照れたりして少年はマジマジとオムライス

を眺めては食べたいですと気合いのこもった声であげる。

「それじゃあ早速いただいても?」

「ああ・・・いいぜ。存分にたべやがれ」

「雪音さんの手料理とか最高すぎる!いただきます・・・」

「あつそうそうそう言えばDVDみたぞ」

「パクツ・・・!!」

うれしそうな顔で一口食べると同時にクリスの口からとんでもない発言を聞き固まる少年。

「・・・」

「まさかアタシのシーンがあんな風にでてるなんて思ってもみなかったぜ」

「・・・」

クリスの言葉をきちんと聞く少年。少年はわかっていたのだ。クリスに見られたという意味がどうゆうことになるのか。それよりも先ほどから口に入っているオムライスに異変を感じる。

「ゴフウ!・・・ゲホオつゴホオ・・・ゆつ雪音さんまさか?」

「そう・・・そのまさか・・・」

オムライスを飲み込むと喉の痛みと舌の痛みが同時にやってきて突然せき込み咽せ始クリスを見る。

「お前・・・見たんだよな?」

「・・・はい・・・」

何を見たのかはすでにわかりきっていた。

少年は口の中の物を洗い流そうとコップに手を伸ばそうとするがそれをクリスが止める。

「・・・」

「あの・・・雪音さん?・・・」

おそるおそる少年はクリスの顔を見るとクリスはとてもいい顔で少年を見ていた。

「乙女の裸を見たんだからこれぐらい安いだろ?食べてくれるよな水無しでアタシの特性『ハバネロオムライス』」

「・・・ひゃい・・・」

その後少年の家で悲鳴が聞こえたのは言うまでもなからう。

## 8話 1人は寂しいもの

「・・・くっひゃほ（食ったぞ）・・・」

「本当に全部食べるとか・・・お前アタシが言うのもなんだけどほんとに馬鹿なんだな」

あの後ハバネロオムライスを完食し、水をたらふく飲んで回復する。

「なに言ってるんですかね？俺は出されたものは梅干し以外は全部食う男だぜ・・・それに雪音さんの手料理なんだかファンの俺にはとても幸せでございます」

「やめろお前！土下座すんなー！」

呆れた顔でクリスに言われるもグツとこぶしを握って頷き、とても嬉しい事にクリスの前で土下座を行う。

「・・・あつそうそう雪音さん、今日帰ってくるときに少し調べたんだけどさ」

「・・・あつああ・・・」

思いついたように起き上がって少しわかった情報教えようと炬燵に座りなおすと、それを見たクリスも一緒に炬燵に入って座る。

「簡潔に言えば俺以外シンフォオギアが存在が無かった」

「は？この世界はシンフォオギアなんてないんだろ？」

「あつごめんそこじゃなくてこの『俺の家』を除いて何処もシンフォオギアっていうアニメメがなくなってたんだ」

親友が言ったことが気になり、帰りにアニメイトに寄ったのだがシンフォオギアがなくなっており、またネットでの情報もなくなっていた。

「どうゆうわけかシンフォオギア自体の記録が此処しかないみたいなんだよね・・・だから雪音さんが帰れる方法とかわかるのにかなり時間がかかるかも」

「・・・なるほど」

力になれなくてごめんつと謝り、頭を下げるがクリスは頷いて答え「まあ外の情報なんかアタシにはさっぱりだから正直わかんないけ

ど・・・」

「うん・・・」

「アタシの為に動いてくれたのには・・・まあなんだ・・・ありがとう」  
クリスにとつて突然この世界に呼ばれ、何もできない中、少年の家に居候させてもらった上に帰還の方法も探ってくれた為、改めてお礼を言う。

「それにアタシ達の事知ってる人がお前だけで安心した」

「え?・・・」

「だってこの内容知ってるの、お前だけだし他の奴らが知ってることはないならそれはそれで良い」

「それで良いって・・・あ・・・」

そう言つてクリスが見せたのはクリスが見ていたDVDであった。

「まあこの馬鹿が主人公つてのはなんか癪だけとおかげでアタシがお仕置きできるのはお前だけになった訳だな」

「ええ・・・終わりじゃないんですかい?」

「あつたりまえだろ!まだ全部見れてないんだから」

「うそん・・・」

その後食器を片付け、軽くシャワーを浴びて明日に備えて寝ることにする。

(ベットがクリス・少年が炬燵)

(・・・雪音さん寂しくないのかな・・・)

此処に来てからクリスはずっと一人の為何とかならないかなと考えるが何もできないことからとりあえず回らない頭から思いつくこととはなくそのまま就寝する。

就寝したと同時に彼のスマホが光だししばらく発光しては消える。

そして朝



「……ウウウウ……」

「……むにゃ……」

「……アタシの次はこの馬鹿かよ……」

先に起きたクリスが少年を起こしに来たのだがそこで見たのは苦しそうにしている少年とそれに思い切り抱き締めて寝ている馬鹿（響）の姿があった。

## 9話 そこには怒りの推しがいた

「……えへへ…もう食べられないよ未来う……」

「ウウ……アナコンダはやばい……かなりやばい……死ぬう……」

「……ええ……」

顔を引き攣らせて一緒に寝ている二人を見てクリスは考える……

「アタシの次はこの馬鹿が来るのか……いったいどうなってんだ？」

響は幸せそうに少年に抱き着いて寝ている……少年はそれに完全絞められている為、とても苦しそうな表情をしていながら眠っている。

「……これどうしよう……」

見た感じのカオスぶりに頭を悩ませる。

「たぶんコイツそんな関係ないように見えるけど……ほおっておこう」

朝からツツコムのも疲れてしまったためクリスは考えるのをやめ、二人とは違う位置に座ってあつたまる。

「……あれ私……」

しばらくして目が覚める響。自分が見たことない場所に気付きました何かを抱き締めているのを感じて顔を向けると寝ている少年が目の前に出てくる。

「……え？……ハッ！これはもしかして夢だでないこんな一緒に寝てくれる彼氏なんていないよね!？」

目の前の出来事にまともな思考ができておらず目の前の少年を夢の中の彼氏として見て抱き寄せ……

「えへへえ……夢なら何してもいいよねえ……」

笑顔で少年の顔を近づけさせる唇を近づけさせる響。しかし此処には響と少年だけではなくもう一人いたのである。

「良いわけないだろこの馬鹿あー!」

「あいたあ!？」

「グヌウ!？」

クリスの全力のチョップを響の後頭部にぶつけ、その衝撃でそのま

ま響と少年の額に激突し痛みを悶える。

「いったあいいい……あれ？夢じゃない……あつクリスちゃんいたの？」

「いたもなにも最初からいたわ！なに初対面の人にしかもちゅーしようとしてんだ！」

「だって夢だと思っただもん！私だって春欲しかったんだもん！」

「全力で抱き締めただぞ、よく見るコイツめっちゃ苦しそうじゃねえか」

「いや、それはさつきクリスちゃんが私を殴ったからで……」

「なんか言ったか？……」

「なんでもありません……ゴメンナサイ」

涙目で訴えるもクリスの圧力に負け、直ぐに謝って少年から離れる。

「お前もいつまで寝てんだ！さつきと起きろ！」

そしてまだ寝ながら痛みを悶える少年の方を見て再度額にチョップをかます。

「いったああいいいいい！」

飛び跳ねるように飛び上がり目を覚ますと響が目線に入り。

「雪音さんの次は響がきたあ!?!」

「ど……ども……」

「そのくだりはもうやったわ……」

驚く少年に挨拶する響に呆れるクリス。

「よし……じゃあお前ら起きたところで……正座しな」

「「え？なんで？」」

「聞こえなかったか？……せ……い……ぎ……しろ」

「「あっはい」」

## 10話 正座は続くよいつまでも

「それで・・・立花さんも此処に来ちゃったか」

「立花だなんて、響で良いよ」

「そう？じゃあ遠慮なく・・・響」

「えへへ、なんか歳の近い異性がいなかったからなんか照れるなく」

「おっおう・・・」

「・・・」

正座させられた状態で少年と響の自己紹介が終わり、クリスの時と違って響（少年はじゃっかん引いている）と仲良くなっているのを見てクリスが面白くなさそうに見ていた。

「アタシの時と違ってずいぶんとよろしくやってるんだな。抱き合っ  
て寝てただけの事はあるな」

「え？俺と響抱き合っ  
て寝てたの？寝てたから全然わかんなかったけど」

「危うくキスしちゃうとこだったよ・・・テヘ」

「しかも初対面の人に!?え？響ってこ  
うゆうキャラだっけ!」

「いやコイツは馬鹿なだけだろ」

「だつてえ・・・だつてえ」

少年の起きてない事を良いことに唇を奪おうとしてた響はいやあ危なかったと照れていてそれを見ている少年の心にはキャラが全然違う響の姿に戸惑っているとその横でクリスがフォローを入れてい  
る。

「だつてえ、さつきも言ったけど歳の近い男子の友達もいなかったし、  
いやでもね？未来がいつも一緒にいてくれるから良いんだけどやっ  
ぱりそうゆう異性との交遊が必要かなってずっと思ってたんだけど  
目を開けるとそこにいたもんだから私の夢の中ならなんでもしほう  
だいだしそうゆう練習だつてありだと思っ  
うんだもん」

「・・・なんか、俺の中の響像が崩れる瞬間を感じた」

「この馬鹿に夢見過ぎだ・・・」

マリアが聞いたら絶唱顔で怒られそうな響の発言に少年の中の主

人公響のイメージが崩れ去る。

「あつそう言えば貴方誰なんですか？」

「そこからか・・・なんかツツコムの疲れたよ雪音さん」

「そんな顔でこっちみんな、毎度だぞコレ、知ってるだろ？」

「アツハイ・・・」

「なんで二人ともそんな疲れてるの？」

「・・・ハア」

余りにも響の暴走っぷりに会話も疲れ少年がクリスマスに助けると視線を飛ばし呆れたクリスマスが仕方ないと響に説明をする。

「・・・カクカクシカシカ」

「・・・ええ!? 此処別の世界なの!? そんなもってノイズもないの!？」

「なんかデジャヴ〜」

説明が終わると響は最初にあつたクリスマスと同様の驚きをしてそれを見た少年がクスツと笑う。

「そつそれで今の現状帰る方法がまったくもってないからコイツの家で世話してるってわけだ」

「え? 俺、世話させられてるの? 逆じゃない?」

「・・・」

「正座中なのに膝をつつかないでもらってもいいかなあああああ!?!」

正座している少年の膝をつつくと叫びを上げながら倒れてしびれに悶えていく。

「それじゃあ・・・私もこれから此処でお世話になればいいんだね!」

「まあ・・・それが一番なんだけど・・・」

事実響達の世界がわかるのはこの家だけしかないのですそのほうがいいのだがクリスマスは少年を見て

「やっばい・・・痺れすぎて卑猥な声でちやう!・・・っう!」

「・・・アタシ達・・・帰れるのか?」

「あ・・・あのクリスマスちゃん、私もそろそろ崩したいかな? なんて」

「あ、、?」

「すみません・・・」

## 11話 お金?・野暮な事は聞いちやいけねえ

クリスマスと響がやってきて数時間、少年は幸いにも今日は休日であり二人の生活必需品を買いにデパート【パケットマーケット】に来ていた。「はい、とゆう訳でパケットマーケット略してパケマに来ましたこれより二人の生活に欠かせないもの買っていただきたいと思っています」「お〜」

「良いのか?アタシたちにごこまでして」

自分たちは迷い人であると同時に一応少年に迷惑を掛けているうえに此処までしてもらうのは気が引けたのか、申し訳なさそうに聞いてくる。

「何をいまさら、乗り込んだ船だしいくらでも付き合つてやるよそれに・・・」

「それに?」

「こんな雪音さん達と買い物ができるなんて夢でしかできないことが現実でできるなんて幸福すぎてやばい・・・」

「さっきまでのアタシの罪悪感返せ!」

「(・ω・)」

クリスマスイッチが入り少年は自分の顔に手を当てて嬉しそうにするのだがそれを見て悪いなあと思っていたクリスマスが罪悪感に駆られていたのがバカバカしく思いツツコミを入れる。

「まあ・・・やっぱり響も来た事だしさ、生活に必要な物はそろえたほうが良いと思うんだ」

「確かにそれはそうだけど・・・」

「?」

先程から少年の言っている一つの単語がずっと気になっていてクリスマスはずっと少年の方を見て

「あの馬鹿にはちゃんと名前呼び合ってるのにアタシにはないのか?」

「・・・あつ・・・と・・・」

そうクリスマスの事は名字で呼んでいた為クリスマスはずっとそれが気に

なっていた。

「一緒に住んでんだ、別にアタシの事も下で呼んでもらっても……良いぞ?」

そう言ってクリスは正直に話す少し恥ずかしくなるが真っ直ぐ少年を見る。

「あ……うん。じゃあ……クリス」

「よろしい」

そう言ってクリスは満足したのか少年を置いて響のところに向かっていきその姿を見送っている少年は自分の口元に手を当て

「……やばい本人の前で下で呼ぶの……滅茶苦茶恥ずかしい……」

顔は隠しているが表情の方は恥ずかしく真っ赤に染めていて、しばらくその場から動くことが出来なかった。

「さあ、行くぞって……なんだよその顔」

響のところに行ってきたクリスは何やらニヤニヤしている響がこつちを見ていてなんでニヤニヤしているのかわかってはいたがとりあえず聞いてみることにする。

「クリスちゃん、良かったね」

「!……うっさい」

響は察していたのかクリスの顔を見ては笑っていて嬉しそうに言う、面と向かって言われたクリスは顔を赤く染める。

「……マジで恥ずかしい」

二人は同時に同じセリフを言うが二人は互いに気づくことなくそのままデパートの買い物続けることにする。

「……」

少年達が歩いているところを眺めている少し小柄な人物が物陰から覗いていた。

## 12話 少年はダメージを負った!

「それじゃあ日用品でここから行こう」

響とクリスの服を調達する為に洋服店にやってきたのだが

「じゃあ、俺は別のところに行くからごゆつく・・・」

女性の洋服は普通に二人に任せようと二人に手を振って別れようと後ろを向くと、響に腕を掴まれる。

「・・・あの、響さん?この腕はなんですか?」

「いやあ、せつかくだから私たちの洋服をコーディネートしてもらおうかなって・・・」

「ふえ!?それはクリスに見てもらいなよ。俺だってそんな女子の洋服なんて詳しくないから無理だぞ」

「・・・クリスちゃんに自分の選んだ服、来てもらいたいと思いません?」

「よし、ついていこう」

「お前ちよろすぎだろ・・・」

女性用の服なんて全然気にする事なんてなかったから女子二人で見てもらった方がいいと思いい任せるつもりでいたのだが響に腕を掴まれ問いかけるとまさかの選んでもらおうと連れていかれて断ろうとするも響の提案に直ぐに乗っかりそれを後ろから見ていたクリスに呆れられていた。

「じゃーん!どうかな?似合う?」

「おおー、可愛い可愛い」

「悪くはねえ・・・」

シャーッと試着室から出てくる響の姿に拍手をする少年とクリス。

「・・・なんだよ・・・」

「ウツ・・・(気絶)」

「お前まで!?!」

クリスの姿を見て可愛さのあまり気絶する二人。

そんなこんなで洋服選びを楽しんでいる中、少し休憩の為にレストラン等のコーナーにやってくる。



「ご飯♪(´)飯♪」

「うつわすつごいご飯の量」

この時間の食べ放題コースを予約していた為入って注文をするやいなや響がご飯を大量に注文しご飯がやってきた量に驚いて感想を言う。

「コイツ食べ放題でも容赦しないからな」

「え、そうなの?」

響の様子を見てクリスはいつも見ている為あっけらかんとして答え響の方を見ていると少年の視線を感じては少し照れたように

「いやあ、そんな情熱的に見られると照れるなあ」

「むしろ冷めた目で見ているんですが、響のポジティブレベル高くない?」

「それがこの馬鹿だから・・・」

「二人とも酷い!」

楽しそうに会話していきクリスの荒い食べ方を見てまたも少年が死にかけたりしたのは言うまでもなかった。

「いやあ食べた食べたごちそうさまでした!」

「食べ放題じゃなかったら俺の財布が絶唱するところでした」

「ごっから先は外食は食べ放題のほうがいいかもな」

レストランから出てきて満足そうにしている響とレシートで注文した量を見て少年は食べ放題じゃなかったらと思うと恐怖で戦慄していた。

「・・・」

帰宅しようかと荷物を持って帰ろうかと歩いていると誰かの視線をクリスを感じ取る。

「・・・?なあ、あの小さい奴ずっとごっち見てるんだけど」

「ん?誰が・・・あ・・・」

クリスが少年に問いかけ、少年も向けられた視線えお辿るとそこには少年にとっては見知った小柄な男子がおり、見つけると見知った小柄な少年がごっちに寄ってくる。

「和君何してるの?」

「健太・・・」

「・・・？知り合い」

歩いてきた小柄な少年・健太が近づけば少年は知り合いに会うとは思わず気まずそうにしている。

「あつ初めまして・・・僕、甥っ子の健太です」

「あつこれはどうもご丁寧に・・・」

「甥っ子なのか・・・初めまして・・・」

律儀にお辞儀をする健太に響とクリスもつられてお辞儀をする。

「健太・・・詳しい話は後でしてあげるから今日はもう帰って良い？」

少年は焦っているのか健太から距離をとって早く帰りたいなあと目をそらしてそれを見て疑問に思ったのかクリスは問いかける。

「なんでだ？甥っ子なんだから話とかあるだろ？」

「あついやええと・・・そうんだけど・・・なんていうかその・・・」  
「・・・？」

なんて言えば良いのかわからないのか少年はどもっておりそれを見て健太は首を傾げて爆弾を投下する。

「それにしても良く立ち直れたね、この前なんか告白して玉砕されたっていうのに」

「んゝんゝ!!」

「え!?!」

言っただけでほしくなかった健太の一言に少年は唇を噛んでやられた顔をしそれを聞いた二人は驚いて少年を見る。

「やめてくれ・・・健太・・・その言葉は俺に効く」

今の少年の気持ちは逃げたい気持ちでいっぱいになっていた。

### 13話 これ以上はダメ

「健太君その話詳しく!」

「え?えっと・・・」

「やめてもらってもいいかなあ!?!」

「まあまあいいじゃねえかアタシも聞きたいし」

「俺の黒歴史広げないでえ!」

響が健太の肩を掴んでずいっと興味を持つて話を聞こうとして少年が止めに入るもそれをクリスが静止し知られたくないのか嫌がっているがそれも次の一言で黙ることになる。

「いいじゃん・・・お前も【アタシ達】の黒歴史しってるもんな・・・」

「・・・どうぞ・・・私の玉砕録を堪能シテクダサイ」

「えっと確か中学から卒業までずっと隣の席の女の子に片思いして卒業で告白したのに返事が『ごめんね、いい友達ってしか見てなかったの』んで結局恋愛対象に見られること無くその日泣き崩れてそこからアニオタガチ勢に入ったと・・・でおけ?」

「健太・・・泣いていい?」

概ね健太の言ってる事はだいたいあっている為膝を付いて泣き崩れそれを響がヨシヨシと頭を撫でてあげる。

「・・・(なるほどだからコイツはシンフォギアなんてアニメを見るようになったのか)」

「まあ和君劇的な玉砕から立ち直ったらアニメにはしりだしちゃったからね、アニメにかまけ過ぎて犯罪者予備軍に入ったら甥っ子として恥ずかしいよ」

「グフ・・・容赦すぎ」

淡々としゃべり続ける甥っ子に泣き顔でさらに崩れ落ちる。

「でも良かったよちゃんとアニメに走らないでちゃんと彼女作れて」

「ウツ・・・」

甥っ子の言葉に少年はまた口を塞ぐ。

確かに今は女の子と一緒にいるが良く考えれば彼女達は此処の世界の人ではない、どう説明すればいいのか考えると更に爆弾を投下す

る。

「ところで・・・二人の内、どっちが彼女さんなの？」

「「!?!」」

此処で甥っ子の純粋な質問なのか聞いてきて3人は固まる。確かに一緒には住んでいるがそういう対象として見ることは無かった。

「いや別に彼女はまだ」「はい！私だよ」「はい!?!」

「ついでに言えば一緒に寝たよ!」

「ホント!?そこまで進んでたんだ!」

「ちよおつと、まてえええいいい!」

少年が違うと否定しようとすると意外にも響が手を上げて彼女宣言をしたのだ。

それを聞いて当然少年とクリスは驚き甥っ子を一旦待たせ、響を連れて問い詰める。

「おい馬鹿どうゆうつもりだ!?!」

「そうだぞ響！否定しようとしたのに健太の奴信じ込んでしまうじゃないか」

各々響に伝え、言ってしまった事が取り消せないところまで来てしまい問いかけるが。

「だって健太君ずっと心配してたんだよ？安心させるにはこれがいいかなって」

「だとしても彼女だなんて・・・」

「そっそうだぞ・・・アタシ達はいつか帰らないといけないんだぞ!」

「だったらそれまででもいいよ。それともクリスちゃんや和君の彼女やる?」

「な!?!」

「はい!?!」

どうやら響は甥っ子が少年の事を心配していたらしくほんとに安心させるためにわざわざ自分を犠牲にして安心させるために言ってくれたらしい。

響の事を聞いて少年はどもってしまいがクリスは此処の人ではないたためまずいと伝えるが響はこうゆうときだけ頭を働かせそれまで

はいてあげると答えさらにはクリスマスにも彼女になればいいと答え二人はさらに驚く。

「どうせ私たちは一緒に住んでるんだから問題ないよね？」

「え……あ……」

「……？」

響の言葉に詰まってしまつてクリスマスは少年の方を見るが少年はわからずクリスマスを見ては首を傾げクリスマスは何か考えると顔を赤くして今度は目を。

「アタシは別に……それならいんじゃないか？」

「え!?クリスマス？」

「やった!じゃあそれで行こうね！」

「あっおい！」

「あっ……」

まさかのクリスマスが根負けし肯定してしまい響がガッツポーズをして少年を連れて甥っ子のところに戻っていきその姿をクリスマスは眺めるだけで何もすることは無かった。

その後甥っ子に説明をし、解散帰宅をすることになり帰宅したのだが響はとても笑顔で少年とクリスマスは静かにしてその日の一日が終わることになる。

三人がいたデパートの家電コーナーのテレビにて

『先ほど入ったニュースです、タイの首都バンコクのデパートでテロリストによる爆破が行われたとのこと、尚この爆発に巻き込まれた者の中に「一人」の日本人男性が巻き込まれているとの情報が入り現在身元の確認を急いでいます』

## 14話 信じたくない

「なあ響さん俺の言いたい事わかりますよね？」

「はい……」

「……」

正座して大人しくしている響、それを黙ってみるクリス、そして響の前に立っている少年。

「そうかじゃああえて言わせてもらおうか……なんでまた俺を抱き枕にしてるのかな？」

「だって……和君最初の時も暖かかったしそれに……」

「それに?……」

「……」

「もう私達、付き合ってるから良いでしょ？」

「ツ!……」

「それか……」

甥っ子の為に言った事を本気に行っているらしく少年に大量のアップローチを掛けていた。ちなみに今回は少年が寝ている炬燵に潜り込み抱き着いて寝ていた（尚それを見つけたクリスにまた怒られている）。

クリスが響の言葉に大きく肩を震わし、少年はため息を付いて

「あのなあ響、健太の為に言ってくれたのは感謝してるけどな、別にそこまで合わせる必要ないよ。それに響だって初彼が俺なんてやめとけ」

「私は構わないよ?それに和君なら全然」

「ブツ!」

やらなくてもいいと思つて伝えるが響は構わず続けたいと答え、それを聞いて少年は盛大に嘖き出す。

「え? なっなんで!?!」

「だって私和君の事好きだもん」

「……はあ……」

響の思わぬ発言に二人は茫然と響を見る。

「・・・それはLike?love?」

「loveだよ」

「マジか・・・」

「なっなあ・・・」

少年が確認をするがその想像してた言葉でまさか響から言われるとは思ってなく座りクリスは響に問いかけようとする。

「一応聞くけど・・・いつから?」

「初めて見た時からだけど・・・あっこれって一目惚れってやつかな」  
「なっなるほど・・・」

そう言うのと響は照れたように答え、それを聞いたクリスは少年と同じように座る。

「・・・よし、じゃあテレビでも見ようか」

なんとも言えない空気になり変えようと少年は先ほどの怒りも忘れテレビを付ける。

『入りました情報ですタイの首都バンコクのデパートにて起こった爆破テロについてですが・・・』

「タイでテロ・・・随分と物騒な事件だね」

「あっうんそうだね・・・」

「確かお前の両親もタイにいるんだったな」

「うんそうだよ流星に巻き込まれる訳・・・」

『爆破テロに巻き込まれた日本人男性の名前は〇〇勝65歳無職妻と共にタイに訪れており妻であるリーンも同様に亡くなっており、また調べによりますとこの男性は歩行が不安定であり介助が必要でありその為逃走が間に合わず巻き込まれたか・・・』

「・・・おい、これって」

「ん?どうしたのクリスちゃん・・・和君?」

「なんだよ・・・コレ・・・」

クリスは少年から両親の事を聞いていた為まさかと思いい少年を見て、響も同様に少年を見るが明らかに様子がおかしいことに気付く。

「嘘だろ・・・おい」

だが少年の信じたくなかった思いは伝わることは無くテレビに

映った二人の写真は紛れもなく少年の両親の顔であった。



## 15話 集まる者達

「くそっ繋がらねえ！」

「ちよつと、おい！」

「え？和君？」

少年の動きは速かった。国際電話で両親につなげようにも案の定繋がることはなく、それでも電話を続ける姿はとてみどく、それを見た響は察してしまったのかクリスに問いかける。

「クリスちゃん……もしかしてニュースにでてた犠牲者って……」

「ああ……アイツのパパさんとママさんだ」

そう言っただけクリスはこの部屋の中にある額縁を響に見せるとニュースで出てきた顔と一致し、驚愕する。

「嘘……」

信じられないように見ただけから響は少年を見ると少年はうなだれるように座り込んでいた。

「……なんで……繋がらないんだよ……」

「和君……」

「……」

繋がらない携帯を握りしめては俯き、響は少年の背中を優しくさすってやり、クリスは何かと重なる事があるのか何も言わずただ少年を見る事しかできなかった。

「これから……どうすればいいんだよ……誰か……誰でもいいから……教えてくれよ……」

この時ある異変にクリスと響は気づく。少年の手に握られている携帯、スマホが光りだしていたのだ。

「おっおい……それ」

「和君……それって」

「……え……うあ!？」

二人の指摘に気付いた少年は携帯を見ると少年も光に気付き、気付くと同時に強い閃光が三人の視界を真っ白に染め上げる。

「うっなに……が……!？」

「・・・うそだろ・・・」

「二人と大丈夫・・・夫・・・え？」

三人の視界が元に戻るとそこに驚く者がいた。

「いたた・・・切ちゃん大丈夫？」

「うう・・・何が起きたデスかあ？」

「私にもわからないわ・・・」

「ここはいつたい・・・！雪音か!？」

「先輩じゃないか!！」

「響い!！」

「未来!！」

「これは・・・転移、ですか?！」

そこにいたのはマリア、切歌、調、翼、エルフナイン、未来のシンフォギアの主要メンバーがおり、この部屋に全員がそろそろ事となった。

「響!心配したんだよ・・・クリスと一緒に行方不明になったからずっと探してんだから」

「ごめん、未来・・・でも、今はそれどころじゃないんだ」

「え?それってどうゆう・・・」

そう言つて響は少年の方を見て未来達もつられて少年の方を見る。

「えつと貴方は?・・・」

「なんで・・・みんなが・・・!？」

少年はなにかに気付いて自分の口に手を当てる

「まさか・・・まさか・・・!！」

少年は思い出す。クリスがどうしてこつちに来たのか。

『クリスが欲しい』

響がどうしてこれたのか。

『クリスを一人で寂しい思いさせたくない』

そして最後。

『誰か・・・誰でもいいから・・・教えてくれ』

此処にいる皆ある条件からこちらの世界に来ていた。では条件とは、それは・・・

「もしかして・・・俺が、願ったからか・・・!?」

それに気づいた瞬間ドクンッ!と少年の心臓を掴むような感覚におちいり、その場に倒れこんでいき苦しみます。

「・・・!・・・和君!」

「あつ・・・があ!」

「おい、どうした!」

響とクリスが同時に少年の元に寄りそれに続いて他の者達も近寄る。

「デデデース!」

「どうゆうことなの二人とも!」

「いやそれよりもこの少年を!」

他も慌てて少年を見ておりもうこの部屋はパニックにおちいつてしまった、そんな中少年は口にできない状態で苦しみ視界が悪くなり、皆を見て

(そうか・・・俺の・・・せいなんだな)

そう意識した瞬間、少年の意識が消える。

## 16話 後悔と謎

「・・・」

目が覚めるとそこは自分の部屋ではなく鼻に薬品の匂いを感じ取る事ができ、病院に運ばれたと理解をする。

自分の足元に重はさを感じ起き上がると響が少年の太ももの部分を枕に置いて眠っていた。

「そっか、俺・・・夢じゃなかったんだな」

両親の死を感じ取り、そして響達がやってきた原因の判明・・・

「俺が願うと・・・それが現実になる・・・」

そう言っつて自分の手を見てから響の方を見る。

「・・・スウ・・・」

相変わらず響は静かに寝ており少年の近くにいるためか嬉しそうな顔をしていた。

それを見てから再度自分の手を見て響に向けて手を伸ばす。

(もし・・・俺が願えば響は・・・クリスは帰れるのでは?)

そう言っつてその手は響の方に近づきそして・・・

「なにやってんだ?」

「!・・・」

声が出た瞬間手を引つ込める。

クリスがやってきていたのだ。

「クリス・・・か」

「おう・・・良かったな目が覚めて」

「・・・良くは、ないかな」

「だろうな・・・」

クリスは少し大人しくなってしまった少年を見ては両親の事について少し話をする。

「なあ・・・あんたのパパさんとママさんの事、聞いていいか?」

「・・・」

少年は少し考えてから口を開いて

「父さんって俺が産まれてから足が悪くなったんだ。ずっと座り込ん

だ生活でも良くしてくれてた。」

「・・・うん」

少年の話にまじめんに聞いては相槌を打って頷いてくれた。

「俺が小さい頃はまだリハビリ程度だつて歩行器使えば多少は歩けたけど中学にはもう・・・駄目になっちゃった」

「・・・」

「それでも父さんはリハビリもやり通してようやく海外に行く許可が医者からもらったんだ」

「そうか・・・」

「母さんも喜んでたよ、父さんが許可もらって一緒にばあちゃんの葬式にも連れていけるって何言ってるかわかんないタイ語で喋っては向こうにいる姉妹と話してたよ。だから俺は高校もあるし二人で行ってこいつに進めたのんだ」

「そっか・・・」

自然と話していくうちに握っていた布団に力が込められていく。

「だけど・・・なんで・・・なんであの人達が死ななくちゃならなかったんだよ！なんであの時一緒にいられなかったんだよ！」

「・・・」

ポタポタと少年の瞳から涙が零れ始めて視界が歪んでいく。

「まだ・・・父さんと母さんが帰った時の為に考えたご飯だつてあるのに・・・クリスマス達の事・・・紹介したかったのに・・・こんなのって」

そう言っただけ少年は自分の瞳を隠すように手を翳しては震えはじめ

「人の死に方じゃねえよ・・・」

そう言っただけ何か壊れたように少年は泣きはじめクリスマスは黙って少年の背中をさすってやり響はまだ寝た体制でいるが目が覚めていて少年がしゃべり始めたあたりからずっと聞いていた。

病室には少年の声が響き渡りその外では他の装者達も来ており廊下で少年の声を聞いていた。

「・・・とんでもないところに来てしまったな」

「ええ・・・そうね」

翼は少年の病室を見て眩きマリアも一緒に見ていく。

「今は話ができる状況じゃないみたいデス・・・」

「・・・ジーン」

少年達の様子を扉越しから見つめる切歌と調コンビ。  
そこにエルフナインと未来がやってくる。

「お待たせしました皆さん」

「あの人は目が覚めたんですか?」

「ああ、今しがた起きて雪音達と話していたよ」

そう言っつて翼が視線を送ると未来達も少年の方を見る。

「・・・普通そうですね」

「・・・む、普通そうとはどうゆうことだ」

泣いている少年を見ては違う視点で見えていた為か未来は違った感想を言っつて気になったのか翼が問いかける。

「あつごめんささい、普通そうっつて言ったのは」

そう言っつて続けようとするエルフナインが止めに入り、代わりに答えると皆の方に向きなおす。

「今先生から聞いた話なんですけど彼・・・大木和雪さんの身体が少しおかしいんです」

「おかしいって?」

「はい、おかしいといっつても外見は変わらないのですが問題は和雪さんの細胞です」

エルフナインが出してきた紙には少年の事が書かれていて検査結果がかかっていた。

「あの人が倒れ、運ばれて検査した時彼の中の細胞の経絡系がほとんど損傷していて体中がボロボロになっていましたけど・・・」

「その途中に損傷していた細胞が検査中に修復されたんです・・・すべての細胞がです」

「なに?それはいつたい・・・」

「そうなんです、そしてその写真を見てください」

「・・・!」

もう一枚レントゲンの写真のコピーを見るとそこに映っているあり得ないものがあり翼とマリアは驚いてエルフナインを見る。

「これは医者の中には何も見えていないと言っていました」

「そうです、これは僕たちにはしか見えないらしいんです」

そう言って翼たちはもう一度写真を見る。

そこに映っていたのは少年の心臓を中心に枝のような物が彼の全身を回っていて少年の心臓を覆うように纏っており、さらにそこから全身に伸びていた。

「もしかしたらあの人はボク達の知らない謎の力があると思います。

それこそボク達を呼ぶ事ができるほどの強力な力を代償を払って」

## 17話 初めまして

その後無事退院できた少年は家の前で立ち止まってある事に気付く。

「……ん……どうしたの、入らないの？」

「……そう言えば気絶する前に翼とかマリア達を呼んじゃったよな」  
「確かに、あの時は驚いたな」

扉の前で少年が後ろの二人の方に向きなおし。

「……わかつてはいるけどもしかして……」

「……あ〜」

少年が危惧していたのはDVDの事だった。以前クリスに見られていた為、見られたらやばいと思い、片してあるかなとクリスの方に視線を送るとクリスは理解したようにポンつと手を置き少年の方にOKサインを送り

「バツチリだぜ」

「そうか……良かった」

「全員視聴完了してる」

「ド畜生が……」

荷物を置いてはがつくりと項垂れ入るのを躊躇いさらに追い打ちを掛けるようにクリスがたたみかける。

「みんな平等にやられな」

「そんなあ……」

「大丈夫だよ！和君の事はしっかり説明しといたから」  
「……ちなみにどんな紹介したの？」

響がしつかりとしたフォローしたと言っていたが少年は響の事だから変な紹介されてそうな気がして聞いてみる。

「この世界でできた私の彼氏だよって言ってあげたよ！」

「とんでもない紹介をしてくれたなあ！」

「ふえ？」

響がドヤ顔で答えるが少年がすぐさまつつこみ響は何を怒っているのかわからず首を傾げている。



「そんな事言ったら皆驚くに決まってるだろうに！」

「そうそう響が彼氏できたって言われたときはほんとにビックリしたんだから」

「ほらな未来だって驚くに決まってるし何より俺が怖い！・・・ん？」

少年が説明をすると後ろから未来の声が聞こえ同調するように答えると少年は誰と同調したのか一瞬理解が遅れ、理解ができると少年お顔が真っ青に染まる。

「・・・あつと・・・初めまして・・・」

「はい、初めまして和雪さん。響の『大事な親友』の小日向未来です」  
首だけを動かし後ろを見ると未来が笑顔でその場に佇んでおり、とりあえず挨拶をするが未来の含みのある挨拶に負けて汗を流す。

「響がとってもお世話になったみたいであります」

「お世話だなんて・・・全くです」

律儀にお辞儀をする未来に少年は90°。直角お辞儀をする。なおクリスは横で笑っている。

「響がいなくなった間良く知りたいな・・・もちろん、和雪さんの事も」

「ヒエ・・・」

未来の瞳がとても冷えきっていてその場の空気が完全に極寒に変わる。

「楽しい話聞けるといいですよね・・・和雪さん？」

「・・・ハイ」

## 18話 部屋は片付けよう

「……」

少年の家の中で少年は正座していた。

「初めまして……知ってるとは思うけど私はマリア・カデンツァヴァ・イヴ。マリアでいいわ」

「アタシは暁切歌デース！」

「ん……月読調」

「僕はエルフナインです」

「風鳴翼だ……よろしく頼む」

「……コイツあトンでもねえ事になったな。いや、俺のせいだけでもそれぞれの自己紹介を受けそれぞれの顔を確認した後、手を置いて俯いたまま答えて震える。

「結局はこうなっちゃったな」

「いやまあ良かったよお前は寝てた時だったからだけど今回は誰も和君と一緒に寝ることは無かったね！」

「ちよつと、響さん？余計な事言わないでもらって良いですか？話がややこしくなりそう」

また目の前で余計な事を言ってしまう響に少年は急いで黙ってもしらおうと手を打とうとするが……

「へへ、和雪さん響と一緒に寝てたんだあ」

「ほらあーやっぱり」

響警察ごと未来が少年の両肩を優しくつかみ微笑みながら力を入れていく。

「だってえ未来との間には隠し事しない方がいいと思ひましてえ」

「なんで照れたように言ってるんですかねえ。痛い、未来さん痛い！なんで強く握るんですかあ!?!とゆうかそのペアもなんで混ざってるのお!?!」

「……面白そ……ゲフンゲフン楽しそうだから」

「アタシ達も混ざるのデース！」

いつの間にか3人でコントのようにやってるのを見て何故か混ざ

る切調ペアに弄られている少年をマリア・翼・エルフナインの3人は眺めてクリスは面白くなさそうに見ていた。

「なあ雪音……」

「なんすか？先輩」

「先ほど雪音が言っていたのだがもしかして雪音も寝たのか？」

「……」

響の発言にクリスは何もなかったのか？と気になって翼がクリスに問うとクリスは黙って視線をそらして何も言わずにいるが逆に黙ってしまうことで沈黙は肯定が成立し、それを理解したマリアが驚いて

「嘘……貴女もなの!？」

「だあ！あえて何も言わなかったのに聞くな！察しろ！」

声を荒げて答えて顔を真っ赤に染めてクリスは叫ぶが盛り上がっていき一瞬の後に賑やかになっていく。

「少し心配しましたが、元気になって良かったですね」

「エルフナインちゃん……これが元気な人に見えます？」

「はい、とつても……」

未来・切調コンビに弄られながらエルフナインが少年の元に寄って弄られている少年を見て楽しそうにしているのを感じて喜んでいるが当の本人はそんな気がしてないのかジト目でエルフナインを見ている。

「ですが元気がないからと楽しく迎えてあげたいとクリスマスさんが……」

「マジで？」

「……」

なんと提案したのはクリスで元気がない少年を励まそうと思いついてくれたらしく少年の方は見るとクリスは目を合わせてくれないが

「まっまあな……これぐらいどおつてことねえよ……」

「……やだクリスの優しさが染み渡るう」

「……またか」

照れたように答えると少年の変なスイッチが入り両手をで顔を隠

して感動する事となる。

「でも和雪さん・・・響がいるのに部屋のあれはないと思うの」  
「・・・コロシテクダサイ・・・」

## 19話 別に運動音痴ではない

そして数日が経ち、少年は今実家にいる。

今まで住んでいた家は元々健太の父親（少年の兄でもある）が使用していたが少年の父親の歩行が難しくなったあたりで過ごしやすいよう一階建ての家に住んでいた兄と交換していたのだ。

今回少年が実家にいるのは両親二人の葬式が終わりそのまま兄達と話をして元の場所に戻そうということとで現在引越作業を行っているのだが。

「流石にうちの家の援助をしてくれるのはありがたいんだけど、まさか皆の許可が下りるとは思わなかったなあ」

「確かにそうだな」

「うわあ・・・すっごい広いね」

「畳もある・・・」

「凄いデス！トロフィーがいっぱいあるデス！」

「この刀は!?!・・・模造刀か・・・」

「いや翼、流石にあったら問題だと思っただけだ」

クリスマス達の事もバレてしまいそれについてもひと悶着あったのだがそれもエルフナインが何かしてくれたようで直ぐに了承してくれたみたいでこうして現在作業を行っている。

さて此処で一度部屋割りを紹介しましょう。

二階2部屋

切歌・調ペア その隣に響・未来ペア

一階畳部屋 別に2部屋

畳部屋に翼・マリア・エルフナイン

通常2部屋にそれぞれクリスマス・少年が入れることとなっている。

「うちの実家・・・なんでこんな広いの?」

元々少年の実家だったのだがまさかの大人数に対応している程の広さに驚愕していて思わずツツコミを入れる。

「確かに、和雪さん達って元々なんかやってるんですか?」

「簡単に言えば・・・スポーツ関係」

「ああ・・・だからトロフィーがこんなに・・・でもこれいろんな種類  
のがあるみたいだけど」

「・・・ああ、俺の父が剣道、兄貴がサッカーとかでとってたんだよ。  
因みにこの中には健太の陸上競技で取ったもあるね・・・後で届けな  
きゃ」

「へえ・・・健太君陸上やってるんだ」

どうりでスポーツ関係のトロフィーがたくさんあり、エルフナイン  
と未来が眺めていて未来が健太に付いて少し興味がわいたのだが此  
処で見てた中である事に気付く。

「そういえば和雪君のはないの？見たところないみたいだけど」

そう少年のトロフィーだけがないのである。

「え？和君の無いの？」

聞いていたのか響もやってきてひよこつと顔を出しては聞き出し  
にやってくる。

「ああ、うん・・・そうだよ。気になるよね」

少年はやっぱりそうだよねと腕を組んだように頷いてもう一度並  
んでいるトロフィーを見る。

「いやあ恥ずかしながら俺、この中で余り運動神経良くないんだよ  
まあ、良くないっていうか俺に合う奴が無かったんだけど」

そう言つて照れくさそうに説明して荷物を持ってその場から離れ  
ようとする。

「まあ、人には得意不得意があるんだしいつか俺に合うやつがきつと  
あるよ」

少年は荷物を持ってその場を離れて部屋に戻っていく。

「・・・和君運動音痴なんだ・・・」

「響それ絶対に本人の前で言っちゃだめだからね？」

「お前！なんでそんな物持ってきやがったんだよ！捨ててこい！」

「嫌だ！もうこの世にコレ一つしかない雪音クリス抱き枕は何が何で  
も死守するんだい！もうお風呂場で寝る生活とはオサラバしてふか

ふかベッドで一緒に寝るんだい！」

「本物がいるだろうがそれで良いだろ！」

「え!?! クリスが俺に抱かれるの!?! 恐れ多くてできるわけないやんけ  
！」

「んな事言つてねえ！」

「あつじやあ私和君と一緒に寝る！」

「嫌でございますう」

「ひどい!?!」

少年が向かった先で何やら楽しそうな会話が聞こえて来てわいわいして  
いてその光景をエルフナインが微笑ましそうに見ている……

「これが痴話喧嘩なんですね」

「エルフナインよ……何処でそんな言葉覚えたの？」

## 20話 彼女は外堀を埋め始めた！彼は逃げた！

どうもおはこんばんにちは、和君こと俺です。

今俺は、校内で走っています。え？何故かって・・・後ろの声を聞いて・・・

「待てやゴラア！」

「何こんな可愛い子の彼氏たあどうゆうことだゴラア！その肉削ぎ落としてやる！」

「後ろの殺意がやばいッピ！」

そうです俺は今逃亡しているんです。何故こんなことになったのか説明をしましょう。

遡って朝

「和雪さんちよつと良いですか？」

「ん？エルフナインちゃんどしたの？」

モゴモゴとパンを食べているところにエルフナインがやってきていて聞きたい事があるのか問いかける。

「和雪さんって学校に行くときって自転車で行ってらるんですか？電車の方が早い気がするのですが」

「うーん、運動がてらに自転車使ってるだけだよ。流石に雨とかは電車使うけどね」

「そうなんですか・・・」

「どしたの？突然そんなことを聞いて・・・」

エルフナインの間に疑問を持ったのかどうしたのかと尋ね、牛乳を飲み・・・

「いえボクではないんですが響さん達もそちらに通うことになったので」

「ブフウ!!」

盛大に牛乳を噴き出した。

「和雪さん!?!大丈夫ですか？」

噴き出した牛乳を拭いて少年は心配して見つめてくるエルフナイ



ンを見て問いかける。

「え?ごめん、もつかい言ってくれろ?俺聞き取れなかつたなあ」

「あっはい、響さん達も和雪さんのいる高校に通うことになったのでその通学方法について聞こうと思ったので」

「え?来るの?俺の高校に?響達が?」

「はい!まだ数人ですが・・・」

そう言っで見せてきたのは響・クリス・未来の学生証であった。

「マジか・・・え?でも戸籍とかどうしたの?住むのは大丈夫だけど戸籍だけは難しいんじゃない?」

「それはですね、じつはこの世界に来た時に調べたのですがこの世界ではボク達皆ちゃんと戸籍があるみたいなんです」

住民票もちゃんと用意されており3人の住所も此処になつてるみたいでせつかくだからと通ってみてはどうかと思ひ作ってくれたようだ。

「流石にマリアさんと翼さんは通えないので待機という形になりましたがこの3名なら問題ないと思ひましたので」

「すっげえご都合主義、和君ビツクリイ・・・」

因みに切歌と調はもう少し時間を掛けたら健太のいるところへ送るらしい、いやなんでもありませんか。

「あつだからみんな顔出してこないんだ」

「たぶんそれぞれ用意した制服に着替えてるんだと思ひます」

「ふーん、そうなんだ・・・制服に・・・制服!」

納得した少年は少し考えてからある事に気付いた。

「つまりクリスの制服姿が拜めるのか・・・エルフナインちゃん!」

「はっはい!」

推しのクリスがうちの高校の制服を着てくれる、そこに気づき少年はエルフナインの肩を掴んでは優しい顔で見て・・・

「今晚はなにが食べたい?君の好きな物を作ろう」

「え?・・・じゃあハンバーグをお願いしてもいいですか?クリスさんが美味しいって絶賛してたので気になっちゃって」

「お安い御用さ!じゃあまた夕方!腕に海苔を付けてくるわ!」

「え？腕によりをかけてはでは!?・・・行っちゃいました」

少年は嬉しさのあまりにガッツポーズをしては直ぐに外にでてテンションが高い状態で家を飛び出していった。

そうして高校で予定通りに響達がやってきて編入する形で来たのだが。

「クリスの制服・・・ありがとうございます・・・」

「お前ちよつとキモイぞ」

制服姿のクリスに手をこすつては崇めるようにしてその哀れな姿を親友が横で見っていた。

「和君、どう？似合う？」

響が少年に近づきスカートをクルツと見せるようにしてくれて思わずその姿が可愛いと思い

「やっべ今の仕草めっちゃ可愛いと思ってしまった」

「和雪君口に出てるよ」

「なんと」

思わず口に出して言ってしまう未来にツツコまれ自分の口を塞ぐがもう遅かった。

「和君に可愛いって褒められた・・・えへへ」

とても嬉しそうにしている響を見て気になったのか親友が問いかける。

「ん？立花さんってコイツとどうゆう関係なの？」

「・・・」

ふいに聞いてきた問いに少年は一瞬で察したのか立ち上がる。

「和君は私の彼氏だよ」

やはり言ってしまったカミングアウトそれから早かった響の発言と共に少年と親友は教室を飛び出した。

「てんめえー！いつの間に彼女作ってたんだゴラア！」

「やっぱり言いやがったなあ響い！」

そして今に至る。

「よかった・・・アイツ喜んでくれたな」  
クリスは密かに喜んでくれていた少年を見ては喜んでいた。

## 21話 修学旅行班決め

それからいろいろあり一限目は自習になり、3人の自己紹介を行って(その時の響の例の発言によって教室内が騒がれたのは割合しよう、だって少年のボロボロの姿がすべてを物語っている)から少し騒がしくなっていたクラスも大人しくなりそこで先生が皆に声を掛ける

「はいじゃあ、みんなくそつたれなりア充を十分に処した所で林間学校の話すつぞー」

「おいさく先、それって俺の事だよな、てかアンタも結婚してんやろがい」

「うるさい、俺は30代で勝ち組になったがお前は10代・・・この意味わかるな?」

「いやわかんねえよ」

「俺もそのくらいに勝ち組になりたかった。よって私は前に嫉妬するので宿題を倍にします」

「ザツケンナ!職権乱用してんじゃねえ!」

あまりにも砕けた口調で話す佐久間教師(愛称はさく先)に少年抗議するも軽く流して書類を読み上げる。

「ええ、なんだっけなそうだ今年は林間学校で沖縄に行くことになりましたのでこれから班決めよろしくな、編入性の皆も参加できるからな」

「えく・・・」

「この人・・・ほんとに教師なのかよ」

「これでもちゃんとした先生なだけだな・・・まあこんな感じだから生徒の皆も楽に話せるし、人気もある・・・はあ」

佐久間教師の発言にクリスマス達も啞然として少年に問いかけるが少年も佐久間教師をジト目で見ては軽く紹介してた呟き、ため息をついてから眺める。

「おつそうだ大木、あれだったら班組まね?沖縄でなんかやろうぜ」

「ん?そうだなあ・・・あつ響達はどうする?ありきたりだけどどうせ

「なら組まない？」

「ほんとお！組む組む！未来もクリスマスちゃんも良いよね！」

「私は響と組めるならなんでも良いよ」

「まっまあアタシは構わねえけど・・・」

クリス（沖縄つて確か海が綺麗などこだよな・・・なら・・・）

未来（沖縄の夜空を響と見れるかな・・・）

響（沖縄・・・なら水着買わなきゃ！）

親友（沖縄か・・・美味しいもの調べよ）

和（沖縄・・・何してやらかしてやろうか・・・）

こうして5人で班を組むことになったのだが、それぞれ沖縄で何をしたいのか考え（1人だけ沖縄とは関係ない事を考えているが）頷く。

「なら班の名前でも決めるか」

「じゃあ良いのあるぜい」

「なんだ？名前決まってるのか？」

親友に名前を決めようとするが少年が既に決めており、クリスが問いかける。

「ふっふーん、こう見えてこうゆうのは即決めてたからな」

そう言っ指を天井に向け叫ぶ

「その名前はリトルバズ」

「待てい！それはいけない！」

少年が名前を言おうとするが親友のボールペン一刺しを脇腹に刺され阻止をされる。

「んまっ・・・っあ・・・ちよぎー！」

## 22話 彼はクリスには敵わない

「……スヤア・」

「……あれ、疲れたのかな？」

授業も終わり、放課後の時間、少年は机に突っ伏して寝ておりその横には『5分寝かして』とカンペが置かれていてそれを見つけた響は軽く少年を揺らすも起きる事は無くカンペを見つけてどうしようかとクリス達を見る。

「でも和雪君、授業中ほとんど寝てなかった？」

「……は？」

「あついつもこんなんだよ」

「うそだろ……」

未来の問に親友が答えてくれて思わずクリスは少年を見て驚く。実はこのカンペ、昼休みから置かれているのだ。

「コイツ……こんなんでも単位とれてるのか？」

「ところがどっこいテストとか諸々取れるんだよなあ」

「ええ……」

「頭良いつてわけじゃないけど大事なところは抑えてるから多少は点数取れるんだよ……腹立つなあ」

少年の頭部を拳でグリグリと攻撃していく。少年は未だ眠っており、表情は少し歪んでいたが

「こんなんでも俺より頭良いと腹立ってきたわ」

「もつもうその辺で良いんじゃないかな」

未だ頭部への攻撃をやめない親友に未来は止めに入るが止めに入るのと同時に少年の懐からアラムが鳴りだす。

スパアンツ！

「ぬぼあ!？」

アラムが鳴り響き少年の右腕が動くとき親友の顔面に目にも止まらぬ速さで少年の拳の甲がめり込むように入り親友はそのまま真後ろに飛んでいく。

「ええ!？」

余りにもの速さに3人は驚き吹き飛ばされた親友を見ては何が起こったのか再度少年を見る。

少年はゆらりと立ち上がっては首元を抑えては親友をにらみつける。

「か、和く・・・ヒイ！」

「・・・俺が寝てる間に随分と楽しいことしてんじやねえか」

「ちよっ落ち着けて・・・」

響が立ち上がった少年を見れば凄いい形相に未来の後ろに下がリリスが止めに入るも少年は歩みを止めずに親友の元に進む。

「てんめえ俺の優雅な夢の世界を邪魔するなって何度言ったらわかんただあ？」

スパアンツ！

そう言つて少年が近寄ると親友も起き上がって少年の顔面に拳をたたきつけられる。

「ハッ！お前が俺より幸せになるなんざ2万年早いんだよってか彼女いる中で優雅にしてんな、腹立つ」

「あの時言つたはずだが響と俺はなんもないと言っている。甥っ子の為に一芝居うってくれただけだ・・・俺は必要ないって言つたけど」

親友の拳は少年の掌に収まっており少年の顔面に届くことは無く、少年は親友の拳を握つては説明をする。

「ほほう・・・その立花はまんざらでもなさそうだけど？」

そう言つて親友と少年はチラツと未来の後ろに隠れてこちら覗つている響を見ると響は少年と目が合うと手を振つては笑つてすぐに隠れる。

「・・・ノーコメントで」

「おおつとお？これは脈ありですかあ？」

「んなわけあるかあ！俺はクリス一筋だつて言つてんでええええ！」

少年の言葉は最後まで届かず後ろからの奇襲にやられて地面に突っ伏す。

「おつおう・・・」

「またバカな事言いやがつて・・・恥ずかしいつて言つてんだらうが！」

少年を倒したのはクリスマスでその手には学生バックが握られていてバックには煙が出ていた。

「さあ帰るぞ馬鹿……」

「……」

「まっまたね!」

「また明日……」

気絶している少年の首根っこを掴んで引きずっては親友にじゃあなど別れ4人はさっさと教室を後にする。

「……これはまたとんでもない友達だな……」

4人を見送って親友は自分の荷物をまとめるが何かに気付いたのかももう一度後ろを振り返って。

「立花はともかく4人で帰る必要ある?」

「クックリスさん……首が、締まるう……」

「うっさい少し黙って引っ張られろ」

「グフウ……」



## 23話 どうしてノイズが

「ぬおおおおお！」

「和君走って！追いつかれちゃうよ！」

「んなこたあわかってんだよお！」

「和雪君！こっち！」

「わかった！」

少年は走る、甥っ子と未来と共に全力で逃げる。

いったい何から逃げているのかというと・・・

「流石にノイズもこっちに来てるなんて聞いてねえぞ！」

変な色に不規則な動きをして3人を追いかける異形、ノイズが迫っていた。

それでは一度、遡って参りましょう。

「マジ死ぬかと思った・・・」

「変なことを言うお前が悪い」

「しょんぼりだよ（；・ω・；）」

「もう一発入れるか？」

「申し訳ありません・・・」

「綺麗な土下座見るの初めてかも・・・」

帰宅中の帰り道、少年達4人は自分達の家に向かって歩いてきた。

「所で今日の晩御飯なんだろう・・・」

「今日はエルフナインちゃんのリクエストに応えるべくお手製ハンバーグでございます」

「和君のハンバーグ！やったあ！」

「コイツの作る奴の中では悪くはなかったからな」

「そうなんだ、じゃあ期待しよっかな」

響が今日の夕飯に付いて問うと少年が朝方にエルフナインと約束していたハンバーグ作ると答えると響は喜んでクリスは素直に褒

めて、未来は楽しみにしようとしていた歩いていた。

「おーい！みんなー！」

不意に後ろから声を掛けられ4人同時に振り向くと甥っ子が手を振ってこちらに走ってきていた。

「お？健太じゃん、部活はもう終わったのか？」

「うん！今日は軽くトレーニングメニューをこなすだけだったからさっさと終わらせて来たよ！」

「そっか・・・」

「やつほー、健太君」

「こんばんわ」

「あっこんばんは！」

後ろで響と未来が顔を出して挨拶をすると健太はお辞儀をして返してくれる。

「みんなはこれから帰りなの？」

「おう、因みに今日はハンバーグだけど良かったら来るか？」

「マジで？行く行く！」

少年が甥っ子にも夕飯に誘うと甥っ子は嬉しそうにして喜んで参加すると答える。

「そう言えば健太君って陸上部なんだよね」

「うんそうだよ、この間県大会優勝してきて関東大会の出場権を手に入れました！」

「そうなんだ、凄いね・・・」

「ありがとうございます！」

未来が前に甥っ子に興味があった為、元陸上部って事もあり話が進んでいき、盛り上がっていく。

「健太も話の分かる人に会えてよかったなあ」

「？・・・お前は駄目だったのか？」

二人の会話に少年は微笑ましく見ており、少年のつぶやきにクリスが疑問を持ち問いかける。

「駄目ってわけじゃなかったんだけど、最初の頃はちゃんと付き合えたけど後半になるにつれて付いていけなくなっちゃった」

少年の遠い目にクリスは察してともに未来と甥っ子の会話を聞きながら歩いていくとあるものが目の前に、何の前触れもなく、ソレは出現した。

「……は？……まず！」

少年が言うのと同時にソレは少年と甥っ子めがけて飛んでいき少年は逸早く気づくと甥っ子を庇って転がるように避ける。

「和君！……ッ！」

「心配は後だ！行くぞ！」

「うん！」

甥っ子を庇って避けた少年を見て響・クリスはすぐさまにペンダントを握りしめて唄う。

「……つウ！……！」

甥っ子を庇って避けたが、背中を地面に強打し起き上がって背中をさすると二人の歌が彼の耳に届く。

「……これが、シンフォギア」

「お前はソイツ連れて逃げろ！此処はアタシ達が何とかする！」

「未来！和君と健太君を連れて逃げて」

「わかった！響もクリスも気を付けて！」

「了解だ！行くぞ、健太！」

「え？……え!？」

シンフォギアを纏った姿を見て少年は歓喜しようとするが今は状況的にそんなことをする余裕はなくクリスの声かけに反応し、少年と未来は甥っ子の手を引いて逃げていく。

「なんだって有象無象がいやがんだ！この世界にはノイズはいないんじゃないのかよ！」

そう言ってクリスはハンドガンをソレに、ノイズに狙いを定めてトリガーを引く。

## 24話 狙われた彼

「頼んだ二人共!」

少年を先頭に甥っ子と未来を連れて場を離れ、それを合図にノイズ達も動きだす。

「行くよ、クリスちゃん!」

「ああ!」

迫りくるノイズを迎撃しようと二人は構え、ノイズ達はツツコんで来るのだが。

「せい!...ええ!」

「はあ!」

数体は撃破できたが、残りのノイズは二人を無視していき少年達が走っていった道を真つすぐ向かっていったのだ。

「アタシ達を無視した...だと?」

「まじよクリスちゃん、和君達が!」

「んなこたあ、分かってる...!」

追いかけていこうとするが突然二人に異変がしようじ、身体が光りだすと元の姿に戻ってしまう。

「嘘だろ!」

「私たちのギアが...解除された!」

自分の姿が元に戻ってもなお、ノイズ達は二人に気にすることなく、追いかけていき二人は考える事よりも先に追いかける。

「そんな...どうして」

「...」

少年を追いかけるノイズを追いかけて響は考えるが分からなかったが、クリスは心当たりがあるのか

(アタシ達を無視したのに追いかけるわ、アイツ達のあの統率が取れた行動...まさか)

ある仮説に辿り着く。

「この世界にあるのか?...ソロモンの杖が」

「ぬおおお！」

「和君早く！追いつかれちゃうよ！」

「んなこたあわかってんだよお！」

「和雪君！こつち！」

「わかった！」

そうして今に至るわけで少年たちはノイズからの猛攻に逃げ、避けていくがノイズ達の様子がおかしい事に気付く。

「コイツら・・・なんか変じゃねえか？」

何かに気付いたのか少年は未来達が向かった方向とは別の方向に走っていく。

「和雪君!?!そつちは！」

「逆方向だよ！和君！」

分かれてしまった二人は少年の方を見ると二人もある事に気付く。

「ノイズが・・・来ない？」

「まさか、和君を狙って!?!」

複数のノイズ達は少年の所に向かっていったのだ。

「やっぱりな・・・こいつ等俺だけ狙うのか・・・なら話は簡単だ」

追いかけて来るノイズを確認して少年はにやける、狙っているのが自分自身だと理解すれば回りに被害が及ぶことはないと考える。

「ノイズの数は3・・・じゃあお前らが自壊するまでリアル鬼ごっこ開始と行こうかあ！」

「和雪君！」

少年はノイズ達に追いかけられるも笑って行き速度を上げて二人を置いて走っていく。

「嘘、和君一人でノイズに追いかけてられるの!?!」

「ごめん、急に分かれちゃったから・・・」

「そうなのか・・・」

響達が合流して現状を報告しあうと少年一人がノイズ達を引き付

けて行ったことに響は青ざめる。

「でも・・・もう一個違和感はあつたんだ」

未来が気になったのか思い出すように答える。

「和雪君が避けてる時なんだけど、あの人・・・避ける時とノイズが飛びつくタイミングがおかしいの・・・なんかこう・・・来る場所がわかるみたいなの・・・」

## 25話 ボロボロの彼

「・・・」

市街地からなんとかノイズを引き連れて森に逃げ込んだ少年は地形を利用してノイズを撒くことに成功したのだが・・・

「どうしよう・・・降りれない・・・」

木に登って下を見れば、ノイズは少年を探しているのか未だにあたりを探っている。

「自壊するのを待つしか・・・ないか」

ノイズを見て、少年は少し太めの枝に乗ってはどうするか考える。

下に降りればノイズとの鬼ごっこ再開※嫌です

響達にもう一度助けてもらう※響達は携帯を所持してない為連絡の手段がない

大人しくノイズが消えるのを待つ※いつ自壊するかわからない

「・・・詰みやんけ」

顔を両手で覆って軽く絶望をしていると不意に携帯のブザーが鳴る。

携帯を開くとそこには我が家と書かれていて直ぐに取る。

『和雪さん、今何処にいるんですか!?!』

「ちよお! エルフナインちゃん、ちよつとボリリューム下げて、気付かれる」

そうか、家にエルフナインがいたことを忘れていた。エルフナインがいれば 翼やマリアがいたはず。

「エルフナインちゃん、風鳴さんとマリアさんに伝えて、場所は〇〇の奥の森だそこからなら時間が・・・!」

『和雪さん!?!和雪さん!』

少年の言葉は最後まで伝わる事は無く途中で途切れてしまい、エルフナインは何度も反応を伺うが返事はなかった。

「ウッー」

通話が途切れた理由は簡単であった、上から一体のノイズが降ってきて少年を枝ごと落としたのだ。

枝が折れ、足場を失えば当然少年はそのまま下に落ちてしまい、地

面に背中を打ち付け激痛に顔を歪ませ叫ぶ。

「ガッア・・・アアアアアア!!」

余りもの痛みに叫べば2体のノイズも気付いて少年の方に向かっていく。

「グウ・・・ヴー・・・ヴウ・・・」

起き上がるのもやっとで、背中を後ろの木によりかかるように預けせまりくるノイズ達を見る。

(マジ・・・かよ・・・)

薄れていく意識の中、少年はこの最悪な状況になんとか考えようとする。

(こんな、ところで・・・死んでたまるかよ!・・・)

そして少年は意識を失いそれと同時に、周りの空気が変わりだしそして・・・

数分後

「確かこの森の何処かのはずです!」

「ええ、わかったわ!切歌と調はそっちをお願い、私と翼でこっちを探す!」

「ガッテンデース!」

「わかった・・・」

「承知!」

エルフナインと共にやって来たマリア達はそれぞれ手分けして少年を探し始める。

「・・・コレ!」

エルフナインはあたりを見渡しながら進むと地面から光が出ておりそこにたどると血だらけのスマホを見つける。

「・・・これって、和雪さんの・・・イタ!」

少年のだと分かれば近くだとこの辺の近くにいないかと走り出し、躓く。

「イッタタ・・・石?・・・!?!」

躓いたのは石ではなく人の足で、そこから上は葉っぱで隠れていた



が人がいるような膨らみを見てエルフナインはもしかしてと、のぞき込むと背中の部分の衣服がどうやったのかわからないがボロボロに破けていて白い肌が見えていて、さらに顔を見ればそれが少年の顔だと気づく。

「和雪さん！大丈夫ですか!？」

エルフナインが叫んで少年を揺すって起こそうとするが起きる事は無く、その声に聞いたマリア達がやってくるが。

「エルフナイン！見つけたのね・・・」

「彼は無事なのか・・・」

二人はやって来たのだが立ち止まって「それ」を見てしまった。

「どうかしたんですか？急いで和雪さんを治療しない・・・と」

二人の様子がおかしくエルフナインが声を出して二人の目線を追いかけてしまい、「ソレ」を見る。

「これは・・・いったい・・・」

翼が眩き眺めた先にあるのは、少年が寄りかかっていたであろう一部が真っ赤な血で染められ、さらには周りにはノイズの物と思われる炭が付いていて、きわめつけに何かに噛みつかれた後のような跡が付いたボロボロの木であった。

## 26話 知らない記憶

『……あれ？此処……』

目が覚めると少年は見覚えのある部屋にいた。

この独特な鼻にくるような香りとこのいつもいる所とは少し違う熱気。

何よりこの部屋は昔、少年が小さい頃に使用していた場所でもあった。

『……俺がタイにいた時に過ごしてた部屋じゃん』

自分が昔使用していた部屋から出ようとすると思の前で何やら騒がしいのかドタドタと音が聞こえる。

『……く……んを……も……きてなさい』

『……なにしてんだ？』

外から何か聞くと少年は扉を開け、様子を見るとそこに母親の姿があった。

『……！』

死んでしまった母の姿に少年はこみ上げる何かに気付き自身の胸を掴んで母親を見る。

近くに近づいても気付くことは無く母親は何やら急いでいるのかいろんな荷物を運んでいる。

『夢……か』

母の姿はいくらか若く感じ様子を見る感じ、動きもいい、少年は直ぐに夢だと理解してその様子を眺めている。

『……早くなさい！』

後ろから人の声が聞こえ振り向くとそこには良く見知った人が小さな子供を抱えてた。

『婆ちゃんに……俺？』

小さな少年を抱えていたのは少年のおばあちゃんであった。

『早く、この子にあれを飲ませて、刻印を消さないと死ぬわよ！』

『そんな事わかってる！母さんも悪化させないでどうにか見て上げて！』

『……?』

二人の様子を見て自分の身に何かあったのだろうかと思いつく。とするがのなにも思いつくことができなかった。

『俺そんなひどい状況になったことあったか?』

うまく思いつくことができずにその光景を眺めていると突然場面が切り替わる。

場面が切り替って少年はその場所を見て驚愕する事となる。

『なんだよ、これ……』

切り替わった場所は少し薄暗く至る所に蠟燭が設置されていて直ぐにどうゆうところか理解した。

『まるで祭壇じゃねえか……』

そこにいたのは母親とお婆の二人、そしてもう一人……少年の姿があった。

祭壇の大事なところに置かれていたのは少年の姿があり、胸にはなにやら痣のような者が見えていた。

『……』

母は祈るように手を合わせていて、お婆は何かを呟いていて少年はそのつぶやきを聞き取る事ができなかった。

『……痣?……!?!』

胸の痣を見てそんなの 無かったと思いき自身の体を見ると黒い痣が見えていた。

『な……なんだよこれ!?!』

胸の痣を見て知らないことに気付いてしまい後ろに下がると近くの蠟燭の火が消える。

『……!』

何かを呟いたお婆がこちら側に振り向くところらに向けて手を翳してくる。

『……な!?!』

風のような何か少年の周りを囲んでいくと一撃で少年の意識を刈り取ってく。

『……なっ……なにが……!?!』

薄れた意識のなか少年を祭壇を見つめると寝かされている少年に何かが入っていくのを見て意識が途切れる。

「うっああああ!!」

「突然なんだ!?!」

次に目が覚めるとそこは自分の部屋で目の前で少年のそばにいたクリスが驚き少年の方を見る。

「……え?俺……」

辺りをみて何か思い出して突然上半身の衣服を脱ぎだす。

「……何も無い……」

胸元を見るが何も無く普通の肌が見えていて安堵するとそれを見ていたクリスが

「なに突然脱ぎだしてんだ変態……」

「え?……あ……」

ジト目で見てくるクリスに気付くと少年はなにか考え……打開策を実行する。

「……(ω\ )イヤン」

「……フン!」

「グフウ!」

自身の体を隠してボケる少年にクリスは思い切りボディに拳を叩き込む。

「……良いのありがとうございます……」

「……心配して損した……」

## 27話 食欲が上がってきている

目が覚めた後、少年は直ぐにお腹が空き、皆で食べているのだが。「にしても良く生きてたな〜」

「そうだな・・・」

モグモグ・・・

「あっそれ取ってくれる?」

「あっああ・・・」

モグモグ・・・

「この世界にもノイズがいるなんて・・・なんか俺が原因な気がしなくもないけど、俺ノイズ欲しいなんて自殺行為な願いするわけないし、あっおかわりしよ響は食べる?」

「わ、私はもう良いかなあ・・・」

モグモグ・・・

「ん、そうなの・・・じゃあ俺だけおかわりしよ」

「・・・ジーン・・・」

モグモグ・・・ゴク

「あり?みんなどうしたん、俺の方見て・・・」

モグモグ・・・

「なあお前・・・気付いてないのか?」

「なにが?・・・」

モグモグ・・・

「和雪君今ご飯何回おかわりしたかわかる?」

「え?・・・あれ?何回したっけ?」

「もう5回はしてるよ」

「・・・嘘やろ」

気付けばかなりの数をおかわりしていたようでそれも自分は気づかなかったと感じていて、手元のご飯を見ては驚いていた。

「ほんとだよ、和雪君響より食べてるんだもんビックリだよ」

「マジかよ響より食べてるとか俺実は異常なのは!?!」

「え!?!」

「確かに、この馬鹿より食べられるのは少しな・・・」

「クリスちゃんまで!？」

等と雑談をして、少年は席を立って食事を終わらせるとすぐさま移動する。場所は自分の部屋。

「お待ちしてました和雪さん」

「・・・やあ、エルフナインちゃん」

部屋にいたのはエルフナインで少年はどうしているのかわかっているのか椅子に座ってはエルフナインを見る。

「ボクがいる事に疑問に思わないって事はわかってるんですね?」

「まあ、ね・・・」

エルフナインの言葉に肯定すると少年は直ぐに頭を下げる。

「ごめん、ハンバーグ作る約束してたのにできなくて」

「・・・え?」

頭を下げる少年にエルフナインはポカーンとしていて気が付けば慌てて手を振る。

「あつ違います!決してそんなことは思っていないですよ!それに今回は別件の話についてお部屋にお邪魔しただけで・・・」

「え?・・・そうなの?」

慌てて否定してるエルフナインに少年も同じ表情で見れば互いにクスッと笑って見せては話を続ける。

「なんだ、二人とも勘違いしてたのか」

「みたいですね」

「それで、別件ていうのはやっぱり?」

「そうです、その話をするためにまずですね和雪さん」

少年は察しているかエルフナインの言葉を待ち、エルフナインは一拍間をおいてから・・・

「一度裸になって貰って良いですか?」

「ごめんなんて?」

何一つ察していなかった少年である。

## 28話 メデイカルチエツク

「ッ！」

「大丈夫ですか!? 優しくしたつもりなんですけど・・・」

「いや、大丈夫だよ。ちよつと冷たかったただけだから」

「そうですか、続けても大丈夫ですか?」

「良いよ、続けて」

「わかりました、それじゃあ失礼して・・・」

少年の部屋にて何かやっている二人そんな二人の会話を扉越しで聞いている物が二人・・・

「和君・・・」

「これは・・・気になるデース・・・」

どうやら聞き耳を立てていたのは響と切歌のようである。

中から聞こえてくる二人の会話に顔を赤くして聞いてはいるのだが響はまだ好いているので複雑な顔で聞いている。(ちゃんと少年と話をして普通の関係になりました)

「和さんってロリコンだったんデスね」

「うう・・・やっぱリアピールしても効果が無かったのはそういうことだったんだ・・・」

「何がだ?・・・」

二人してコソコソと話をしていると後ろから声を掛けられ後ろを向くと

「あつクリスマスちゃん・・・」

「何やってんだ? アイツの部屋の前で・・・」

「クリスマス先輩! 和さんってロリコンだったみたいデス!」

「はあ? なにわけのわからない事言ってるやがる」

切歌の発言に首を傾げて近づくと部屋の中から声が聞こえクリスマスも同じように耳を傾ける。

「まさかエルフナインちゃんがこうゆうことできるなんて驚きだったよ」

「和雪さんにはお世話になっていきますからこれぐらいはできるよように

した方がいいかと」

「いやまあ・・・突然脱いでって言われた時は心臓飛び出しかけたわ」  
「なんかすみません、他の皆さんは女性ですから、和雪さんには驚かせてしまいました・・・」

「いや、まあなんとなくは察せるから・・・ところでどう?」

「んう・・・とっても大きいですね・・・やっぱりボクの手じや収まりきらないです」

等のの会話が聞こえ、後半になるにつれてクリスが震えだす。

「あつあの・・・クリスちゃん?」

「なんかやばい予感がビンビンなのデース」

「・・・すう・・・はあ・・・」

その時のクリスの表情は暗く見えないがとてつもなくやばい顔をしていると察知し響と切歌は震えだしはじめクリスは一度深呼吸をして呼吸を整えるとすぐさま行動にだす。

「てめえ!なにしてんやがんだ!」

「エルフナインちゃんそのセリフは誤解を産むから訂正しなぬぼあ!?!」

「・・・え?クリスさん!?!」

扉を思い切り蹴り飛ばし扉を吹き飛ばすと上半身裸の少年の背中をエルフナインがペタペタと触っていて先ほどまでの会話に対して少年がエルフナインに注意しようとするも飛んできた扉に反応が遅れて少年は扉の下敷きになり、エルフナインは吹き飛んで目の前から消えた少年に驚いて扉が飛んできた方を見るとクリスに気付いて、さらに驚く。

「おい、大丈夫か!アイツになんか変な事されなかつたか!?!」

クリスはエルフナインの方に寄るとエルフナインの体を気にして問いかける。

「え?・・・えと、ボクはいたって何もされていませんが」

「・・・え?」

クリスは何もされてないと言っているエルフナインの身体を見る。  
少年のベッドの上で普通に座っていて、特に服装には乱れている様



子もなくむしろ綺麗なままである。そしてその脇にはモニターとなんかの器具が置いてあり、それを見たクリスはエルフナインに別の質問を投げかける。

「なあ・・・お前達いったい此処でなにやってたんだ？」

「ボクはここで、和雪さんのメデイカルチェックをしました」

「・・・メデイカルチェック」

手を上げてエルフナインは答えるとクリスは間を開けてから復唱し今度は扉の下敷きになった少年の方を向く。

「・・・不幸だ」

扉の下敷きになった少年はピクピクと体を震わせて呟く。

## 29話 甥っ子の春

翌日少年は甥っ子に呼ばれて現在甥っ子と一緒に出掛けていて結構ドリンクが美味しいスター○○通称ス○バに来ている。

「うー、背中がまだ痛む・・・」

「なんかやったの?」

「・・・聞かんでくれ」

「あつ・・・うん」

昨日の出来事に遠い目をする少年に甥っ子は特に察するわけではないがとりあえず相槌を打っておくことにする。

「んで、なんで今日は俺を呼んだん?」

「あつ・・・それなんだけどさ」

「・・・?」

なんか様子がおかしく見えるのか自身の両指をつついていている甥っ子を見て少年は、首を傾げながらドリンクを口にする。

「たしかそつちに住んでる調ちゃんなんだけどさ・・・どうやら俺、好きみたい」

「ブフウ!」

ガタア!

「ちよお!きつたないな」

突然の甥っ子の告白に少年はドリンクを盛大に吹き出し机に溢す。

その時遠くで誰か聞いていたのか同じタイミングで椅子を揺らしてしまいがこちらには気付くことはない。

「悪い、いやまあ気づいてはいたんだけどまさかわが甥っ子からこんな可愛らしい相談が来るとは思わなかったわ」

「え?待って、気づいてたの?」

「そりゃあ、調を見て顔を赤くして逃げるなんざ照れてる以外にないだろうなって」

「・・・めっちゃ恥ずかしい・・・」

「何年お前と過ごしたと思ってんだよ、筒抜けだわ」

机を拭きながら答える少年に甥っ子は顔を赤くすれば、直ぐに顔を

隠して羞恥に悶え、少年は吹き終われば席に再度座り直して微笑みながら甥っ子を見る。

「それで？そんな好きな子が出来てしまった恋する甥っ子事健太君は俺に話してどうしますか？」

「・・・仲良くなりたいたいんだけど何話せばいいのかわかりません」

「カーッ！憂い過ぎる!!」

顔を隠しながら答える甥っ子に少年は口を大きく上げて高らかに笑う、

「まあ、あの子は大人しいし、いい子だし普通に話をするぐらいいいんじゃないか？」

「・・・だって俺、和君みたいにコミュ力高くないもん」

「そんなもん関係ないよ、俺だってオタク仲間と最初語る時だって普通に行けるのに」

「・・・思い続けた子には？」

「・・・美奈の事は忘れなさい」

顔を揺らしながら話す甥っ子に少年は可愛らしい甥っ子を見て写真を撮っているとピタツと止まって少年の黒歴史を掘り返され、少年は顔を隠して悶え答える。

この甥っ子と少年、似た物同士である。

「それじゃあ、仲良くなりたいと、そうゆうことでオケ？」

「・・・うん」

小さく頷く甥っ子に少年は、ウンウンと頷いては腕を組んでちらつと後ろを見る。

「そうゆうことなら、この俺に任せなさいな。そして報酬としてまた兄ちゃんって呼んでくれも良いんだぜ」

「それは、嫌です」

甥っ子の方に向きなおせば自分の胸に手を当てて笑顔で言うが甥っ子にきつぱりと断られ、がっくりと肩を落とす。

「そんなく、昔は兄ちゃん兄ちゃんって呼んでくれてたのに、俺悲しいよ・・・」

「それは昔でしょ？それに実際兄弟関係なんてないから・・・」

「俺はいつでもウエルカムよ！」

「うるさいアホ……」

「辛辣う！」

しょんぼりとうなだれる少年に甥っ子は冷めた目で見た後、席を立つ。

「うん？どこ行くん？」

「トイレだよ、直ぐに戻るから……」

「おう、行ってら……」

甥っ子はトイレに行くのを少年は見送っていなくなった後を見てからため息をつく。

「さて、どうしましうかコレ……」

再度後ろを向くとそこにいたのは後ろ姿であまり見えていないが帽子を被って調、切歌、響が座っていて、響と切歌は調を見てにやにやして見ており、調は避けられている理由がわかってしまつて顔を隠していた。

「……どうしよう」

単なる疑問だった事がまさかこうなるとは思つておらず調は聞いてしまった事に戸惑うことしかなかった。

### 30話 動き出す者

研究室にて以前ある反応を観測し追っていた作業員達は再度同じ反応を観測した。

「見つけました！日本の〇〇というところですよ！」

「~~~~zzz・・・」

「起きてくれますかあ!？」

1人のスタッフがモニターを眺めて見つけては組織のリーダーである者を呼ぶがその本人は椅子に深く座ってタオルを顔に当てて熟睡しておりスタッフの女性がバインダーに手を取ってリーダーの顔面に叩きつける。

「いったああい！何するのハスク君こんなに気持ちよく寝てるのに起こすたあ何事だ!？」

「人が徹夜して探してるのにあんたは寝てんじゃないよ！少しは職員を労ったらどうなんだよ」

「スタッフは手下僕は最高独裁者、故に道具証明完了でございます働け社畜共」

「こんのドブラック提督が・・・一辺死んでみる？」

「あつごめんなさいほんと、そのバインダー2つしまつてほら・・・給料はさむよ」

「・・・仕方ありませんね・・・」

「ちよつろww、グホオ!？」

上司らしからぬ発言にスタッフ一同はため息をついてスタッフリーダーである女性は博士に抗議しするがふざけている博士の腹部に一撃を浴びせる。

「仕事しろアホ博士、でない脳天かちわるぞ」

「うわ、こわ」

そういつて博士は軽く首を鳴らして腹部をさすってデスクに戻ると目つきを変える。

「それで？今その力は【発現中】かい？」

「・・・いえ、先程までは確認されていましたが満たされたのか消えて

います。今回は長く発現していた為、特定がてきました」

「・・・発現から満たされるまでの時間は？」

「・・・およそ36時間です」

女性からの発言をもらい博士は顎に手を当てて考え込む。

「・・・思ったより長いな、これほど長いともしかしたら対象はかなり喰われているかもしれないな」

そう考えて、博士はトントントンと軽く顎を指でつつくと立ち上がって伝える。

「よし！じゃあちよつと日本に飛ぶわ」

「はあ？」

「他のみんなが行ったって場合によっちゃあ一大事ってこともあるしね、私が直にいった様子見てあわよくば回収！やばそうだったら速攻で逃げるコレよ」

「・・・」

突然博士自らが出向こうと言った瞬間全員が耳を疑ったが正論を言われて黙り込む。

「それじゃあ早い方が良いからね、2日後に発つからみんな任せたぞよ」

「・・・あの」

そういつて離れようとする博士に女性は手を上げ声を掛ける。

「まだ誰がとは言っていないんですがそこはお気づきで？」

「・・・早く言おうよかつこよく締めようとしたのに」

「・・・ペえツプション!!」

「なにそのヘンテコなクシャミ？」

### 31話 ありがとう

「じゃあ和雪君、私達はこっちで見てるから後でね」

「了解よ、じゃあ集合はこの時間にフードコートで」

「また後でね、和君、クリスちゃんの事よろしくね」

「・・・」

現在少年達4人でデパートにやってきており残り一週間を切った沖縄旅行の為に荷物を買いに来ていた。

着いては二手に分かれてやろうと響・未来ペア、少年・クリスペアで行動することになった。と言っても持っていくものはけっこう限られているが

「ところで良かったの？クリスも響達と一緒にに行けばいいのに。水着とか他の女子と一緒に選んだ方が良いでしょう？」

「まっ・・・まあ確かにそうだけどなそれなら後で一人で買う・・・」

「・・・その心は？」

「絶対あの馬鹿が変なの着させてきそうだからゆつくり一人で探す」

「さいですか」

あんまり疲れたことしたくないと遠い目をしているクリスに少年は（変な水着・・・面積少ないやつとかかな？）と期待しながらそれを胸の内にとまって、ただ頷いてあげた。

「それに・・・」

「それに?・・・」

そう言つてクリスは少年の方を見てはじつと見て、少年はその視線に気付いて首を傾げる。

「アンタ一人にするとまた面倒な事に巻き込まれてそうだからな、監視だよ」

「ぐえ・・・」

特に表情を変えない少年にため息を付いて脇腹をつついてやる。

「ええ・・・俺、そんな信用ない？」

「つたりめえだ、ほつとくとあの馬鹿みたいに問題連れてくんだから」「ですよー」

そうして話をするとまたクリスは黙り込んで少年の方を見る。

「どうしたんよ・・・そんなに見て、照れちゃうぞ?」

「・・・お前、アタシ達がいなくなったらどうするんだ?」

「・・・」

クリスが気にかけていた事、それは全員元の世界に帰還した後の事であった。

「アタシ達はこの世界に来て色々と生活して忘れかけてたけどお前、パパさんやママさんがいない中、お前1人でどうするんだ?」

「・・・」

確かに、原因は少年にあるのだがそれに対して、クリスは一人になっってしまった少年が心配であったのだ。

「・・・確かにそうだね。みんなが帰ったあと、どうするか考えてなかったよ」

少し考えてから少年は答え

「普通にみんな帰ったあと、一人でシンフォギア見て、クリスを愛でてるかな・・・まあ一人になつちやつてもやつてる事はクリス達が来る前までやつてたことだからきつと変わらないよ」

「なっならよお・・・」

そう言つてクリスは少年に提案しようと投げかける。

「お前で良ければ・・・こっちに来ないか?」

「それって・・・俺がそっちの世界に行くって事?」

「そうだ、お前が来ればきつとあいつ等も嬉しいだろうしおっさんもお前の事は歓迎してくれると思う・・・」

クリスからの誘いに少年は驚き再度少年は問いかけ、クリスはそれを肯定し補足するが

「確かに、それはとつても魅力的だね俺が使った力ならもしかしたら行くことができるかもしれないね」

「なら!」

「だけどそれは絶対やってはいけないことだと思う」

「・・・」

それを聞いた少年はとても嬉しそうにしていたが否定したことに



クリスは黙る。

「確か前に言っただろうけどクリス達が来た時、シンフォギアのまつわる物が俺の周り以外なくなっただろ？それは逆もきつと起こるかもしれない、俺が来ることによつて、何かが起こるかも知れないと」

「確かにそれはそうかもしれないけど・・・」

そう言つて少年は笑つて見せる。

「でもありがとな、俺の事心配してくれて」

「べつ別に心配してた訳じゃ！」

「はいはい、そうしときますよ」

顔を赤くして声を出すクリスに少年は笑いながら軽く流して買い物続けるのであった。

### 32話 未だ謎は深まるばかり

「ねえねえ未来、これなんてどう？」

「いいんじゃない？」

響・未来ペアは少年達と別れて、水着コーナーにおり二人で水着を選んでいた。

「こうゆうのとかもどう？響のイメージにピッタリだと思うんだ」

そう言つて未来が取り出したのはオレンジの花柄のビキニで上から羽織る事ができるカバー上着もあるものである。

「これならおへそも隠せるしいざというときに見せられるし、それに響の可愛さも一層引き出す事もできると思うの」

「うん？未来、ちよつと何言つてるのかわかんない・・・」

未来の迫真の熱弁に苦笑いしてその水着を手取る。

「でも未来が選んでくれた物だからこれにするね！そして今度は私が未来のを選んであげる！」

「フフ・・・ありがと、響」

嬉しそうにしてカートに水着を入れて次は選んであげようと少し離れた位置の水着を見つける。

「あつこれとか未来に似合いそう！」

「あつ響待つてよ」

見つけて向かつて行つた響を追いかけて行き、たどり着いた響はその水着を手取る。

「・・・あつごめんさい」

「あ・・・すいません」

手を取ろうとした時、他の女性もそれを狙っていたらしく一緒に手を伸ばしてぶつかる。

「あら、君この辺じや見ない顔ね、何処の子？」

「ギクツ・・・ええと・・・そのお」

「あれ、響どうしたの？あれ、その人は？」

未来が追いつくと何やら二人で話しているから疑問に持つて問いかけると女性は思い出すように手を叩く。

「あつごめんね、自己紹介がまだだったね、私は木崎美奈よろしく」  
そう言つて美奈と答えた女性は手を差し出してほほ笑む。

「・・・わかりましたあ!!」

少年宅の一室でエルフナインが叫ぶ。

「なにがわかつたのかしら?」

そう言つて叫ぶエルフナインの横でマリリアが飲み物を持ってきて、エルフナインに渡す。

「ありがとうございます、マリリアさん早速なんですけどこれを見てください」

見せてきたのは以前見せた少年のカルテとそのデータ、それを見てマリリアは首を傾げる。

「これって、前に見せてくれた彼の者よね?」

「はい、以前響さん達が纏っていたシンフォギアが前触れもなく解除されたというのを聞いて私なりに調べてみたんです」

響達のギアのデータを取り出してそれを渡す。

「響さん達のギアが解除されたのには元々この世界に私達が適応していないからと思つていました、ですが少し違つたんです」

「違つた・・・というと?」

マリリアが問いかけるとエルフナインが答える。

「一度和雪さんのメデイカルチェックを行ったときお二方のギアを近づけてみたんです。そしたら二人のギアが反応したんです」

「それってまさか!彼も!?!」

驚いたマリリアが彼にもシンフォギアを纏う事ができるのか問いたですがエルフナインは首を横に振る。

「まだそれはわかりませんが、そこではないんです。解除されたのはその世界に適応されていた場所が離れたからなんです」

「ちよつと待つて、適応された場所が離れて行つたのって・・・」

理解したマリアはエルフナインを見る。エルフナインは頷いて答える。

「和雪さんが離れた上でお二人のギアは適応されていたエリアがなくなって消えています。そして和雪さんの周りを覆っているエリアもボク達が来てからずっと展開されているんです」

### 33話 現れた腐女子少年は崩れた

「よし、じゃあ戻ろっか」

「わあった」

買い物を終えた二人は待ち合わせの場所に向かって行く。

「フムフム、二人は一緒に暮らすほど仲良しと・・・」

「はい！」

「・・・誰と話してんだ？」

「・・・マジかよ」

待ち合わせの所にいるはずの二人+α。

なにやら楽しそうに話しているが少年はもう一人の女性を見て驚く。

「このデパートは知り合いを引き寄せる魔術でも展開されてるんですかねえ」

「あつ和君こっちこっち!・・・え？」

「あつ和雪じゃない・・・ん？」

少年の名前を呼ぶ二人に互いに顔を見て知り合いなの？と首を傾げては流れるように少年を見る。

「おい、見られてるぞ中心人物・・・」

「めっちゃ逃げたい・・・なにしてんの？」

ため息をついて女性（美奈）を見ては問いかける。

「あつれえく？そんなこと言っているのかなあ？私をそんな邪険に扱って」

「じゃあかしい、そうゆう美奈はその二人でまたネタの資料か？」

「バレちゃった？」

「その様子だと進捗は0でしょ・・・」

「うっさい馬和雪・・・」

新奈と少年の言い合いに3人はどうゆうことなのかわからず未来が声を掛ける。

「あの、二人はどうゆう関係なの？」

未来に言われて、二人は少し考えると互いに指を示し。

「告白して俺を振った腐女子」

「告白されて私に振られたゲーヲタ」

「・・・ア?」

「クリスちゃんなんか二人の間になんか修羅が見える気がする」

「・・・大丈夫だアタシにも見える」

何故か笑顔で話す二人の間に阿修羅が幻影として見えてきて、響が少し引く。

「誰が腐女子だつて?」

「誰がゲーヲタだつて?」

「・・・え?そこなの?」

二人の会話に未来がツツコミを入れる。

「それで?そうゆうアンタは此処で何してるの?まさかデート?3人で?」

「そんなわけ・・・ただの林間学校前の買い物だよ」

「・・・」

「いで、なぜ抓る!」

「うっさい馬鹿」

「ええ!」

「ほーんただの買い物・・・ねえ」

ただの買い物と聞いたとたん少年の後ろにいたクリスが少年の脇腹を抓ってやり、その様子を見た美奈は珍しいものを見るように二人を見る。

「まっこれもいいネタになりそう・・・」

「これ、ネタになるの?面白味ある?」

「・・・これをわからないなんてオタク失格だからね」

「なん・・・だと!」

まさかの失格発言に膝を崩して項垂れていき、美奈はそんな少年を見てからクリスを見る。

「そ・・・な事よりこのとっても可愛い子は?早く紹介して!」

「・・・え?・・・はや!」

いつの間にかクリスの後ろに回り込んだ美奈はすぐさまクリスの身体を抱き調べるように弄り始める。

「ああ．．．なんていい素材．．．これはコスプレ映えしそう．．．」  
「ちよ．．．やめ．．．ん！」

美奈の抱擁から抜け出そうとするが予想以上に手の動かし方が凄く、抜け出すことにできずにいる。

「うわあ．．．クリスちゃんがこんなにも簡単に．．．」

弄られるクリスを見て何故かうらやましそうに見る響。

「クリスって言うのね．．．これから長い付き合いになりそうね．．．よ．ろ．し．く．．．クリス」

「ヒィー！」

響の発言で名前がわかると美奈はニタアと喜びの笑みを浮かべクリスの名前を呼ぶとクリスは悲痛な声を上げる。

「あつごめん言い忘れてた、そいつ女の子もイケる口だから」

「お前それは先に．．．やめ．．．触るなあ！」

二人の絡みを見ないように顔を隠しては注意するが遅すぎである。

### 34話 またしても暴かれる黒歴史

「ハア・・・ハア・・・」

美奈からのセクハラから耐え抜いたクリスは息を切らしながらも自身の身体を抑えて呼吸を整える。

「ほんとにクリスちゃん良い身体してるね、この素材なら着せ替えいがあるってものねえ」

「っ！・・・アタシは着せ替え人形じゃねえぞ！」

満足したのかつやつやとした自分の肌を撫でながらうつとりしながらクリスを見て少年の方に声を掛ける。

「ねえねえ、クリスちゃん頂戴！」

「駄目に決まってんでしようが」

「え〜」

美奈が少年に懇願するが即答で返されしよんぼりと項垂れる。

「まったく・・・アタシは物じゃねえっての」

「ん？・・・」

クリスが呼吸を整え出てくると美奈はクリスの胸元にある物を見る。

「クリスちゃんもそのペンダントもってるの？」

「え？・・・」

「え？？」

「なに？・・・」

美奈の発言にクリス・未来・響はそのペンダント、シンフォギアのギアを知っている美奈を見る。

「私も持ってるのよね、まあ和の誕プレだけどクリスちゃんも？」

「あっそう言えば上げたね」

「そっそうなんだよ、ね？クリス？」

「おっおう・・・」

「クリスちゃんだけじゃなくなると私も持ってるんだよねえ」

「おっ響ちゃんも持ってるんだ！」

美奈が同じように貰ったの？と聞くと直ぐに未来が食い入るよう



に肯定してクリスにアイコンタクトをとるとクリスも頷いて話を合  
わせ、響も同じようにペンダントを見せて言う和美奈も喜んではお  
らペンダントを見せる。

「そう言えば美奈ちゃんって中学の頃から和君の事知ってるんだよね  
？」

「ええそうね、ずっと隣の席ですごくかったね・・・本当」

「そうだな、くじ引きでも隣、機械でシャツフルしても隣・・・本当」

「うっとおしかったよ・・・あ？」

二人で見事までハモリ、一触即発の雰囲気になる。

「・・・すごい仲がいいんだな」

「・・・まあね別にフラれたからってこの関係がなくなる事はないし、

それに結構メンタル強いし」

「・・・あらあ、泣き虫だった頃があつた気がするんだけどなあ」

「やめようか、それ以上は、俺の心は障子だぞ？」

「いいや、やめない！話すね！今！」

美奈が動くとも3人を纏めて話を始める。当の3人はそうゆうのは  
気になるので素直に聞く。

「でね？~~~~でこうゆうところがあるの」

「ほうほう、それでそれで？」

「けっこう和雪君って可愛いところあるんだね？」

「・・・へえ、コイツがねえ・・・」

「・・・やめて、そんな目で俺を見ないで・・・」

そうして少年黒歴史時代大公開が始まり美奈達は楽しくなってい  
き、少年はさらに恥ずかしさでテーブルに倒れて悶える。

「じゃあまたね、みんな」

「うん、美奈ちゃんもまた和君の事聞かせてね！」

「良いよお」

「嫌でございますう！」

楽しい会話も終わって互いにみんな別れていきそれぞれ帰宅する。

別れた後、美奈を立ち止まって少年から誕生日プレゼントでもらったペンダントを見る。

「・・・あつそう言えばカラオケで唄ったら光るから聞こうと思ったんだけど忘れちゃった・・・まあまた今度でいいか」

### 35話 良い拳でした

「・・・これはいったい、いやまあだいたい察しは付くんだけどさあ・・・」

「ごめんなさい、片付けの途中で離れた私の落ち度だわ」

「うう、面目ない・・・」

少年は家に帰るやいなや突然聞こえた音に誘われ、部屋に向かうとそこにマリアもやってきてその部屋を見ると部屋の中が荒れていてその中心には翼がちよこんと座っては涙目でした。

「これをどかさうとしたら滑らせてしまい、転んだところでこれを引っ張りいろんなものが倒れてこれになったと・・・」

「これなんてピタゴラスイッチですか？」

「まさかこうなってしまうとは・・・ほんとにすまない」

「まあ、マリアさんもいるし片付けの続き大丈夫そうでしょ、じゃ俺はこれで・・・」

「待て待て、待ちなさい」

「え？」

荒れた部屋を見てからまあマリアもいるし問題ないだろうと、部屋を出ようとすると少年の方をマリアが掴む。

「・・・マリアさん？まさかとは思いますがこの手、離すつもりはないと？」

「貴方も見たなら手伝いなさい、正直これを私と翼では荷が重すぎるわ」

「まツマリア!？」

「ふあ!?!ウーン・・・」

マリアからの提案に翼は驚き、少年は驚き悩む。

「いやあ、女性方の寝室に男性が入って掃除を行うのはいかなものかと思うのですが」

「心配なら無用よ、私は君のことは可愛い可愛い弟と思っているし見られて気にするものもないし翼は緒川にやってもらっているからその辺は気にしないわ」

「いや待てマリア、私は!」「何か言った?」・・・イエ

翼が反論するがマリアの睨みで黙り込む。

「だから片付けの手伝い、よろしくね」

「・・・了解。不肖和雪、頑張ります」

「よろしい」

少年は少し考え、頷き、マリアはそれを見ては笑って少年の前に出る。

「(ちよろい、やはり彼の部屋にあった同人誌の姉弟モノをネタにすれば彼は動いてくれるわね)」

マリアは少年の部屋を探索(という名の宝探し)を行ってしていて偶然、そういった本も見つけていた。

実は少年は産まれてたから一人っ子としてで過ごしていたがクリス達がやってくる数週間前までは兄がいるという事に気付いておらず、ずっと一人でいた為そういった、(一緒にいてくれる姉弟)にとっても憧れていたのだ。兄は二人いたのだが少年が生まれる頃には二人共それぞれの生活を持っており、少年が物心ついたころには一人っ子だと錯覚していた。

「(しばらくはこれをネタにしましょうか)」

「ええと、この箱はどこにやるんですか」

「まつ待て！それは私の下着が入った箱だから！私が運ぶからあ！」

「中身が見えてないから言わないでもらっていい!?言われた俺が恥ずかしいから！」

「私だって、それは同じことだ！いいから早くそれを・・・きやあ！」

「ちよ!?そんな突進してきたらごぶあ!?」

箱をもった少年に慌てた翼が突っ込むと一緒に倒れ、そうなる当然箱の中身もぶちまけられる。

「いっつつつ・・・ん?これは?・・・」

「なっあああ！」

「あつ・・・」

少年が起き上がると同時に手に何かを握りそれを見てしまいそれをマリアと翼が即座にそれを回収する。

少年はさっきの物が女性の下着にしては随分とゴム成分が強く下

着？と首を傾げては考えて翼の30cm下を見ると気が付いたようにポンつと手を置く。

「……あっ成る程、スポブラか！あっ……」

「……どこを見て納得したのだ？」

少年が答えると翼の眉がぴくツと動きそれに気づいた少年は失言したことに気付き呟く。

「……フン！」

「……ライフで受けるぶるあああ！」

翼の渾身の右ストレートが少年の腹部に見事に入り、少年はその場に倒れる。

### 36話 隠したはずなのに

翼によって刈り取られた意識も戻り、その後は掃除も終わって部屋に戻るとマリアとエルフナインが少年の自室で本を読み漁っていた。「えつと、マリアさん？」

「何かしら？」

「何故俺の部屋でその同人誌を読んでいるのでせうか？」

「ごめんなさいね、君の部屋を散策したら、気になった本が沢山あったからついでに読んでいみたらこれが面白くてね」

「ハイ！ボクもどうじんしというものには少しばかり興味があったので・・・」

エルフナインちゃんもすっぴん毒されていた。

流石にエルフナインにはR18版には刺激が強い為、マリアが止めていたのでそこには手を付けないでいるのだが問題はそれをマリアが読んでいるということだ。

「それにしても貴方、結構純愛モノが多いわね。やっぱり清い付き合いとか憧れてるの？」

「・・・ノーコメントで」

そうそう少年のライフはゴリゴリ削られていた。

実際こうゆうのが嫌いと言えば嘘になるがこうゆう話はマリア達は大好物であるから、何も答えないという選択肢を選ぶほかなかった。

「・・・つばクリ」

「!？」

目をそらした少年を見て答える気がないと悟るとマリアが呟き、それを聞いた少年は肩を震わす。

「確か他には、ひびみくにきりしらそして・・・」

「・・・」ガタガタガタガタ

「？」

それぞれ何かを呟くマリアに少年は気づいているのか更に震えてはそれを見てるエルフナインがどうしたのだろうと首を傾げる。

「おかしいわね、これだけあるのに何か足りないわね？和……なにかわかる？」

「……なんでしようね」

ニコオつと微笑んで近寄るマリアに少年は苦笑いをしては後ろに下がるがすぐに壁に挟まってはマリアに両手を壁を当てられ逃げられないようにいわゆる逆壁ドンをされている。

「ヒィ……」

「まあ百歩譲って他のみんなは良いけどね……どうして私だけウエルマリなのかしら？」

「やっぱり見ていらつしやったかあ……」

マリアが今にも絶唱顔になりそうな表情で少年に詰め寄り、逃げる事が出来ないでいる少年は静かに死を覚悟して目を閉じる。

「さて、これについて何か言いたい事はある？」

「……ワタシ、アナタノシリタイコトゼンブオシエマス。ダカライノチダケハ……」

「よろしい」

少年の必至な命乞いを聞いたマリアは笑顔になり少年から離れる。

「……お二人共どうしたんですか？」

二人の行為が分かっているのかエルフナインは首を傾げては問いかけては二人は大丈夫と答えてあげる。

### 37話 少年は意識を失った!

「……マリアさん、そろそろ……」

「?……なにかしら?」

時間は23時30分、少年の部屋で未だ居座って本を読んでいるらしく、勝手に読んでいるマリアに声を掛けられる。私、そろそろ就寝したいのですが……」

夜中に差し掛かるところに寝ようと思い、ベッドを占領しているマリアに声を掛け戻してもらおうようにするが……

「そうなの?じゃあはい、どうぞ」

「おんや〜?」

マリアは少しずらしてからそのまま寝ても良いと手を置いて空いた場所を差し出す。

それを見た少年は首を傾げては考える。

「えっとマリアさん?これはいったい?」

「そのままの意味よ、どうぞ」

どうやらマリアは少年が寝る横で本を読み続けるらしく、早く寝れば?と手招きまでしている。

「いやいや、なんでそうなんですか?さすがに自分の部屋に戻りましょうよ。エルフラインちゃんも戻りましたし」

「たまには良いじゃない、私も君と仲良くなりたいと思ってたからこうゆう付き合ひも悪くないと思うの……いや、正直な事言うと私もあの子達みたいと一緒に寝たいの」

「ウツソだろ……」

マリアから発せられたのはまさかの共に就寝しようとの提案だった。

あまりの話に少年はあんぐりと口を開ける。

「響から聞いた時、とても良いと自慢するものだから私も体験しようかなって」

「……ええ」

本を置いてマリアは立ち上がって少年の方に近寄ると少年の頬に



触れて囁く。

「それとも、私とじゃ．．．いや?．．．」

「．．．」

「マリアの囁きに少年はしばしだまり数秒してから口を開く。

「．．．いや、俺クリス一筋なので全然響きませんですよ」

「．．．なっ!？」

口が開いたと思ったら断られてしまい、マリアは逆に驚かされてしまう。

「(嘘でしょ!?!仮にも私は世界的には有名なアイドルなのよ!?!そのアイドルの誘いを断るとかこの子ほんとに男!?!)」

等と心の中でマリアが驚いてる中、少年の方はというと。

「(やめてくれよ!いくらなんでも健全な男子高校生にそれはやばいって!ちよつとお姉さん気質なマリアさんも好きだからめっちゃゆらぎそうじゃねえか!．．．あっマリアさんすっげえいい匂い．．．じゃなくてえ!)」

めっちゃぶれぶれである。

なんとか表情に出さないようキュツと噛みしめてマリアの方を見るとマリアは少し考えてからハアつとため息を付いてチラツとどこか見てから少年から少し離れる。

「仕方ない私の負けよ今日の所は引き下がってあげる」

「．．．ええ、まだやるの?」

どうやら戻ってくれるらしく、ホツとしたのか緊張がほぐれて力が抜けるがそれがいけなかった。

「ええ、だから【今】から強硬手段に入るわ」

「．．．え?．．．!？」

「なんだ?と思った瞬間マリアは少年の背後に回って少年の首筋に手刀を入れる。

「なん．．．で?」

倒れ込もうとするするとするりとマリアに抱き留められ、耳元で何か言われる。

「そのままの意味よ、【昨日】は諦めたから【今日】にしただけよ」

「・・・？」

力が抜け切る前にどうゆう事か考えてると先ほどマリアが見ていたところに目が行く。

時刻は0時01分

そう、昨日の時間は諦めて、日付けが変わった瞬間に行動してきたのだ。

「さあ・・・一緒に寝ましょうか」

「・・・(マジかよ)」

そう思っつて少年の意識はまたしても飛ばされ、意識を失った少年を抱きかかえたままマリアは不敵な笑みを浮かべてベッドに連れていく。

### 38話 そこにいないはずの者

「おい、起きろ和雪」

「うくん、もうちよつと・・・」

スヤスヤと寝ている少年の部屋に白い髪の女の子がやってきて、いまだ寝ている少年に声を掛けるが少年は未だに眠っており寝言を言っている。

「うん、やめて・・・俺を・・・弟にしないで・・・」

「お前、どんな夢見てんだ？」

よくわからない事を呟いている少年に白い髪の女の子は溜息をついて少年の布団に手を伸ばす。

「さっさと起きやがれ！お前のママさんに任されてんだから、さっさと起きて着替えろ！」

「ぬぼおあ!？」

グキツ（寝違える音）

布団を引つpegがされてその勢いで床に顔から着地し変な声を上げる。

「・・・ハッ今俺、姉を名乗る不審者事マリアさんに弟にされるとこじやなかった!？」

「何寝ぼけた事言ってるんだよ、さっさと現実に戻ってきやがれ」

「あつクリスじゃん、おはよう」

姉を名乗る不審者に襲われたいたと報告する少年に白い髪の女、クリスはさもどうでもいいように言って、クリスを見てから少年は今までは夢?だと思いとりあえずクリスに挨拶をする。

「・・・おう、起きたならその首と服をどうにかしろよ」

「わかった・・・ん?首?」

クリスに指摘されて起き上がると首に違和感を感じ、触つてみると少し横にずれていた。

「マジか、寝違えちまった。どうりで痛いと思った」

「・・・そうだなさっさと直すぞ」

クリスの発言に少年はえ?とつぶやくとクリスを両手を差し出し

少年の顔に手を添えると一気に正しい位置に首を持つていく。

「ちよつと、クリスさん？・・・さすがにこれはぬぎやあああああ！」

両手で顔に触れられて少し照れていたがすぐ様にやめてもらおうと言おうとするが間に合わずに無理に首を動かされて悲鳴を上げる。

「ヒドイッピ・・・危うくクリスに殺されるとこだったっピ・・・」

「その程度じゃ死なないだろ・・・」

首を抑えながら少年とクリスは食卓に向かうのだがそこにありえない光景を目にする。

「やつと起きたか、ごはん出来たから早く食べて」

「待つてましたよ！早く一緒に食べましょう！」

「・・・え？」

先に座っているエルフナインは少年が来たことに喜んでいたのだが、少年はそれよりも聞き覚えのある声に少年は驚いて食事を並べている女性を見る。

「どうしたんだよ、和雪」

「いやちよつと待つて、おかしい・・・なんで・・・」

クリスが狼狽えている少年に気付き問いかけると少年は酷く困惑した顔で答える。

「なんで・・・死んだはずの母さんが生きてるんだ？」

目の前にいるのは爆破テロに巻き込まれ死んでしまったはずの少年の母がそこにいた。

### 39話 突然の介入者

目の前にいる少年の母は驚いている少年に対して近づくと腕を振りかざし。

「いっつうー!」

少年の頭部を叩く。

「親に向かって死んだはずってなに言ってるのよ。殴るよ?」

「え?・・・ええ?殴ってから言う!?!」

少年が叩かれた頭を押さえながら怒る母に困惑していると横にいたクリスが溜息を付いて

「どうしちゃったんだよ、さっきから変だぞ?」

心配してくるクリスに少年は違和感を感じて、一度周りを見渡す。

「・・・(そうか、なるほど)」

クリス達が母がいる事に何も感じていない事と周りを見れば現在いる家ではなく前回住んでいた家だと気づき少年はこれはまだ夢の中だと気付く。

「・・・いや悪い、まだ寝ぼけてたみたいだわ」

「そうか・・・まだ悪そうなら言ってくれよ?」

「・・・クリスがめっちゃ優しい・・・さすが俺の夢」

クリスが優しくしてくれることに感動し顔を隠して涙を浮かべていると机のほうに座っているエルフナインから謎の視線を感じ取る。

「・・・どうしたの?エルフナインちゃん」

「・・・いえ、今日も兄さんは変ですねって思ってます」

「ええ・・・いつもでしょうに・・・ん?」

エルフナインの言ったある言葉に気付く。

「ごめん、もう一回言ってもらっていい?」

「え?変ですね・・・」

「違う違う、その前よ」

「・・・兄さん?」

「兄さん・・・だとお!?!」

「ふえ!?!なっなんですか!?!」

兄さん呼びに驚きうおおつとガッツポーズをする。

「うるさい、いい加減飯を食えバ和雪」

「ゲフウ!」

いつまでも興奮したりなんかしてうるさい少年に母はお玉を持って少年に向かって投げると少年の頬に当たり変な声を上げる。

「いつつつ・・・母さんおもいつきりやりやがつて・・・めっちゃいてえ」  
「大丈夫ですか？兄さん」

朝食も食べ終え、少年はエルフナインに介抱されながら母にされたことに軽く悪態をついていた。

そのあとクリスも隣に住んでいる幼馴染ということになっており、その設定に興奮して母とクリス二人に潰されたのだがその話はやめておこう。

「にしても結構俺好みな夢だなあ」

「俺好みの夢ってなんですか？」

「んにゃ、エルフナインちゃんは気にせんでいいよ、介抱ありがとね」

「いえ！これぐらい任せてください！」

「・・・よしよししてあげよう」

「ありがとうございます・・・兄さんに褒められました」

えっへんと胸を張るエルフナインに少年はよすよすと撫でてあげると素直にえへへと喜んでくれている。

「ちなみに兄さん、ちよつと聞きたいのですがいいですか？」

「ん？なんだい・・・!？」

撫でているとエルフナインに腕を掴まれ、エルフナインの顔つきが変わる。

「初めましてだな・・・少年」

「・・・え？・・・のわあ!」

腕を掴まれた少年がつぶやくと顔つきの変わったエルフナインにそのまま投げ飛ばされて倒されるとそのまま少年の上に馬乗りする

形で乗っかってくる。

「まったく、ようやく出てくることができたな、まだ問題はあるがそこは置いとくか」

「……！まさかお前……」

口ぶりから少年はエルフナインではなくある人物を思い出す。

「キャロル!?!」

そう呼ばれたキャロルはニツと笑っては少年の顔を抑えて近付き……そして。

## 40話 彼の夢の中なのに…

「キャロル、何を…!?!」

「悪いが説明は後だ、貴様の思い出を共有させてもらおうぞ」

「はい?…!共有ってまさか!?!」

「そのまさかだ。喜べ、貴様はこれからオレにすべてをよこしてもらうぞ」

なんとか脱出しようともがき抵抗を見せるがキャロルの体からでてるとは思えない力で少年を押しさえつけられ抜け出せずにいるとキャロルに自身の口を少年の口に縫い合わせるように重ねられる。

「~~~~ツ!~~~~!」

「~~~~んっ…(動くな、貴様の思い出を共有しなきゃ話しが進まん)」

そう言われたのか分からないがキャロルの行為に何も抵抗できなくなり少年はしだいに力がなくなりキャロルにされるがままになりそして…

「ふう…やうやく終わったな」

「もう…お媚に行けない…」

数分後に終わり、キャロルが立ち上がって少年から離れ、少年は涙目でその場に蹲っている。

「別に問題なからう、どうせ貴様の夢の中だ、別に減るもんじやないだろう」

「なに言ってるの!?!こんな風にキスされたの流石に夢でも初めてだよ!いや、現実でもないけど!」

「なんだ、お前まだ…あ…すまん、配慮が足りなかつたな」

「俺の記憶を読むなあああ!!」

思い出(記憶)を共有したキャロルは少年の記憶から読み取ると残念そうに可哀そうな目で少年を見て少年は一気に恥ずかしくなりその場を駆けまわる。

「それで、キャロルさんは何故俺の夢に?…これ俺の夢に出てきた



だけじゃないの?」

「いや少し違う、オレが貴様の夢に介入しただけだ」

落ち着いてきた少年は自身の椅子に座っているクルクル回ってるキャロルに質問を投げ返るとすぐに返答されるがさらに少年は困惑する。

「ん?どうやって?俺、君が介入されるようになんかした覚えはないんだけど」

「お前、あの時アイツ(エルフナイン)のメデイカルチェックを受けただろ。その時にお前の中に入った」

「うそん!」

余りの発言に少年は驚くが続けてキャロルは補足する。

「オレがお前の中に入ったのは貴様を調べる為だったのだが、調べても何も起こらないから声をかけようとしたがいくら声を掛けても貴様は反応しないからこうして夢に介入してきたわけだ」

「うっうん、まあ言わんとしてることはわかるけど、思い出の共有する必要は?」

「ああ、それは貴様の思い出を共有すれば過去を探れるからな、一応必要な事であるがそれともう一つある」

ん?と少年が首をかしげるとキャロルが何かに気付く。

「時間だ、まあこの話は後にするか、やることやったし」

「え?なに・・・」

「なに普通の事、貴様が夢から覚める時間が来たただけだ」

「あくなるほど・・・」

キャロルがつぶやくと何やら周りが輝いていて夢が覚めるのだとわかれば少年は納得して周りを見る。

「しばらくはお前の中でやっかいになるが一つ忠告するぞ・・・オレとアイツは感覚だけ共有してるから後でフォローしとけよ」

「・・・はっ。」

キャロルの忠告を聞いた少年はその事気付いて突っ込もうとするがそれよりも先に明かりが強くなりやけてるキャロルの顔を最後に少年の意識は戻される。

「・・・マジか・・・」

少年は目が覚めると後ろの方で少年を抱き枕にして寝ているマリアを見て深く溜息をする。

「どうやって脱出しよう・・・」

今の現状からエルフナインに聞こうと思ったが寝起きでもあるためゆるく脱出方法を考える。

「起きてるかあ？開けるぞ・・・」

「おおっとこれは本格的に俺の命が危なくなってきたぞ」

扉の奥から聞こえるクリスの声に少年は逃亡する方法を考えるが考える間に扉は開かれた。

## 41話 修学旅行開始の宣言をしろ!

「ビバ! inおきなわああああ!!!」

「いええいいい!」

「・・・」

「あつづう溶けるう〜」

「和雪君、溶けてるよ?」

照りつける太陽に鼻に付く塩の海水の香り少年達は沖縄に来ており、親友と響が一緒に叫んでいるのをよそに少年が溶けたように砂浜にへばり付いていた。

「はーい、皆さん沖縄のビーチに着きましたがスケジュール確認するぞ

一日目、二日目は遊んで(観光)三日目はちよつと適当なお土産買って帰るぞいいか?」

「はーい」

佐久間先生もといさく先の一言に生徒達は返事をして更に続ける。

「よしじゃあしばらくは此処で遊んでいいけど良いか? 男子はナンパするな? 女子はナンパされるな? 溺れるな? リア充は滅しろ分かったらゆけい!」

「ほんとにこの人教師なのか!?!」

さく先の教師なのか疑う発言にクリスはツツコミをいれるがそれよりも少年が未だ暑さにやられており砂浜に倒れながらにやらやっていた。

「見よ! 砂浜に打ち上げた、哀れな人間の姿を!」

「みんな埋めるぞ!」

「あつやめ、砂が口にはいつ!・・・ヤメロー!」

「アイツらほつといて行くぞ・・・」

「え? 良いの?・・・」

早速少年と親友が着替えもせず遊んでいる中クリス達、女子チームは男子陣をほつといて更衣室に向かって行く。

「・・・あつ俺たちも着替えなきや」

「その前に俺を救出して・・・」

女子チームが抜けて行つてから数秒後に気付いた少年達も更衣室に向かう。

「なあ、大木・・・なんで上着着てんの？泳ぐ気あるん？」

「・・・日焼けしたくないし海に入るときに脱ごうと思つていますはい・・・」

「その浮輪は？」

「・・・え？海といえば浮輪では？」

「泳げるんだからいらないっしょ」

「いーじゃん別に、これに浮かぶのも悪くないんだぜい」

浮輪を一所懸命に膨らましている少年にツツコミを入れていると親友がタオルを出して少年に渡す。

「ん？なんだ」

「おまえ、めちやくちや汗でてんぞそれでふいとけ」

「気が利くやん、サンキュ」

気が付けば結構な汗が出ており、せつかくの厚意なので受け取るかと汗を拭きとる。

「和くーん！」

「二人ともお待ちせ・・・」

「おつ二人とも来たか・・・おゝ」

着替えが終わつたのか、響達が声を掛けて来て振り向くと声を上げる。

二人共、XDの水着ギアに似せてきている。

「二人共似合ってるね、可愛いよ」

「和君ありがと！やったよ未来褒めらちやった・・・」

「良かったね響」

「そんな訳で和君、オイル塗ってくれない？」

「いったいどんな訳でオイル塗るんですかね？」

少年に褒められれば響はエへへと喜んでそうだと早速オイルを取り出して少年に頼もうとする。

「まあまあなんと言いますか和君に塗ってもらいたくてと思いましたて．．．駄目？」

「うーん．．．仕方ないな」

「嘘!？」

「ホレ、それ貸して」

「あつ．．．うん」

実際響の考えはこうだこうゆうのにはきつと照れるけどなんだかんだで顔を赤くしながら塗ってくれるというオイルアタックを考えしていたのだが、照れるどころか率先して塗ってくれと言い出してくられて響は動揺しながらもじゃああとオイルを渡す。

「ほら、早く横になって」

「え?．．．え?．．．」

状況が掴めないのかなすがまま敷いてくれたシートの上に寝かされていると後ろで少年が準備をする。

「よし、じゃあ響．．．良いか？」

「うん．．．お願いします．．．(あれ?どうしよう．．．和君にやつてもらえるのはそれはそれで嬉しいんだけども、これ結構恥ずかしい．．．でもこれって和君もようやく異性として見てくれたのかな?だとしたら嬉しいかも．．．)」

そう思いながら響は少年の行動に嬉しく感じ少年の手が響の体に触れるのを待つ。

ピトッ

「ヒャ．．．」

「あつあまりに動かないで、手元が狂う」

「うん、ぐ．．．ごめん」

背中に触れる手の平の感触に少し驚くと少年に注意されて我慢をする。

「(和君の手．．．気持ちいいよお)．ん．．これは病みつきになるう」

「なに言ってるんです?」

「あついや何でもないよー!」

背中越しの感触に気持ちよさげに声を上げて呟く響。

「(それにしても和君の手：結構細いんだねまるで女の子みたい)：あれ?」

「・・・あ」

触ってくる手の平の感触が女の子みたいだと思った瞬間、何かに気付いて顔を上げると目の前の少年と目が会う。

今現在響の背中にはまだオイルを塗っている手の感触がある。そして少年の手は今響には触れていない。数秒の沈黙の後少年は気づかれたかなとほほ笑むと響の後ろに指を示すとそれに並んで響も後ろを見る。

「やあ、響」

「あ、未来」

後ろにいたのは響の親友未来であった。そして未来の手は響の背中に触れていてオイルを塗っていたのだ。

「えと・・・いつの間に和君と変わってたの?」

「うーんと響が横になった辺りかな?」

「ほぼ最初!」

最初から少年がやっていないという事がわかると立ち上がろうとすると未来に止められる。

「あの・・・未来? 私は和君にやってもらいたかったなああんで・・・」

「じゃあ未来ちゃん、後はよろしくう」

「うん和雪君も気を付けてね。ほら響、和雪君は先約がいるんだからこっちで私に塗られていよう?」

「え? ちよ・・・未来!? そこは自分でもできるから・・・ヒヤアアア!」

「はあ・・・はあ・・・響い・・・」

立ち去っていく少年をとどめようとするも未来に止められ響と未来の空間が生まれると未来の息も荒くなり、興奮状態で響の身体すべてにオイルを塗る事となる。

## 42話 内心ドキドキがとまりません

「さて・・・まずは、海の家で焼きそばでも食べてよっかな」

響達から離れて海の家に向かって昼食（時刻は10時）前の腹ごしらえをしようと向かっていた。

「焼きそば二つお願いしまーす、あつドリンクもコーラとオレンジ一つずつで」

たどり着いて少年はさつそく焼きそばを購入し、屋台の中で食べようと席に着く。

「よし、じゃあ・・・いただきまー」やつと見つけた」・・・す？」

テーブルに並べられた食事を見てはさつそく食べようとするをクリックがやって来る。

「・・・クリスマスじゃどうした・・・の・・・」

「そりゃ・・・お前、アタシの水着見たいと思ったからな。どうだ？」

「・・・あつ・・・うん」

「・・・？どうした？」

自身の水着を見せるクリスマスに対して珍しく反応の悪い少年にクリスは首を傾げる。普段の少年であるなら『ウツ（即死）』みたいなことをすると思っていたのだが、少年はクリスマスの水着を見てもそのような反応はなくクリスマスは珍しい反応に問いかける。

「・・・あつ！ごめん、凄く似合っているよ・・・とっても可愛い・・・」

「！そっそうか・・・ありがと・・・」

反応が遅れたが少年はしつかりとクリスマスの事を褒めそれを聞いたクリスマスも頷いて同じ席に座る。

「（あれ？なんだろう、いつもよりクリスマスの事見れないし・・・それになんか・・・）オレンジ飲む？コーラもあるけど」

「オレンジで良い、ちょうど良かった喉乾いてたから貰うぞ」

少年がドリンクを持ってクリスマスに上げると差し出すとクリスマスは頷いて少年が購入していたドリンクを手にとってそれを口に運んで注ぎ込む。

「んく・・・ありがとな」

「・・・どういたしまして・・・(なんかいつもよりクリスの事全然見れない・・・)」

貰ったドリンクで喉を潤してクリスはお礼を言うが少年は横を向いて返事をしている。

少年も自分がこうゆう反応をするとは思っておらず何故か考えるも答えが出てこなかった。

「・・・」

「・・・」

「・・・ねえ」

そんな二人を遠くから見ている響・未来・親友の3つの影があった。

「ちよつと待って、今いいところなんだから」

「確かにそうなんだけども・・・もしかしてさつき未来が言ってた先約ってクリスちゃんなの?」

「そうだよ。でもクリスが探してただけだから多分和雪君はなんも知らないよ」

「あくくじれつたいな!ちよつといやらしい雰囲気にしてきます!」

「ちよつと待って!!」

二人の動きを見て、ウズウズしていて我慢の限界が来たのか親友が立ち上がって二人に止められる。

「ところでアンタは泳がなくて良いのか?」

「ムグツ・・・いや、これ食ってから泳ぐよ」

焼きそばを食べながら質問に答えて、少年はなにやら遠くで騒いでいるなあと思いつながら騒いでいるところを見ようとす。

「だったら、アタシと一緒に遊ばないか?」

「・・・え?」

少年の時間が止まった気がした。



### 43話 振り回してもそんなに効果はないですよ

「どうした？早く行くぞ……」

「おっおう……ってまさかとは思うのですが此処を飛び込む気ではな  
かろうか？」

「そうだ、行くぞ！」

「ぬああああ!？」

クリスマスに連れていかれるとやたらと安全に海に飛び込むことができるといわれる場所にやってきて、下を見ると中々の高さでさぞスリルが味わえるだろうと思い、まさかと少年はクリスマスを見るとクリスマスは笑って見せて少年の手を引っ張ると有無を言わさず海に飛び込む。

「……プハア!……飛び込むのも悪くないな……てかけつこう深いな此処」

「……プハア!……飛び込むのも悪くないだろ？」

二人で一緒に海面から飛び出るとそれぞれ感想を言っては互いを見る。

「所でどして俺を？響や未来がいるのに……別に俺じゃなくても……む？」

ふと疑問に思った事を問いかけようとするとクリスマスに人差し指を口元に持つてきて、抑える。

「アタシがお前と遊びたいからだ、最近お前エルフナインと一緒にいるからな。たまには構えつつんだ」

「……それはまたなんとも……まあ俺はクリスマスと一緒にいられるとか嬉しいかぎりなんだけど……」

確かに最近はクリスマスに関わる事がなく、エルフナインに限らずマリア達とも一緒にいた為、クリスマスはたまにはと考えていて動いてくれたのだが、そんなクリスマスに少年は本来ならこうゆうセリフに過剰に反応するはずだったのだがあまりクリスマスを直視することができないらしくクリスマスを見れば直ぐに顔をそらす。

「どうした?……」

「あつ……いや、ごめんその……なんでもない」

「?・・・なんだよ、いつも変なお前が今日に関してはおもつと変だぞ」  
「え?俺、変人として認識されてるの?」

「え?・・・」  
「え?・・・」

あまりクリスを直視できない事からなんて言えばわからず困惑している姿を見たクリスが少年の困惑ぶりに首を傾げて伝えると、互いに顔を見合わせてからなんとも気まずい雰囲気になり、無言で砂浜に上がる。

「やつべ、パーカー着たまんまだからめっちゃ重・・・脱ご」  
「・・・おお・・・」

濡れたパーカーを脱いでギユウつと絞っていると少年の上半身をクリスがまじまじと見ていた。

「ん?どしたんよ」

「・・・!?いついや、なんでもない!」  
「・・・?」

「(こいつの身体ってこんな良い身体してたか!?まじまじと見ちゃつたけど変に見られてないよな・・・?)」

少年の身体つきに見惚れていたらしく、眺めていると少年が声を掛けるまで気づけなかったクリスは顔を真っ赤にしながら顔をそらし、変に思われてないのか心配になって、もう一度少年の方を向くと

「これぐらいでいいかなあ」

パーカーを絞っては振り回していた。

## 44話 流石に恥ずかしい

「さて、こんなんでいいかな」

多少の水気を切ったパーカーを着てはクリスの所に戻ってくる。

「さつ、行こうぜい」

「ん、わかった・・・」

少年が戻ってくるの見てからクリスは少年のパーカーを見て、気になったのか質問をする。

「なあ、お前ってなんでパーカーなんか着てるんだ？」

「ん？ああ、これね・・・ただ単純にあんまり日焼けしたくないんだよ。俺、結構直ぐ焼けちゃうから・・・」

「そうゆうもんなのか・・・」

クリスの質問に遠い目をしながら少年は答える。

「まあ日焼け止めを塗ればいいだけなんだけど、ぶっちゃけ塗るのめんどくさい」

「ふーん・・・あ・・・」

そう言って歩いていく少年を見て何か考えると何か思いついたように閃いてそれを口にする。

「なら、アタシが塗ってやろうか？」

「おお、それはありがたいね・・・塗ってくれるなら全然あり・・・よ？」

クリスからの提案に少年は特に気にすることなく答えるが、少し考えてから少年は「ん？俺今何を聞いて答えたんだ？」と今一度クリスの方を見る。

「ねえ、クリスさんやい」

「なんだ？」

少年、質問をする。

クリス、答える。

「日焼け止め、塗るの？」

「ああ・・・」

少年、質問をする。

クリス、答える。

「誰が？誰を？」

「アタシが、お前を」

クリス、少年に指を指す。

「・・・俺、今日死ぬかも」

「馬鹿言ってるんで嫌か嫌じゃないのか答える！」

「あついや・・・別に嫌じゃないけど・・・」

「けど？・・・」

クリスの事を見てから少年は何か思い、答えず後ろを向く。

「ごめん、やっぱりいいや。塗るのは」

「そうか・・・」

何か思っただけで断ると後ろで残念そうに答えるクリスの言葉を聞いて少年は思う。

「(なるほど・・・これはやばい・・・完全に駄目だ)」

何かに気付いた少年は今の自分の顔を見られたくないと顔を隠し

「(俺、完全にクリスの事推しじゃなくて、恋愛対象として見てんじやん)」

この感情には覚えがあった。

中学の頃、木崎美奈に向けていた感情とほとんど同じだったのだ。

席も隣同士って事もあり、時間が流れるのと同時にその好意も同じように上がっていた。

だが・・・

「(いくら何でも早すぎる・・・)」

モニター越しから見えていた感情が無くなり、今は目の前にいる女の子を完全に好きになってしまったことに少年は苦悩する。

「(俺って、こんなに惚れやすかったか?)」

等と思いつながら少年は歩き出してそれを後ろでクリスが眺めていた。

「・・・(なんか様子がおかしくないか？アイツ)」

## 45話 少年は隠れた

「あのやろお・・・どこに隠れた？」

「見つけ出して縛りあげて見せるぞ！」

「おう！」

夕方に差し掛かった辺りにみなホテルに戻るとクラスの男子陣が血相を抱えて誰かを探していた。

「なにやってるのあれ？」

「なんかクリスと一緒にいた和君を男子陣が捕まえて和雪君の苦手な映画を見せようとしてるみたいだよ」

「・・・へ」

その光景を見ていた響と未来はそんな彼等（少年の親友も混ざっている）を見て何をそんなに探しているのか疑問に思ったのか響が問いかける。

「どうやら探しているのは少年だったらしく、クリスと一緒にいた少年を処しようとして男子陣が結託していたらしい。」

「ん？苦手な映画って？」

「日本ホラー映画特集」

「うわあ、クリスちゃんもダメなやつだ。だから倒れてたんだね」

因みにクリスはその時に見せられたホラー映画の一部を教えられて倒れたらしく二人の近くで寝かされて介抱されている。

なお少年が苦手とする映画は日本の呪殺系・・・つまり呪怨とかがめっぽう駄目である。理由は「物理が聞かないやつって滅茶苦茶怖くて無理」だそうだ。

「ところで未来・・・」

「ん？なに？」

「クリスちゃんの隣で寝てるこの人は？」

「あっ確かこの人は・・・」

介抱しているクリスの横にもう一人いる女の子。

「どうやらクリスの前に倒れたらしく何かを見て倒れたらしい。」

「篠崎薫ちゃんだったね。因みに原因は好きな人の体を直視したから

らしい」

「え……」

もう一人の倒れている女の子こと薫は密かに想いを寄せていた男の子の裸体を直視して倒れたのだが、その直視した男の子というのは先程までクリスと一緒にいた少年らしい。

「……私も和君探してくる」

「え？響？」

その話を聞いてスツと立ち上がる響を見て未来は首を傾げて響を見ると、響はとても良い笑顔を未来に見せてから少年を見つめるべく走り出す。

（まったく和君はしようがないなあ、私やクリスちゃんだけでなく他にもいたなんて……オイルの事もあるしこれは少しお仕置きしなきゃ……）

実は少年と薫の接点はあまりないのだが響はその辺りは関係ないと思っており少年をとりあえず見つけては早めに手を打とうと走る。

（既成事実って……良いよね）

その時響の目はとても濁っていた。

（なんで響も参加するんですかねえ!?!）

暗いどこかに隠れている少年はどこからかした気配を察知したのかブルッと震える。

夕食のBBQまで数時間。なんとかそれまでの時間までやり過ごせばみんな忘れると信じ少年は隠れる。

（お願いします神様どうか見つかりませんように……BBQの時間間に合いますように……）

## 46話 ホラーはやめて

・・・ワアアアア

「ん・・・」

外が騒がしく目が覚めたクリスは起き上がり、周りを見ると日が沈みかけていて各々がBBQの準備をしていた。

「あつ目が覚めたんだね」

「悪い・・・なあ、あいつは？」

目覚めたクリスに気付いた未来は飲み物を用意して渡し、それを受け取ればさつきまでいた少年を探そうと辺りを見渡す。

「和雪君ならあそこだよ」

「・・・何やってんだ？」

未来の指を示した先には件の少年が吊るされていて絶賛生贄に捧げられるが如くさらされていた。

「さあ皆の者よこのリア充を断罪すべく集まっていたいただき感謝いたします」

親友が少年に現れると火を掲げてお辞儀をすると男子陣（嫉妬している者）は雄たけびを上げる。

「ちくしょう・・・捕まってしまうとは、響の索敵能力凄すぎ・・・」

「・・・うう・・・せつかく和君を最初に見つけて二人きりになれたのに」

未来の隣で何かシクシクとすすり泣く声があると思い覗き込むと水着姿で膝を組んで泣いている馬鹿（響）の姿があった。

どうやら隠れている少年を最初に見つけたのは響だったようで、海の家の一入分は入れる更衣室に隠れていたところチラツと見える少年の足元に気付いてそこを上から入室、少年の悲鳴と同時に数分間更衣室が暴れだし、静かになると響に組み付かれた状態で更衣室から飛び出してきて、海の家から外に出て来たところをクラスメイト達に捕まったのである。

「よくし、大木よ。何か言い残す事はあるか？」

親友が少年の前にモニターを持ってこきせてディスクを持ってこ

させると、某どこかの愉悦神父の顔で少年を見つめる。

「もし慈悲があるなら、一思いにやってください」

少年がそう答えると親友はニタアと悪い笑みを浮かべて少年に向けて……

「喜べ、君の願いは叶えられる」

「いや、いつたいどこの愉悦神父様だよっつてあついやナンデモナイデスホントに！」

愉悦顔の親友にツッコみを入れると即座に顔を固定され、やばいと感じるも親友を止める手立てはなく。親友はそんな少年に笑みを浮かべてディスクを再生する。

「それではまず最初に○怨から行こうか」

「マジで!?最初がそんなハードで良いの!?俺もう耐えられないよ!?!」

「それじゃあスタート♪」

「アツ……オワツタ」

その後数分後に少年の悲鳴がホテルに響き渡り、そしてその悲鳴も小さくなりやがて力尽きる。

「所で響は和雪君と何してたの?……教えてくれる?」

「あれ?未来……顔がすごい怖い……」



## 47話 ガチかよ

「なんやかんやあって少年達は夕食を食べ終えて後日水族館へ観光するため、どこを回るか相談しているのだが・・・」

「お前、いい加減出てこいよそれじゃあ話すすまないだろ」

「和君出ておいで、もう怖いものなんてないよ」

「大木よ、早く出てこないと勝手に決めちまうぞ」

「・・・」

「重症みたいだね」

少年と親友の部屋に集まって響・クリスマス・未来を含めた5人で会議をしているのだが少年が前回のホラー耐久の後遺症からか部屋の布団にくるまってベッドの上で動かないでじっとしていた。

「嫌だ・・・怖いのはもう嫌だ・・・」

「大丈夫だよ和君。もうホラーはやらないからさ」

「響は響でホラーじみたストーリーカー能力があるから正直怖い」

「あれえ!?! 私にも飛び火が来た!?!」

響がちよんちよんつとくるまっっている少年をつつくがふいつと響に背中を見せるように移動し響も怖いもの認定していること伝え、響は驚いてガクツと膝をついてショックを受ける。

「にしてもこんな怖いなんてお前結構なほどの怖がりなんだな」

「クリスマスちゃんも人の事言えないよね」

「うっ・・・」

「え、雪音もホラー耐性ないの?」

「そっそんなわけねえし!別に怖くなんか・・・ないし」

「おおこれまたわかりやすい見栄をはってらっしやる」

面白半分で少年を見てクリスマスが呟くとそれを聞いた響が八つ当たり気味に答え、クリスマスは強がって見栄を張る。

そんなクリスマスを見た親友はおおつと驚き苦笑する。

『幽霊みたいな存在なら此処にいろだろうに・・・』

「!・・・いやキャロルは違うだろ・・・話できるし別に悪くないと思ってるよ・・・後ビツクリするから驚かさないで。ついでに顔近いんじや

が

ぬうつと突然布団の下から顔だけ現れたキャロルに驚くも少年はジト目で否定して顔が近いことからそっぽを向く。

それを見たキャロルはその反応に笑い自身の唇に指を当てる。

『なんだ、照れてるのか？別に構わないぞ、思い出の共有じゃなくてもオレはお前が望むなら何時でも来て良いぞ？』

「・・・いや、良いです」

『よし、良い子だ。後でな？』

「あれ？おかしいな否定した筈なんですが」

少年を誘うように自身の唇をなぞってキャロルは微笑むが少年は以前夢の中だったがその行為を思い出して否定しようとしたのだが、キャロルはそれをわざと理解したうえで少年に返答して、少年は啞然とする。

「和君どうしたの？」

「あついやなんでもない。独り言だから」

そう、響達はキャロルの事を見えることはできないでいるらしく、その事もキャロルに止められているため、説明できないでいる。

「もう、ホラーはこりこりだわ。風呂行ってくる！」

「明日の予定は!?!」

「水族館だしそこまで中で調べれば良いでしょ。行き当たりばったりで行きましょうや」

「さんせー！クリスちゃんも未来もそれで良い」

「私は平気だよ」

「アタシも構わねえ」

「意外！早く決まった！」

少年は早く風呂に入りたいのか行くと伝え、明日の予定を適当に答えるとそれぞれ賛同して会議が終わる。

少年が立ち上がると逃げるように着替えを持って行くとするが肝心の着替えがなく探します。

「あれ？俺の着替えは何処に？」

「あつはい和君これ」

「あっありがと響」

響が少年の着替えを《持っていて》少年に渡して少年も普通に受けとる。それを見たクリスと未来は呟く。

「なあ、あれはつつこまなくて良いのか？」

「大丈夫だよ。もう諦めている顔してるから」

## 48話 最近こんな役回り

「所で和雪さん、ボク気になる事があるんですけど……」  
「ん？なんだい、エルフナインちゃん」

臨海学校に行く前日、少年はポツキータを食べながら昼食を作っており後ろから質問をくれたエルフナインに返事をする。

「和雪さんは以前、スポーツをされてたと健太さんに聞いたんですけど何をしてたんですか？」

「んん……ソフトテニスだけ……」

「へへ、意外ね」

二人の会話を聞いていたマリアがテーブルに食器を置きながら会話を混ざる。

「中学の頃の話だよ、高校に入ってからはやってないけど」

「ふくん、それまたどうして？」

フライパンを取り出して何かを焼いて、答えるとその場に一緒にいたマリアは首を傾げて問いかける。

「ちよつとね……色々あるんですよ」

どうしてかと聞かれ、少年は思いつめた表情になるとその場から逃げるように話を逸らそうと答える。

「でもどうして急に？」

「えと……引越しの時に健太さんや他のトロフィーはあったのに和雪さんだけなかったじゃないですか。その時和雪さんは合うやつが無かったって言ってましたけど」

「うーん確かに言ってたけど……」応合うやつって言うかなんかしつくりくる奴がなかったただけでこれだけは続けようってやってたやつはあるよ」

「へー、それじゃあなにやってたのかしら？あつ良い香りね」

エルフナインの疑問に答えるとマリアも気になって少年に近寄り、その時に漂う香りに気づく。

「ソフトテニスですよ。あつ今日のご飯はかに玉ご飯です」

「わあ……おいしそうです！」

「今日もすごいわね・・・とても美味しそう」

「お褒めにあずかり光栄でございます」

完成した料理に二人は舌鼓を打つ。

出来上がった料理を運んでくるとその香りにつられてもう一人やってくる。

「何やらしい香りがしてきたと思い、起きてみれば美味しそうな朝食が出来上がってるではないか」

「おはようございます、翼さんちなみに今は真昼間でございますが？」

「・・・え？」

扉を開けて眠気眼でやってきた翼に挨拶をして時計に指を示すと、翼は目をパチクリさせてから時計に目をやるとようやく自分が起きた時間に気付き顔を赤くすればすぐさまに同室のマリアの方に視線を向けて起こしてくれなかったことに対しての講義を開始する。

「どうして起こしてくれなかったのだ！」

「起こしたわよ、でも貴女「もう少し・・・ムニャ」って言いながらそのまま寝ちゃったじゃない」

焦って講義するも直ぐにマリアに返されてしまい、マリアはご飯を食べながら少年の方に質問する。

「どう思う？この剣・・・」

「もう防人のさの字も感じられないただの女の子ですね。本当にアイドルやってまし「ふん！」ぶるあああ!？」

腕を組んでウンウンと頷いて答えると渾身の腹パンをもろに受けて床に転がる。

ピンポーン・・・

床に転がっていると誰かが来た知らせを受ける。

## 49話 遅かったプレゼント

ピンポーン！

「んあ？・・・」

「あら？誰か来たのかしら？」

チャイムがなり床に転がっていた少年は起き上がり入口に向かう。

「はい、今出ます・・・」

扉を開けて確認をするとそこにいたのは宅配業者の人だった。

「こんにちは、白猫の宅急便です」

「あつども・・・」

「こちら大木 和雪さんのお宅で間違えないでしょうか？」

業者の人に間違えていないと伝えると業者の人はさっそく荷物を渡してくれる。

「こちらの荷物にサインをお願いします」

「はい・・・あつ・・・」

荷物を受け取りサインをすると業者の人は直ぐに帰っていく。

荷物は2つあり一つは少年が注文していた物なのだがもう一つのダンボール箱を見ると見慣れない文字が書いてあり少年はその文字を読むことはできないが見た事のある文字のためこれがどこからきたのか直ぐに理解する。

「・・・戻った」

「あつ和雪さん。・・・どうかしました？」

「ご飯を食べていたエルフナインが戻って来た少年を見て浮かぬ顔をしているのを見て声を掛ける。

「あつ・・・ごめん宅急便だったよ」

エルフナインに声を掛けられて気付くと一言謝り荷物を床に置く。

「む？この荷物は海外の文字ではないか」

一つ見慣れない文字が書かれた荷物を見て翼が気付く。

「うん・・・これ、タイから送られてきたやつだよ」

「タイっていうと確か君の両親がいたところではないのか？」

「そうですね。でも、どうして急に・・・」

そう言つてダンボール箱を開けて中身を確認すると中に入っていたのは……

「帽子に……また箱？」

「さっきのダンボール箱よりはしつかりとした入れ物ね」

「うわ……おつきいですね……」

中に入っていたのはやたらと大きな帽子でそれを手に取ったエルフナインの表情が余裕で隠れるくらいには横幅が大きかった。そしてもう一つ入っていた箱にはしつかりとした素材でできた箱で中に入っているの為、高価な物が入ってるんじゃないかと思われる。

「……もしかしてこれって君の両親が送ったものじゃないかしら？」

「……俺？」

マリアがこの箱を見てあるものに気付くとそれを手に取つて推測を立てるとするともしかしたらと仮説を立てて少年に問いかける。

「ほら帰ってくるときにこんな大きなもの持っていると気付かれるから、こようゆう風に輸送してもらつて、何もないと見せかけてこれが届いたときに頃合いを見てプレゼントするつもりだったんじゃないかしら？ 貴方につて……」

「……」

そう言つてマリアは少年に先程手に取つた物を渡す。

「手紙……」

どうやら見つけたものは手紙だったらしくそれを開いて中身を確認すると。

《ハッピーバースデー》

「……」

少年はその手紙を見ては少し考え込みその後クスツと笑う。

「おいおい……誕生日までかなり先じゃんか……まだ数カ月もあるし」

「和雪さん……」

少年の様子を見てエルフナインが心配そうに見つめるが、少年は手紙を置いてはもう1つの箱を開ける。

「開けてよかったのか？」

「どうせわかるんだ、此処まできたら後でも今でも変わらないよ」

開けた箱を見て翼が問いかけるが少年は平気な顔で答えて取り出す。

「……ん？」

「わぁ……」

出てきたのは水色のペンダントでその形はどことなく響達が持っているギアに似ていた。

「……誕生日にはまだ早いけどもらつとくよ。父さん……母さん」



## 50話 温泉イベントはやっぱりこれよ

「はふうく、やっとゆっくりできる」

『ほう・・・案外悪くないものだな・・・』

「・・・」

クリス達と別れて少年はキャロルと一緒に温泉に浸かっていた・・・

キャロルと一緒に「二度言わんでええ！」

『突然どうした？』

「なんでもねえ」

『そうか・・・』

突然何かにつつこんだ少年に驚くもその後は普通に接するキャロルに少年はジト目で見る。

「とゆうかなんで普通に温泉を堪能できてるの？」

『別に決まった理由はない。強いて言うならお前との思い出の共有のおかげではあるな』

『どゆこと？』

何故か普通に温泉に浸かっているキャロルの説明を聞いて少年は首を傾げて理解ができていない顔をする。

『お前と《何度》も思い出を共有したおかげでオレにもお前と同じ感覚を得られるようになったと言うことだ。例を挙げるならそうだな・・・お前が何か食べた時それがおいしいと感じたときオレも同時にそのおいしい感覚を味わえると言うことだ』

「・・・つまり俺がいま感じている極楽気分をアンタも一緒に感じるって事か」

『そうゆうことになる』

「なるへそ」

キャロルの説明を理解でき、ほえくと納得する少年にキャロルは少年のいまいちな反応に少し考える。

『そう・・・《何度》も共有したおかげでな』

「連呼しないでもらっていい？結構恥ずかしいんだからあれ！」

『恥ずかしいなら別に拒否してもよかったのだぞ？』

「夢の世界の主導権、アンタが握ってんだからほぼ抵抗できないの知ってるよね？」

『だが、悪くなかっただろ？いつからだったか抵抗もしなくなっているし』

「だああやめてくれ！改まって言われると恥ずかしい・・・」

そう、実はキャラルが少年に憑いてからずっと思い出の共有をしていたのだ。

初めの頃こそは抵抗していたのだが夢の世界での主導権をキャラルに握られており、抵抗も許されず、ほぼ無抵抗な状態で共有させられてるのだ。何度もやっていくうち「夢だし・・・良いかな」と言う考えにいたり諦めていた。

「一応聞けどあれだけやって最終的にはどうするの？」

『あく言ってなかったな、お前の夢の中から思い出に介入してお前の力の正体を探り当てる』

「俺の思い出から？」

『ああそうだ、お前の事だからどうせわからないだろうし思い出せないだろう？だから俺がお前のすべてを知ってやる』

「まじか・・・」

聞けばかなり凄いことをしようしており、確かに謎の力の正体は少年自身も知りたかった事ではあるのだがキャラルの言っている事も一理あるためただ哑然とするしかなかった。

『まあ、大体の目星はとつくの前についていたのだがな』

「ええ!?!じゃあ今までの事は!?!」

『成す術なくオレに蹂躪されるお前の姿がとてもおもしろかったのにな、ずっと続けてた』

「ええ・・・」

腕を組んで頷くキャラルに少年は驚いてつつこむがキャラルは笑顔で少年を見て・・・

『どうやらオレはお前が恥ずかしくなっている姿を見るのがめっぽう好きになってしまったようだ。これからも続けるから頼んだぞ』

不適に見せたキャラルの微笑みに少年は顔を赤くし、その瞬間を

キャロルは見逃さなかった。

『今心拍数が跳ね上がったな、どうやらお前は弄られるのが好きな体質なようだな。これは良かったな相性は良かったな』

「おっ俺はMじゃねえ！」

『別にお前がマゾだなんて・・・自覚症状有りか』

「おいこら、なに一人で納得してんだ」

そうして二人で話しているところにガラガラつと戸の開く音がする。

『ほら、誰か来たぞ。このままオレと話してたら変な目で見られるんじゃないか?』

「・・・チツ後で覚えてろよ・・・」

誰かが来たことによりキャロルとの会話が途切れ、そのまま少年は舌打ちをして自然な風を装う。

「なんだ五木田・・・随分遅かった・・・た・・・」

部屋で親友と別れ、風呂場で合流する予定だった為、少年はやっと来たかと立ち上がるがやって来る親友のほうに目を向ける何か違和感を感じる。

湯煙の向こうにいる親友だと思ったシルエットはあまりにも身長が低く髪も長くそれはあきらかに親友ではなかった。

そして煙が晴れてきて現れたのは少年のよく知る人物であった。

「なっ・・・あ!・・・」

「あっ・・・え!?!」

そう、目の前にいるのは

「クリス!?!」

「なんでお前がいるんだ!?!」

二人の声は同時に露天風呂内に響き渡りそして少年の鼓動も早く打ち始めたのをキャロルは感じ取っていた。

『ムツ・・・オレより反応が良いな・・・』

## 51話 迫る女子達

「なんで、クリスがいるんだよ!? ここ男湯だぞ!」

「何トンチンカンな事言ってるんだ! 女湯だぞ!」

「え? . . .」

「は? . . .」

二人は互いに口論するが噛み合わず「あれ? . . .」な表情になるが暫し止まると現状を再確認してクリスはタオルで自分の身体を隠し、少年は後ろを向いて視界を無理に外す。

「一応、確認するぞ . . . 覗きじゃないよな?」

「まさか . . . 覗きならこんな堂々と此処に来ないよ。覗きなんて度胸 . . . ないです」

「 . . . ほんとか?」

視線を外してクリスに問われれば直ぐに答え、その場から離れようとする。

「とつとりあえず後でいくらでもお叱りは受けるから俺は出るから! ほんとごめん」

「あつちよつと待て!」

目を閉じて少年は急いで出ようとクリスの横を通り過ぎ、そのあたりでクリスに腕を引っ張られる。

「にやぶ!」

「悪い . . . でも今は行くな . . .」

「 . . . ゴホツ . . . えっ何!?! . . .」

腕を引っ張られ思い切り温泉の中に引きずりこまれ、着水しなんだ? と顔を上げるとその理由を理解する。

「お待たせ!」

「響走らないの . . .」

後に響、未来がやってきたのである。

「うっそだろ . . .」

「っ早く隠れろ!」

「隠れろったって何処に!?!」

隠れると言われて周りを見るも隠れられるような障害物もなく少年は慌てるとクリスに頭を掴まれる。

「フーン！」

「えつまぎー……」

最後までセリフを吐くことはかなわず少年はそのまま全身、温泉の中に入りそれを隠すようにクリスも中に入る。

「あっクリスちゃんもう入ってる」

「あつああ……楽しみだったからな……つい飛び込みました」

「そうなんだ……」

「……」

背中越しに少年を隠してクリスは入ってくる二人を見て少年に小声で言う。

「暫く後ろにいろ……二人が出たら出してやる。後見たら殺す……」

「……」

少年はクリスのやろうとしている事に気付けばコクコクと頷いてちよこつと顔を出して空気を入れれば潜水を開始する。

潜った後クリスは視線を感じ、顔を上げると響がジーンとこちらを見ている。

「なっなんだよ……」

「ねえクリスちゃん……なんで隠してるの？」

「はっはあ!?!」

「!?!……」

響の発言に二人は驚愕し跳ね上がる。まさか気付かれた!?!とクリスも慌ててると響はそんなクリスに近づいていく。

「なっなんでって……」

「もうだめだよ?タオルはお湯に付けるのはマナー違反なんだからタオルは外さないと!」

「え?ちよつ待って!うわああ!」

どうやら響は少年の存在に気付いていなかったのだが、その代わりにクリスの巻いたタオルに手を掛ければそれを一気に引っぺがしクリスの裸体があらわになる。

「・・・!?」

少年は目の前に起こった事に驚き、クリスの身体を凝視してしまっ  
た。

ナニかがレベルアップしました。

## 52話 響の気持ち

「はふうく、生き返るく」

「結構良いところだね」

「・・・そうだな」

どこかで見たことあるような会話をしている三人。

クリス・響・未来はそれぞれ夜空の景色を堪能しながら感想を述べているのだがここにもう一人気が気でない人がいる。

「・・・ゴポ・・・」

只今温泉の中で潜水している少年である。

「全く、響は・・・あんまり和雪君に迷惑掛けちゃだめだよ？」

「えへへ・・・和君優しいから甘えなくなっちゃうんだ」

「・・・あれで？」

クリスの脳裏に思い出されるのは・・・

『和くくん！デートしよー！』

『嫌です！』高速チョップ

『あいたあ!?!』

『和君、背中流しに・・・』

『良いよ、響』

『和君だと思ったら未来だった!?!』

『騙されたな・・・じゃつごゆつくりー』

「・・・アイツの回避レベルが上がってるだけじゃねえの？」

「確かにそうだね・・・」

「うう・・・どうしたら和君振り向いてくれるのかな・・・」

思い出すのは響が少年にかわされる日々。

むしろ少年はじよじよにそのレベルも上がっている。

湯船に残念そうにしている響にクリスが質問する。

「なあ・・・なんでそこまでアイツが好きなんだ？・・・前にも言われただろ？いずれはアタシ達は元の世界に戻らなくちゃならないだ

ろ・・・」

「・・・」

少年が息継ぎをする為、顔だけ出すとそんな会話が聞こえ、本来この会話が気になってしまい聞き入る。

「確かにそうなんだけど・・・私一度思ったんだ。和君、今はああだけでもし私達がいなかったらどうなってるんだらうって」

「アタシ達が・・・？」

「・・・あつ！もしかして」

響はクリスの問いに頷き答えると、クリスはどうゆう事かと首を傾げるが未来は理解したらしく響に問いかける。

「和雪君のお父さんとお母さんの事？」

「！・・・」

「うん・・・」

未来が答えるとクリスもハツとしたように理解し、響を見る。

響は頷き続ける。

「和君のお父さんとお母さんが居なくなつた時私達がいたから、一人になることなく今のままでいられたと思うんだけど、もしいなくなつて和君のそばに誰もいなかったらきつと違う事になつてたんだと思うんだ」

そう答える響は自分の手を弄りながら更に続ける。

「だからね・・・これは私なりの人助けだし、私が一番やりたいことなんだよ」

「・・・」

「・・・」

笑顔で答える響に二人は黙って聞き入れるがその次に言われた言葉に驚く事になる。

「それに、もし帰ることになつたらって言つてたけど・・・私は残るよ」



## 53話 聞いてしまった

「残るってお前・・・本気で言ってるのか？」

響の発言に驚いたクリスは少し落ち着いてから問うと響は頷く。

「正直自分の世界に帰りたくないって言うなら嘘になるけど、和君のいるこの世界も悪くないと思ったんだ」

クリスはそれを聞いてその手があったかと思いは始める。少年には以前クリス達がいなくなつた後の話をしていて少年をこちらの世界に連れていこうと思つていたが拒否されてしまったが・・・逆にこちらに残れば少年と居られるということに・・・少年の横に居る自分の姿を想像するとクリスはハツとなにかに気づく。

（なんでアタシも居ようと思つたんだ？アタシは・・・アタシの世界があるのに）

少年の隣にいる自分の姿を想像し表情が綻んだ事にクリスは自分で気づき直ぐに首を横に振つて響を見る。

響は両手で温泉の水を掬い上げて水面に写る自分の顔を見ながら更に答える。

「でもよくわからないんだけど最近和君・・・変な時があるんだ」

「変な時？」

響の表情が曇り、答えると未来が反応する。

「うん、今日の海でも見れたんだけど・・・和君の胸元辺りに変な痣が見えるんだ・・・すぐに消えちゃうけど」

「胸元？・・・」

「そうそう、確か心臓辺りの位置に・・・」

そう言つて自分の胸元辺りにこれくらいの大きさを見せようと野球ボールぐらいの大きさを作つて見せる。

それを見た未来は思い出すように「あつ」と声を上げる。

「確か和雪君つて変なのが心臓部分にあるってエルフナインが言つたよね？」

「心臓部分・・・」

クリスが呟いてから考えた。

これ以上の会話は何かまずいような、後ろにいる少年が居るのにこの会話を続けて良いのだろうか。

確かにクリス達を呼んだのは少年だったのだがクリスと響がこちらに来たとき少年は特に変わった様子は無かった。強いて言うのであればどちらとも一緒に寝ていたくらいである。

だがマリア達が来たときは少年の身体に異常が起きていたのだ。

今思えばあれは容量の問題だったのでは？とクリスはそう推理していた。もし彼が一度の力を行使する時容量があり人一人分呼び出す程度なら問題はないとが大人数を呼ぶ際に身体に影響を及ぼすんじゃないかと。

「なっなあ．．．!?」

「え?．．．きゃあ!?」

「うわ!?!」

クリスがそう言って立ち上がるのと同時に後ろのほうで大きな水飛沫があがりその場にいた3人に温かい水が降り注がれる。

「なんだ．．．今の．．．」

突然起きた出来事に3人は同時に同じ方向に向いて見るがそこにはなにも無く普通の景色が写っているだけ．．．

少年の姿が何処にもいない

## 54話 黒い影

「……!」

「クリスちゃん!」

「どうしたの!」

少年がいたであろう場所を見つめると、クリスはハッと何かに気付いて急いで走り出して温泉から出ていき、それを見ていた二人も慌てて追いかける。

「……やっぱり」

あの大きな音が出た後脱衣場であるものを確認した後、急ぐように私服に着替え、クリスを追いかけるように響達も着替え終われば急いで外に出る。

「ねえ!……ねえ!クリスちゃんってば!」

「……なんだよ!」

急いで走るクリスを響が呼びつけると立ち止まって声を荒げて返事をする。

「いったいどうしたの?」

「……アイツがいなくなった」

「え?……アイツって……和君?」

響が問いかけるとクリスは少年の事を教えると響は首を傾げてはいたのだがそこに未来が答える。

「さっきの場所に和雪君がいたんでしょ?」

「え?」

先ほどのお風呂場に少年がいた事を伝えると二人は驚く。

「……気付いてたのか?」

「うん……入る前に和雪君の脱いだ服が籠に入ってたの見たから……」  
気付いたときにはもう入っちゃってたと付け足して答えると響は少し考えて声を掛ける。

「それじゃあ……あの爆発みたいなのって和君が?」

「……わからない」

あの時は後ろを向いていたし何をしていたかはわからなかったが

あんな大きな音を出してやる必要はなかったはずだった。

「とにかく、今はアイツを探さないと・・・もしかしたら・・・やばいことになるかもしれない」

「え?・・・」

クリスの出した勘に響は首を傾げ急いで探すことにする。

「・・・ん? アイツら何してんの?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沖縄の繁華街の街の人が通る所に黒い何かが突然そこに現れた。

この場所は観光で人通りも多くそれなりに人も多くいるのだがそれは何事もなかったかのように現れ、黒い何かはそのまま動き出す。

「次何処に行く?」

「そうだな」

二人組のカップルが歩いてきており、どうやら二人は食べ歩きをしていて何件も回っていたようだ。

「・・・ねえ、あれ何?」

「あれ・・・?」

彼女が気付いて彼氏にわかるように指を差し彼氏も示された方向を見ると目の前の黒いそれに気付く。

黒い何かはゆらゆらと辺りを動いていて、壁にぶつかれば暫くその場で留まりやがて動き出してまた移動をする。

「・・・・・・・・」

二人はそれを眺めていて、見られているそれは気付くこそぶりを見せず先の行動を繰り返していた。

「・・・何かの見世物じゃないの? ほらロボットみたいな・・・」

「・・・ええ? そうなの? なんかそんな感じには見えないけど」

ゆらゆらと動いているそれは二人に気にすることなく歩いているが次第に二人に近付くとピタリと立ち止まり、そこから動かず二人はソレを見て違和感を感じだす。

「……ねっねえ……なんか変じゃない?……?」

彼女が声を掛けるが彼氏からの返事は無く、返事がないことに彼氏の方を見るとそこにはさつきまでいたはずの彼氏の姿は無かった。

「……え?」

確かに一緒にいたはずの彼氏が消え、理解が追い付かず思わず後ろの方に移動すると何かにぶつかり振り向くと……

「……」

先ほど目の前にいた黒い何かが彼女の後ろに立っており、先程よりでかく見えている。

「……キツ!」

彼氏が消えた事と目の前の気味の悪い黒い何かに恐怖を覚え、思わず悲鳴を上げようとするが彼女がそれを口にする事はかなわず黒いソレは彼女の身体を包み込むように覆い被さり、飲み込まれる。

「……!」

最悪なことに飲み込んだ姿は誰も見ておらず、黒いそれは飲み込んでから一瞬ブルッと身体を震わせた後動き出しその足元には影だけが取り残されており、よく見ると彼氏がいた場所にも同様の影が出来上がっていた。

動き出した黒い何かは暗い道に入り込み溶け込むように消えていく。

## 55話 黒い雪音クリス

『…い…ろー…起きろ!』

「…ううん」

何処からか聞こえるキャロルの声に少年はようやく目覚め起きあがると横でずつと少年を呼んでいたキャロルが起き上がる少年を見て頷く。

「良かった…目が覚めて」

「あれ…なんで俺、此処にいるんだ?」

安堵するキャロルに目が覚めた後軽く頭を押さえる。

突然起きた事に理解が追いつかず、辺りを見渡していると少年は砂浜にしていることに気付く。

「確か、あの時…」

『おい、目が覚めて思い出そうとするのは大事な事だが』

少年が先程起きた事を思い出そうとするとそれを止めるかのようにキャロルに言われキャロルのほうを見ると何処か別の所を見ているのかある一点を見つめていた。

「…どうした?」

『…あれは、お前は知っているか?』

「あれ?…!?!」

キャロルが指を示した場所を見ると海面の上に黒く細長い何かを立てていた。

「見るからにあれやばそうなんですが!?!」

ゆらゆらと揺れている黒い何かを見た瞬間、ゾワリと身体中に悪寒を巡らせ直ぐに危険な奴だと思えば直ぐに逃げようとキャロルを見るが…

『な……に!?!』

「キャロル?…!?!」

驚くキャロルに少年は声を掛けるが、その瞬間少年は固まったように動きが止まった。

感覚で気付いてしまった。それがもう近くまで来ていたことに。

「…っ！(動けない…)」

離れないといけないということはわかってはいるのだが、金縛りにかかっているのか身体を動かすことができずにいる。

「…」

黒い何かは動かない少年を見ると黒い身体から触手のような物が伸びてきて少年の額に触れる。

バチイ！

「アツアア!!」

『和雪!…グウ!』

額に触れた痺れるような感覚に襲われ共に感覚を共有しているキャロルも同様の痺れを受ける。

「アツアアア!」

「…これ何?」

「コレはね…様の物だよ君にあげるから食べていいよ」

『クツ…これは…?』

叫びをあげる少年の中に何かが入ってくるのを感じたキャロルが見たのは暑そうな場所で二人の子供の姿が見え、何処となく見た事のあるような少年に何かを食べさせようとする女の子の姿が見えそこで映像が途切れると先ほどまで叫びをあげていた少年が静かになっ

「アツ…ウ」

膝を付いては少年が虚ろな目をしては口を開いて黒いそれを見ていた。

『おい!…しっかりしろ!』

キャロルが少年に声を掛けるが気が抜けた表情で黒いソレを見ている少年は何かを呟いている。

「…俺の記憶から何か持って行った…」

『!?!』

少年の動いた口から読み取った瞬間にキャロルが黒いソレを見ると少年の額から触手を離して後ろに下がると黒いソレの身体が突如と

してうねりだす。

『何が起きて…!』

「…!?!」

うねりだしたそれはやがて人の形になり少年の前に現れると二人はソレを見て、目を見開く。

目の前にいるのは少年より背が低いが低い割に目立つそのでかい胸、そして伸びた黒髪にダブルウルフの髪型。

その姿を見て少年はゆっくりと口を動かす。

「クリ…ス?」



## 56話 モデル イチイバル

『なん… だと?!』

目の前に現れたのは髪の色以外のほとんどは雪音クリスそのもので突如として現れた一糸纏わぬ姿でいる黒いクリスは一度自分の姿を確認してから少年の方に向く。

「…グッ… なんなんだ… お前… ツ…」

「……」

倒れ込んだ自身の身体を押さえながら少年は黒いクリスを見てはほぼ裸だということに気付いて顔をそらす黒いクリスはそらした少年を見て近寄ると両手で少年の顔を掴んで顔を近づけようとする。

「なにを…?」

「…こ…こ…」

黒いクリスは少年の目をじっと見て、数秒たってからなにかを呟く。

『何?…』

黒いクリスの呟きが聞こえなかったのかキャロルと少年はもう一度聞き取ろうとする。

「方舟… 何処?」

「方舟…?」

「…!」

少年が呟いた瞬間黒いクリスは何かに気付き、横を見る。

少年も同時に横を見るとそこに一人の姿が見えた。

「おい… ソイツから離れろ、偽物…」

ソコにいたのはギアを纏ったもう一人の白い雪音クリスの姿があり少年を見つけると直ぐに銃口を黒いクリスに向ける。

「クリス…」

「大丈夫か?… そこから離れられるか?」

白いクリスを見て名前を呼んで白いクリスが答えるが少年の身体はまだ動ける状態ではなくその場にとどまざるをえないでいる。

動けない事を見てから白いクリスは動けない事を理解してから銃

口を突きつけながら口を開く。

「一応言っておくぞ、これはおもちゃじゃねえ…。わかったらさっさと…！」

白いクリスが黒いクリスに脅しを掛けるように言うが言い終わる前に、黒いクリスが少年から手を離すと白いクリスの前に立つ。

「… ころも自分と同じ姿がしてるのを見るのは不思議に感覚だぜ」  
二人が並ぶと見分けがつかないほど似ており白いクリスはそんな感想を呟いて、黒いクリスを見る。

黒いクリスはじつと白いクリスを見てると次に白いクリスが纏っているギアに注目する。

「… お前、なんか着ろよ」

自分と同じ姿でしかも裸でいられるのが気になってしまい嫌な顔を見せて呟くと黒いクリスは見つめた後に口を開く

「… モデル、イチイバル… 展開」

「… !？」

黒いクリスが呟くとその足元から黒い陣のような物が広がりその中から触手のような物が伸び黒いクリスに巻き付き、白いクリスもそれを見て何か起こす前にミサイルを展開し黒いクリスに向けて撃ち出す。黒いクリスに着弾する前に触手がミサイルに絡み付き、そしてミサイルが触手に触れたところが突然腐食しだしてやがて爆発せず黒い陣に落ちていきそのまま呑まれていく。そして触手に巻かれていた黒いクリスは黒い光を放つと触手が弾かれる。

「… マジか…」

「… 嘘だろ…」

黒い光を放つて触手が弾かれると白いクリスが纏っている赤いギアと似ている真っ黒に染められたイチイバルを纏った黒いクリスの姿があった。

## 57話 不明な目的

「ギアを纏ったところで！」

【MEGADETHPARTY】

自身と同じをギアを纏った黒いクリスに小型ミサイルを照射する。

「…告。MEGADETHPARTY」

クリスのミサイルを見たのか、黒いクリスも小型ミサイルを照射し全てのミサイルを打ち落とす。

「コイツ…技まで…」

打ち落とされたミサイルを見てクリスは悪態をついてから少年の方に走り出す。

がっそれを間に挟まれるように黒いクリスが割り込んでくる。

「お前…アイツをどうするつもりだ」

「…私は…」

立ち止まって黒いクリスに訴えると黒いクリスは少年のほうを見てからもう一度クリスの方に向き直す。

「私は…この人の願っている物…貴女はこの人の欲しい物じゃない」  
「なに？…」

黒いクリスの発言に理解できずにクリスは呟き、黒いクリスは少年を片手で持ち上げる。

「…ウウ、なに…を」

持ち上げられて少年は呻いて、黒いクリスの腕を剥がそうと手を伸ばすがそれを弾かれる。

「この人の欲しい物、あげるために私が生まれた…だから…」

「おっおい…」

「私の欲しいもの…ちようだい…」

そう言つて黒いクリスが少年を引き寄せると少年の唇が黒いクリスの唇と重なる。

そう…キスをしたのである。

「…!?!」

「おまつ!?!」

『なッ!?!』

黒いクリスの行動に驚きクリスはその行動を止めようとするが今此処で引き金を引けば少年に当たるかもしれないと思い二人の所に走り出す。

「ン〜!!ッ!〜!」

「……」

黒いクリスは少年と深いキスをし、少年は何度も引きはがそうとするがやがて、引きはがそうとする力が弱まっていく。

『おい……どうした!』

キャロルの問いかけにも答える事ができずただ黒いクリスに蹂躪されていく少年を見て何かに気付く。

『何か……流れてる?』

少年と感覚を共有している為か、何か黒いクリスに流れていくのを感じ取るがそれも数秒でありすぐにその感覚もなくなり、少年の力がなくなると腕をだらんとさせ

パアン!

と何かはじける音が響いた。

突然の音と同時に少年の身体が落ちていき、それを拾い上げようと【先程まであった腕】を伸ばそうとする。

「……」

黒いクリスがなぜ拾えなかったのか自分の腕を見ると先ほどまで少年を掴んでいた腕が無くなっていて、繋がっていたから黒い血のような液体が流れていた。

無くなった腕を気にすることなくもう一度少年を拾い上げようとするところに少年の姿は無くあたりを見渡すと、クリスに抱えられた少年の姿を見つける。

「ハア……ハア……」

あの一瞬で少年を回収することに成功したクリスは息を切らして少年を抱えて黒いクリスを見た後、すぐに銃弾を砂浜に打ち付けると着弾すると煙幕のように砂がまき散らされる。

「……逃げられちゃった」

逃げて行く二人を見て黒いクリスは銃口を向けるが諦めて下すと  
呟く。

## 58話 まだ気付かない

「なあ…クリス」

「…」

あれから黒いクリスを振り切り、少年の手を引つ張りクリスは人気のある街まで走ってきたのだが…

「……」

「…スウ…クリス!!」

少年の声に気付かず、手を引くクリスに少年はもう一度声を掛けようと今度は声を大きくして呼ぶ。

「っ!?!…なんだよ」

「もうここまで来れば良いよ…クリス?」

クリスは驚いて立ち止まって答えるがその表情は何処か怒ったように見え、少年はクリスの顔を見て一瞬固まるも、もう大丈夫だと答えるとクリスは少年の胸ぐらを掴む。

「… どうしたんだよ」

「… 大丈夫なわけないだろ! あんな偽物のアタシが急に現れたと思っただけにお前とキスしやがるし! アタシのギアまで纏うわでこっちは困惑してんだ!」

「…」

そう言っただけで怒鳴り付けてくるクリスに少年は黙って聞いていて、それが気に入らないのか更にクリスは答える。

「ノイズが出てきた時だっただけそうさ! なんてあの時一人で全部引き連れるような真似したんだよ! 戻って来てお前が一人でノイズを引き連れていったって聞いた時本気で心配したんだぞ…!」

クリスは本気で少年の事を本気で心配していたらしくノイズの一件からずっと引きずっていた。

「あんたのパパとママが居なくなっただけだっただけ、先輩達が来たのは驚いたけどアンタが倒れて…!」

そこまで言っただけでクリスは少年に口元を手で押さえつけ静かにさせ、クリスは掴んでいる手の力を緩めて少年の顔をもう一度見る。

もしかしたら困らせてしまったのではないか、言い過ぎたのかと思っていたのだが少年の表情を見てクリスの身体に悪寒が走った。

クリスの瞳に映っていたのは…

「もういいって言っているだろ…。」

何時ものふざけた表情に見えるのだが何か違うように感じた、いや違う、まるでそう…

「少年の瞳の奥からナニカがこちら何うように見ている」

ように感じとりクリスの全身を一気に寒気だし、思わず後ろに下がってしまった。

少年が瞳を閉じて目を開くと何時ものような表情に戻っていて、後ろに下がったクリスを見て首をかしげる。

「どうした？クリス」

「…っ！勝手にしろ！」

何事もなかったかのように手を差し伸べて答える少年の方をじつと見ていたクリスは気付くと差し出してきた手を払い除けて少年達がいるホテルの方に歩いていく。

「いってて… なんだよ急に」

そう言って少年は払い除けられた手を擦ってクリスの後を追いかけていく。

そんな二人のやり取りを眺めていたキャロルは腕を組んでいて少年を見る。

(さっきのアレはいったいなんだ?)

考えていたのは黒いクリス事もあるのだがそれよりも違うことを注視していた。

それは黒いクリスの腕が無くなる前後に起こった事である。

あの時キャロルはクリスや黒いクリス、そして、少年は見えていなかったがキャロルだけはソレが見えていた。

少年の背中から蛇のような太く長い何か伸びていて少年を掴んでいた黒いクリスの腕に巻き付いていたのだ。

そして音と共に黒いクリスの腕が無くなると同時に蛇のような形をしていた者はするすると少年の背中に戻っていくのを見ていた。

そこまで考えるとキャロルは何か引つ掛かりそれを口にする。

『確かノイズが現れた時もアイツの衣服が不自然に空いていたが…まさか…』

だがその答えを知ることにはまだできなかつた。



## 59話 違うそうじゃない

あれからは何事もなく旅館に着いた少年とクリスマスはそのまま自室に入っていていきそれを眺めるしかできなかった少年はほんとにどうしたのかと首を傾げ、途中からやつてきた響と未来と合流すれば、黒いクリスマスの事を離すと二人はとても驚いたようにして、だがそれとは別に響が少年に問い詰めていた。

「へ〜…キスしたんだ、へ〜」

「待って、響さん重要なところですか？」

「なんでもないよ…」

なんか論点がずれているなと思って少年は問いかけるが響は頬を膨らませては顔を逸らす。

そこに未来が少年に問いかける。

「でも和雪君を狙ってるのはわかったんだけど…和雪君、どうして狙われているかわかる？」

「まあ…わかるけど…」

未来の発言から黒いクリスマスが少年を狙った理由はきつと少年の持つナニかだと推測してみる。

「でも流星にこのタイミングはまずいかな…」

「確かにそうだね」

未来と響は互いに頷いていると少年はん？とわかってない顔をする。

「良い？和雪君、今私たちは何をしに沖縄にいるの？」

「なについて学校の旅行で…あ」

どうゆうことかと気付いた少年は呟く。

「もしかして俺、まだ狙われるん!？」

「そりやそうでしょ!？」

とても驚いたようにしていると二人にツッコまれる。

「和雪君前のノイズといい、ちよつと危機感なさすぎだよ!」

「そだよ!クリスマスちゃんが怒ってるの少し理解出来ちゃったよ!」

「おっおう…なんかごめん」

突然二人に責められ、少年はたじろいで下がろうとすると後ろで何かとぶつかる。

「あつ…」

なにかとぶつかって後ろを見ると見知った人物がいた。

「…狙われてるってどうゆうことなんだ？」

「…五木田」

後ろにいたのは親友だった。

「どうやら先程の会話を聞いていたらしく、親友はどうなっているのか聞き出そうとする。」

「ぶっちゃけ、旅行前から気になっていたんだ…クリスがどうのって言ったと思ったら数日後に転校生で出てくるわやたらお前等、一緒に帰る事あるし、さつきだって3人で大木を探しに行くからおかしいと思っただんだ」

スラスラと述べる3人はやばいと感じます。

響達の正体に気になりだした親友は少年の肩を掴んで後ろから響と未来を見て問いかける。

「なあ、あんたら…いったい何者なんだ？」

自室に着いたクリスはベッドに飛び込むと枕を抱いて蹲る

「…なんだよ」

クリスが思い出していたのは黒いクリスと少年がキスをしていた時だった。

「なんだよ…あれを見てからへんじゃねえか」

あれを見てからクリスの様子がおかしくなったのは自分でも理解はしていた。

だがどうしてこんな気持ちに沸くのかわからず少年に怒ってしまった。

少年の瞳から覗いていた物も気になったがそれよりも少年がなにも思っていない事に疑問を抱いていた。

「なんで、アタシ……こんな怒ってんだよ……わかんねえ」

## 60話 親友の優しさ

あれから親友にバレてしまい、説明することになってしまい、少年達は親友にこれまでの事を話してしまった。

最初はクリス、響とやってきてそして未来達がやってきたこと、そしてノイズの説明や今回の事件を話をして、親友はうんうんと頷いてようやく口が開く。

「なーにアニメみたいな展開話せって言ったよ」

「ああ、うん。そう来ると思ったわ」

真顔で言ってくる親友に少年はわかっていたような感じで呟き

後ろの二人は苦笑いをしているように聞こえた。

「まあ、最初に言われて信じろって言うほうが無理な話だよね」

「そりやそうだけど…」

「だけど…」

未来の発言に少年がなにか言おうとすると親友が割って入ってくる。

「大木が変な事に巻き込まれてんのはわかった。黒いクリスが現れたっていうのも実際は信用できないが」

そして人差し指を上にあげて少年達に答える。

「実際見てみないと納得できないからな！しばらくは俺も混ざるわ」

「…ハア!？」

親友の口からとんでもない事を聞いた少年は思わず驚いてしまつて立ち上がってしまった。

「お前、話聞いてたか!? ノイズにでくわしたら最悪死ぬんだぞ!」

先ほどの説明の過程でノイズの驚異を説明したのだがそれを聞いた上で親友は付いていこうと言ってきたのだ。

「さつきも言っただろ。俺は実際に見ないと納得できないしその話が本当なら大木だって危ないはずだろ?」

「だからって…」

「まあそうゆうことだし、お前が一人で危ない橋わたる必要ないだろう?」

そうゆうと少年はまた驚いて親友を見る。

「全く… お前だけでんな楽しい事してんな、俺も混ぜろよ巻き込めよ。一人より二人だろ?」

それに… と親友は立ち上がって少年を見る。

「お前と何年ダチやってんだと思ってるんだよ。その程度で俺が離れると思つたら大間違いだ。馬和雪」

「…」

「良かったね和君」

ニカツつと笑つて見せる親友に少年はじつと見て、後ろの二人も素直に喜んでるように見えてそこで少年が口を開く。

「いや、お前とのダチ歴2年もたつてないじゃん」

そして親友の拳が少年の顔面にヒットするまでそう時間はかからなかった。

「このやろう。俺がせっかく言い話で纏めてやったのに空気読めつてんだよ」

そして親友が呟いたとたん少年の拳も親友の顔面にヒットする。

「俺の忠告無視しておいて来るなって言ってるのになんでくるんだよ。話聞いてましたかあ?」

「あつあれ?」

「二人とも、ちよつちよつと?」

突然の事に起こる響と未来を無視して親友と少年… 五木田優輝と大木和雪は笑顔で殴り合いを開始する。

## 61話 彼女は彼の夢を見る

「何処だ…ここ」

薄暗い個室の場所に、クリスは目覚める。

「…」

何処か小さい部屋で目覚めたクリスは起き上がり、自分が何をしてきたのか思い出そうとする。

「確かあの時、ホテルに戻って直ぐに寝たんだよな…」

そう思っていたが直ぐに自分がホテルに居ないことに気づいていた。

フニユン…

そこで起き上がろうとすると何か柔らかいものがクリスの手に当たる。

「なんだ？」

手に当たった感触は柔らかくクリスも何に触れたのか触れたところを見るとそこにあつたのは…

「…スウ」

「な!？」

そこにいたのはまだ幼く見える子供の姿があり、クリスはその子供のお腹に触れていた。

クリスが驚くと、その声を聞いて子供も目が覚める。

「ン…お姉ちゃんどうしたの？」

目が覚めた子供はゆらゆらと揺れながらクリスを見て、ゆつくりと近づくとクリスに抱き付こうとする。

「あつ悪い、アタシはアンタの姉ちゃんじゃ…」

寝ぼけながら抱き付こうとする子供に否定をして引き離そうと言ったところでクリスは気付いてしまう。

「え?…」

子供ではあるがその容姿はとも見覚えがあり、まるである人物がそのまま子供になった姿に見えてしまったからである。

ではいったい誰か？

「和…雪？」

「うん…あれ？お姉ちゃん…誰？」

自分の目を擦ってクリスを見つめている小さい和雪は呼んだ人物が違う事に気付き首を傾げて問いかける。

（いや待て待て、なんでこんな小さいコイツがいるんだよ!?!夢か?夢なのか!?!でもコイツの小さい時知らないはず…）

等、何故自分が此処にいるかもわかってはいない状況に加えてこのチビ和雪と来ていた。

どうゆうことなのか苦悩しているところにチビ和雪が心配そうにクリスを見ていた。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「あつ、なんでもない。聞きたいことあるんだけど良いか？」

「うん、良いよ？」

心配そうに見つめるチビ和雪にクリスは首を振って後にしようとしてチビ和雪の方を見て問い掛けようとする。

「此処ってどこだかわかるか？」

「どこって此処は…僕の部屋？」

そうゆうチビ和雪は首を傾げては答えるがその表情は何処か違和感を感じさせていた。

「自分の部屋？って、わかってないのか？」

「うん、だって僕の家は日本にあるんだもん」

チビ和雪の証言にクリスは驚いたように聞き返して見ると、彼は困ったような顔を見せて答え、クリスは察したのか更に詰める。

「…日本ってまさか此処って」

「うん。此処はタイって言う国のおばあちゃんの家だよ」

## 63話 謎の部屋と屍の部屋

現在地を伝えられ、クリスは一瞬戸惑うがこのチビ和雪の証言に少し納得している部分があったのだ。それは、

「確かお前の母親が…」

「ん？僕のお母さん？」

そう、彼の母親は外国の人だったという事を和雪から聞いた覚えがあった。

つまりここ彼の母親が滞在している家だと推測する。だがクリスにはひとつ疑問があった。

「なあ。お前、ここで何してたんだ？」

「僕？…なんでいるんだっけ？」

「お前…」

「…あつ」

此処にいる理由を聞こうとしたが本人もわかっていない様子で首を傾げていた。

周りを見れば謎の置物がたくさん置いてあり、自分達を囲うように何本もの蝋燭が火をともしているからに子供がいる部屋としては違和感があった。

そして突然子供の瞳が曇るとクラつとその場で倒れる。

「あつおい大丈夫か…！」

ガチャ

他にも質問をしようとした時、突然入口の扉から音がし、誰かが入室してきた。

入口の方を見るとそこに現れたのは黒髪ロングの女性が入ってくる。

「えつと。貴女は…」

「あ、アタシは」

「雪音…クリスね？」

「え…」

入ってきた黒髪のロングの女性は直ぐにクリスの方に気づくと近



づいて眩き、クリスは答えようとする就先に女性の方に名前を答えられ驚愕の顔を見せる。

「どうして」

「わかるわよ。だって」

「…ッ！」

黒髪の女性は笑うとクリスは不気味さを感じ警戒し始め距離を取ろうとすると身体が動かない事に気づく。

「だって私は…」

「…え」

黒く長い髪を広げ女性の表情が見えるようになってその顔を見てクリスが更に驚愕の顔を見せる。

「貴女と同じ、雪音クリスだもの」

「…!?!」

髪を掻き揚げ、顔を見せると黒髪のクリスが見え目があつた瞬間クリスの意識が飛びかけ始め膝をついてしまう。

「な…:に?」

飛びかける意識の中クリスは黒髪のクリスを見上げてみると黒髪のクリスは腰を降ろしてクリスを見くだすような視線を送るとクリスの耳元で呟く。

「いきなりでごめんね。でも貴女じゃダメなの。あの子を…:のは」

「なにを言って…:!!」

「安心して、貴女達はちゃんと元居た場所に帰してあげるから」

「…:なんだと!?!」

帰還。

黒髪のクリスから聞かされた言葉にクリスは驚き、追求しようとするが瞼が重くなるのを感じ地面に倒れる。

「意外と早かったのね。それまで彼を預けておくわ。それじゃあ、またね。クリス」

意識が飛びかけていくクリスに黒髪のクリスはそばにいたチビ和雪を抱き上げ笑顔で見送っていく。

「…！…夢？」

目を覚ましたクリスはベッドの上におり、顔を横に動かして時計を見る。

時刻は朝の6時を回っていて特に変わった様子もなく普通に起き上がることもできていた。

そしてクリスは顔に手を当てて思い出す。

タイの謎の場所と一人だった和雪。そして黒髪の言っていた言葉。

『貴女達を元いた場所に帰してあげる』

「夢にしてはおかしすぎる…まさか本当に？」

どうやって彼女が夢を通して伝えにきたのかわからないがもし彼女の言葉が真実なら彼女は確実に知っている。この世界の事も和雪の事も。

「だからと言ってはいそうですかなんて言うか。あんなこと言われて納得するなんてあのバカが聞いたら絶対に笑って否定するな」

不適に笑って見せるとベッドから離れ早朝のシャワーを浴びて、新しい服に着替えて鏡を見て答える。

その後部屋から出て行くと何やら和雪のいた部屋の前になにやら女子達が集まっていて中の様子を見ていた。

話を聞くと、あのあとロビー五木田を壮絶な喧嘩をしたらしく、先生に止められ部屋のなかでトランプをしてると盛り上がり、他の男子陣も呼んで朝までやっていて全員力付いて屍の山とかしていたらしい。

## 64話 察知スキルはだてじやない

「んで？何があつたんよ」

「…ふごふご」

「ほーん。んで、そんな話、誰が信じるんよ」

「…んふおふおふんぐ」

「まあ、そうなるわな」

朝食バイキングでやってきたクラス一同は各々料理を運んでテーブルに着いて食事を楽しんでいた。

そんな中で適量の（大量）の料理を食していた和雪とそれを眺めながら適量の料理を食べて和雪の量に若干の引きを見せている親友こと、五木田はこれまでの出来事を話していた。

「でもさ、もしそれがほんとだとさ」

「ん？…ゴクツ。なんだよ」

「今お前の家に響とは他に…女の子達が同棲してるってことだよな？」

「…」

「沈黙は肯定でございますが？」

五木田の鋭い推理に和雪は黙って沈黙をするが黙っていることに肯定と捉えた五木田の目がいつそう鋭くなる。

「やっぱり殴って良い？」

「喧嘩なら買うぞ？」

五木田にジト目でかえして食事を続けていると後ろから響達もやって来る。

「二人ともおはよう」

「和君おはよー」

「…おはよ」

「おっみんなおはよ」

「あっ…おはよ」

それぞれ朝の挨拶を交わすが和雪とクリスが目が合うとクリスは

気まずそうにその場に留まる。

そんな二人の行動を見た3人は首をかしげる。

「あれ?どしたの二人とも」

「いやなんでもない」

五木田の質問に対してクリスは気付くと直ぐに返して和雪の隣に座る。

「なあ、昨日の事なんだけど」

「…ああ。あれか別に平気だよ」

「けどよ…」

「俺が良いって言えば良いのよん。それにほれ、今は行事できてんだから楽しもうや」

どうやらクリスが気にしていたのは昨日の和雪に対して怒鳴ってしまった事らしく、いきなりの事でもあったが為に和雪も気にしているのではないかと思っただが本人はそんなことはまるつきり思っていなかったらしく笑ってクリスに提案をすればクリスは少し眉を動かす。

「良い、のか?」

「せっかくの旅行なんだし、その話は帰ってからでも良いでしょ」

「じゃあ和君!水族館デートしよ!」

「唐突すぎるし、響さん貴女ぶれないねえ…」

指を上を指して提案すると後ろから和雪の肩を掴んできた響がデートの誘いをしようとするが和雪にジト目で突っ込まれる。

「昨日だって海では一緒に遊べなかったし良いでしょ?」

「なに言うてんねんあれだけの事したのに?」

「更衣室の事?」

「違うよ、オイルの事やってかその話はやめろ」

「ん?更衣室でなんかしたの?」

「どうゆう事なの?」

響があつと答えるももう遅かった。五木田と未来が一斉に和雪を見ると和雪はこの展開を先読みしたのかその場を離れていた。

## 65話 グイグイ攻める響

「うわあすっごーい！」

水族館にやってきた和雪達クラス一同。

班別行動で和雪、五木田、クリス、響、未来の班はこれを楽しもうとしていたのだが。

「和君見てみて！イルカだよ」

「うん、イルカだね」

「和君！こつちにはペンギン！すごく可愛くない!？」

「うん、ペンギン可愛いね」

「和君！今度は…」

「響ちよつと良い？」

「ん…どうしたの？」

興奮している響に和雪は待ったをかける。

「何かに気付きませんか？」

「…？何かあったつけ？」

「今俺とお前しかいないんですが実ははぐれているんですよね」

「…あっほんとだ」

「ええ…」

興奮する響に引つ張られ、和雪はクリス達とはぐれてしまっていた。

「あんの馬鹿共…！」

「まあ落ち着きなつて」

「そうだよ、あれは興奮した響が和雪君を連れだしちゃっただけだから」

たどり着いて早々にはぐれた二人にクリスは少し怒り気味で震えていたがなんとかなだめようと五木田と未来はフォローしていた。

「まあ、着いてGOスタートで拉致されるとは思わなかったよ。一度LINEしたけど無視されてるみたいだけど」

「え、本当？」

「既読ついてるけど反応なしでございます」

そう言つて五木田からスマホを見せてもらうと確かに既読は付いていたが返事は無く数時間たつていた。

「そういえば二人は連絡手段はどうしてたの？」

「あつそれは…」

「アイツがいないとほとんど連絡できない。携帯は持ってないからほとんどアイツと家にいる連中じゃないと連絡ができねえ」

連絡する手段がない事にふと気になって聞くとどうやら来てからの連絡手段は全くもってないようでほとんど彼が持っている携帯と家にある電話しか使つていなかった。近々彼がどうにかするみたいなおことを言つていた気がするがどうするのだろうか…

「ふーん、とりあえず二人を探すか」

「そうだね」

「わかった」

あの二人を見つけない事にはと五木田の提案に乗っかり3人は観光をしながら二人を探すことにする。

「あの、響さん？」

「ん？何かな？」

「なんで俺の携帯を持ってるんでせうか？」

「あついやあ、なんと云いますかですね。私も写真が撮りたいなくだなんて」

「とか言いつつポケットに入れてますよね？」

「ほら和君、皆探してると思うから私たちも行こう！」

「あつちよつと…」

五木田から連絡が来た時、返事をしようとした時後ろから響に携帯を取り上げられ、響を見ると携帯をポケットに入れてえへへと誤魔化して和雪の背中を押して忘れさせようと直ぐに行動する。

「多分これしかチャンスはないから…」

「ん？なんか言つた？」

「ううん！なんでもない！」

後ろで響がつぶやく声に和雪は気付かず二人は水族館の中を歩い

193

## 66話 響の告白 クリスの思い

「全くあの二人はいつたい何処に行ったんだか…」

「連絡もつかないみたいだしそれに…」

「……」

「雪音の機嫌がどんどん悪くなるな…」

「そうだね」

和雪と響を探している中、全く見つけることもできずに気が付けば観光から人探しに代わってしまっていた。二人が見つからず、だんだんと機嫌も悪くなってきたクリスを見た五木田と未来の二人はいよいよ危ないかもと焦りを見始める。

「なあ、小日向さんやい。確か立花の事ってよく知ってるよね、大木の情報やるから立花の情報くれない？情報共有して予測してみよ」

「今のところはそれしかないみたいだし良いよ」

機嫌が悪くなっていくクリスの様子を見ながら二人は親友の情報を開示させていく。

そしてクリスはというと…

「(なんで今になってあの馬鹿が…それにアイツもなんで抵抗しないんだよ…まさかアイツ…)」

内心めちやくちや焦っていた。確かに響がアイツ(和雪)の事を好いていたの知っている。それだけでも少し何か焦りのような何かが自分の中に現れ、更に痛みのようなものを感じていた。それは温泉に浸かっていた時の響の言葉…

『私はこの世界に残るよ』

あの時言っていた響の言葉。あの時の彼女の言葉には冗談だという気持ちは全く感じられず本気でこの世界に留まるつもりでいたのだろう。

クリスの中にも少なからずその考えはあった。自分もこの世界に居ても良いかなど。だがそれと同時に元の世界はどうするのかと考え込んでしまうのだ。

此処に残るといふ事は元いた世界を捨ててしまう事になってしま



う。もし、向こうの世界と自由に行き来する事ができれば問題はなかったのだが今のところそんな保証は何処にもない。ならば此処に残って彼と…和雪と居た方が彼も一人になる事はないし、一緒にいるのも悪くないと思ってしまう。でも…

「アタシ…なんで馬鹿とアイツが一緒にいるってだけでこんなにも嫌なんだ？」

響が彼と一緒にいる事、最近はずっとべったりだったし響も彼が好きだから取っている行動だからクリスも理解はしている。だがその行為を見るても良い感情は出てこなかった。

寧ろ彼の隣にいる響を羨ましいと思っていた。最初にこの感情がでてからはただの勘違いだろうと思っていたが。

「…あ…」

雪音クリスはある事に気付く。

「見てみて和君！ペンギンだよ！」

「いや響さん？これ2回目ですが…」

「あれ？…」

あれから二人で色んな所で回っていて気が付けば二回目に突入していて和雪はほとんど響に引っ張られていた為少し息が上がっていた。

「まあ良いよ…ちよつと休憩しようよ俺疲れちった」

「アハハ…ごめんね。ちよつと休憩しよつか。あそこ座れるみたいだからあそこにしよう？」

息の上がつている和雪の提案を聞き入れ、響も座れるところを見つければそこに座って休憩をする。

「そうそう響、そろそろ携帯返してくれませんか？」

「…イヤ」

「…え？」

一息付いて和雪は響に携帯を返して欲しいとお願いするとなんと

それを響は断つたのだ。

「だって返したら五木田君達と連絡するんでしょ？」

「そりゃ、そうだけど」

「だったらダメ。返さない」

「いや…なん」「これを聞いてもらうまではダメ！」…え？」

響が理由を問いかけるがその答えはわかっていたらしく直ぐに断るがそれを和雪は当然納得するわけもなくそれを聞こうとすると響は意を決したように立ち上がってそれを遮る。

「聞くつて…響？」

「和君…あのね…」

「おっおう…」

「私ねずっと和君の事が好きなの！」

「……」

「最初に会って一目惚れしてからずっと好きだったの。だから和君…私は和君の為なら…此処に…この世界に残るから。だから…」

クリスは壁に寄りかかってポケットに入っていたあるものを取り出す。

それは昨日脱衣場で拾ったクリス達のギアペンダントに似た彼の青いペンダント。

「そつか…。アタシ…。アイツの事…」

「好きだったのか」

「だから和君。私と…立花響と付き合ってくださいませんか？」

## 67話 少年の思い

「私と、立花響と付き合ってください」

…最初は聞き違いかな？いや流石に彼女いない歴〃年齢の俺大木和雪ですよ？。もつと言えばついこの前木崎美奈にフラれた男でございますよ？それがこの目の前の主人公が告白!?本気で!?いや良く考えれば響からの行為受けてたから今思えば時間の問題だったじゃん！

「えと、本気なの？」

「うん。本気だよ」

「あつうん、そうか…」

沈黙。二人の間に静かな空気が流れる。少年の心はもうパニック状態でどうすればわからないでいた。

…そうだキャロル！キャロルがいたじゃないか！すまんキャロルこれどうしたら…

ここで少年はキャロルの存在を思いだし、声をかけるがキャロルの反応はなく静かな空間だけが支配していた)

…あれ…キャロル？

「私ね、ずっと思ってたんだ」

「はっはい！」

キャロルに呼びかけるが返事がない事に疑問を浮かべるが考えるよりも先に立花響が少年に声を掛けた。

「私達が元の世界に帰った後、和君の事」

「それはもう大丈夫「大丈夫って言うと思ったよ」…」

「だって和君わかりやすいんだもん」

「…面目ない」

少年の言葉はどうやら見抜かれてしまっていたようで響に言われて少年は参ったなと自分の後ろ髪を軽く搔いて響の話を聞いていく。

「でも響。わかってるなら…」

「だから私は！和君と一緒にいたいなの！元の世界には帰らないで和君と一緒にこの世界で生きていきたいの！」

「響…」

少年がそれでもダメだと答えようとすると、すぐに返答され立花響が立ち上がると少年の肩を掴んで思いをぶつけければ、響は優しい顔で少年を見る。

…ああ。これは逃げちゃいけないな。

「…ごめん」

一言。たったそれだけで、立花響の顔の表情が今にも泣きそうにな表情になってしまう。

響の顔を見て少年は続ける。

「嬉しいけど、その気持ちには答えられない」

…あ…やばい…響泣きそう。でも…

「まず、自分の世界を捨ててまで残るのは絶対だめだ。家族は大切にしないとだしね」

「…うん」

「それに俺最近気付いたんだよ」

「…何？」

「俺、今好きな人がいるんだ」

それを聞いて響は掴んでいた肩を離してもしかしてと口を開く。

「それって、クリスちゃん？」

「やっぱり気付いてるよね」

「だって和君をずっと見てたんだからわかるよ」

「そっか。じゃあ気付いてるけど…俺はクリスの事が好きなんだ」

それから少年は続ける。

「それでも、私を選んでほしかったな」

「ごめんな…だからありがとう。こんな俺を好きになってくれて」

何かを響に伝えれば響は携帯を少年に返してあげて自分の財布を持ち出す。

「…結構喋ったから喉が渴いちやった。飲み物買ってくるから先に未来たたちを呼んでおいてくれる？」

「…良いよ。ゆっくりでいいから行ってきな」

「ありがと。それじゃあ、ゆっくり行ってくるね。和君」

そう言つて響は少年の顔をしっかりと見れば飲み物を買いに走り出していく。

その後ろ姿を眺めていた少年は自分の顔を隠すようにして深呼吸する。

「これで良かったのかなあ…」

そんな二人の一連の流れを途中から聞いていた白い髪の女の子がいた事に気付くことはなかった。

## 68話 クリスの告白

「あくあ。フラれちゃったなく」

フラれちゃった。この世界に来て初めてできた好きな人。

思い返して見れば元の世界で年の近い異性もそんなにいなかったかもしれない。

この世界に来てしまった時は本当に夢だと思った。自分の目の前に男の子がいればそれはきっと自分の彼氏だと思ってしまう。いままでもそんな経験なかったし、ほとんどは未来達といたから。

でも…。

「へいき…へっちゃら」

飲み物を買って、少年達の所に向かう前に別の所に向かい歩き始める。

「…あはは…変な顔」

トイレに入り、洗面化粧台の鏡で自分の顔を見る。

今にも泣きそうな自分の顔を我慢していてそれを見て少し笑おうとしたが、笑うことはできなかった。

此処まで頑張ってきた自分を笑いたくなんてなかった。

だが此処で誰かが入ってきた。

「…あれ?…どうしたの、クリスちゃん」

—————◇

偶然にも見つけてしまった雪音クリスは二人の会話を聞いてしまい、固まってしまった。

…嘘だろ。

『俺はクリスの事が好きなんだ』

彼が言っていた言葉。そういえば推しだったけど全然そんな言葉聞かなくなつたな。

だが彼が言った言葉には推しとかではなく異性としての好きだと気付いた。

それは先刻去つていった立花響の告白を断り、彼の好きな子…雪音

クリスだと答えてくれたからだ。

だがそれだけで雪音クリスの心の高鳴りは抑える事ができなくなっていた。

最近彼という時も安心するような気持ちにもなりこの感情が何なのかわからなかったがその感情がようやく気付くことができた。

「アタシも…アイツの事、好きだったのかよ」

嫌ではなかった、むしろ嬉しかったの方がでかかった。

これは彼は気付いていないだろうが此処にいる雪音クリスだけはそれに気付いた。

大木和雪と雪音クリスは両想い。

そう思っただけで雪音クリスの心臓は爆発しそうなくらいに鼓動が早まっていた。

そして彼女はこの気持ちを抑えようとする。

「アイツの事だきつとこの事を言ってもおんなじ事を言うんだろくな」

彼は優しすぎる、それ故にきつと彼はこの気持ちを伝えたところで彼女達の事を優先してしまうだろう。

だから彼女は今はこの気持ちを抑え、彼に近付く。

もともと探しに来たのはこっちなのだだからこれは普通の事であつて怒つてもいいはずだ。

だからこれでいつも通り…。

「…おい」

携帯を弄って親友に返信していた彼は驚いた表情で雪音クリスの方を向く。

彼の元に雪音クリスがやってきた。

そして…

「アタシもお前の事が好きだ」

## 69話 少年の告白…消失

「…あつ」

一瞬。

自分が何を言ったのか理解するには上等な時間が過ぎ気付くときには顔を真っ赤にして染めていた。

「…え？クリス…今のって」

「…えと…その」

少年の驚いて発したセリフにクリスは後ずさってしまった。

それもそのはず、先程の響の告白の後でしかも少年の思いを聞いた後だ。

正直言つてズルすぎる。

「…俺の事、好き…なのか？」

少年もあまりの事に思わず質問する。

クリスは、少年の質問に対して逃げる事ができなくなってしまった。

こうなってしまうてはヤケだ。

「…ホントはもっと後に言うべきだと思ってたんだ。お前がアタシ達の事を元の世界に戻したがってる事だつて」

「…」

「夢で見ちまったんだ、もうひとりのアタシがお前と一緒にいる夢を」

「それってもう一人のクリス？」

少年の問いにクリスは黙つてうなずいて続ける。

あの時黒クリスに言われた事、夢のはずなのにリアルな感覚そして、彼に対する思い。

「俺と黒いクリス…」

「あれを言われてからアタシ、気付いちまったんだよ。お前がいなくて、隣にいてくれないとどうにかなっちゃうかもって、…だから」

「…」

俯いたクリスの言葉を聞いて少年は自分の胸を静かに当てる。

「アタシを…この世界に、お前と一緒にいても良いか？」



言った。

言つてしまった。もう引き返すことはできない。後は彼の返答を

…

「好きだ…」

「…」

だが数分たつても少年の言葉は帰ってくることはなく代わりに何かが倒れる音がある場に聞こえてきた。

クリスは音の聞こえた場所、少年がいた場所を見る。

「…ッ…」

自身の胸をきつく締めあげて苦しんでいる少年が居た。

「…頭が…痛い…」

強い痛みが少年の身体に走り出し、思わず目をつむると同時に脳内になにかが映り込んでくる。

見覚えのある蝋燭の明かりだけで照らされている薄暗い部屋。

周りがあるセンスの悪い置物と足元にある魔法陣のような物。

そしてそこに立っていた少し背の低い自分の姿ともう一人…その魔法陣の上に横たわっているもう一人の子供の姿を見て何かを呟いている自分の姿が見えそれを最後に少年の意識は引き戻される。

「おい!!しっかりしろ!」

「…うあ?…クリス?」

「…大丈夫か?」

「…ああ。大丈夫だよ」

「……」

心配そうに見つめてくるクリスに少年は大丈夫だと笑顔を見せ、ユラリと立ち上がる。

「そうか…」

「あつクリス…きつきの事なんだけど…」

「…!」

少し息を整えて、少年は先程見た景色を見て考えるとクリスの方を見るとクリスはビクツと身体を震わす。

少年の雰囲気が変わったのかとても大人しく感じる。

「ありがとう。俺もクリスマスの事好きだよ」

「ほっほんとか!?!」

「うん。…でも…:…よ」

「…:…え?」

少年の言葉にクリスマスは目を見開く…:…クリスマスの目に映る少年の瞳が

…

「…だから…」

そして水族館の照明が突然全て消え、再度点灯する。

突然の出来事に周りの客たちもソワソワしており、店員も原因を探っていたがクリスマスだけは違ふところを見ていた。

「…:…和雪?」

目の前にいた和雪が忽然と消えたのだ。

## 70話 彼は何処に？

「じゃあなー」

「…またね五木田君」

修学旅行が終わり、クリスマス達は五木田とも別れ、それぞれの帰り道を辿っていたのだが…

「……」

「…クリスマス…」

今クリスマスと未来「二人」だけで帰っている。

あの時の事をクリスマスと未来は思い出していた。

あの時水族館では

【大木和雪】

と

【立花響】の二人だけがなくなっていたのだ。

修学旅行で消えた和雪を探そうとしたのだがクリスマスと未来以外のクラスメイトは気にする様子もなく、クリスマスが問いただそうとしたのだがその時の親友である五木田の言葉からはとんでもない言葉に二人は驚愕してしまった。

『なあ、その【和雪】だっけ？そんな人うちのクラスにいないぞ』

そう言って五木田は名簿を見るが

『ん？確かに【大木和雪】って名前があるな…でも知らないけど…ん？』

それから後に来た未来も事の経緯を話していると後から立花響も彼と同じように忘れて皆の記憶から消えてしまっていたのだ。

五木田はどうしても思い出せないでいて最終的にはいないし多分ミスなんじゃないかと結論付けクリスマスと未来は互いにこれ以上はいけない気がすると感じ取り、話をあわせていく事にしたのだが…

「……なあ」

「うん……」

同じことを考えた二人の目の前にあるのは彼の帰る場所の家がある。

もしかしたら他のみんなも忘れてとそんな事かと思ひ不安に駆られてしまい恐る恐る玄関を開ける。

「ただいま…」

「…ただいま」

中に入り声を出すと奥からマリアがやって来る。

「おかえりなさい」

エプロン姿に身を包んで出迎えてくれたのだがマリアは二人を見ては気付く。

「…そうゆう事ね。二人の言いたいことはわかったわ」

「…え、あの、マリアさん。それってどうゆう事何ですか？」

「和雪さんの事ですよね」

マリアの後ろからエルフナインが出てきて二人に説明をする。

「実は和雪さんの事は昨日知ったばかりですけど…もしかして響さんもですか?」

「……」

クリス、未来はエルフナインの言葉に詰まらせ表情を曇らせてしまい、それを見たマリアはエルフナインの頭を撫でる。

「とりあえずその話は後にしましょう。二人も長旅で疲れてるから後で落ち着いてから話しましょう」

そう言うってからマリアはいったん止め笑顔で二人を案内すると居間には翼をはじめとして調、切歌がそれぞれ座っていてテレビのニュースを見ていた。クリス達が中に入ったところに他の3人も気付いて二人を出迎える。

「おかえりなさいデス！」

「おかえりなさい。今飲み物取って来るね」

「良く戻ってきてくれた二人とも」

それぞれの席に座って待てば調が飲み物を持ってきてくれて、二人に出してくれる。

「なあ、なんでみんなは落ち着いているんだ?昨日知ったって言うてらしいけど」

先に切り出したのクリスだった。戻ってきては皆が落ち着いてい

るところが気になっていて疑問を投げる。

「それは昨日の夕方のニュースで彼がいたんだ」

「ニュースでって…どこにいたの？」

「それは…」

クリスの質問に翼が答えるが場所が気になり、未来も質問をすると翼は目線を逸らし、それにつられて二人も視線を逸らす。

『現在、タイの某遺跡のくぐりに来ています。この遺跡はつい先日数名の若者が禁止区域に入っついで以降戻ってきておらず、調査隊も行方も追っているが現在報告なく少年達も戻ってくることはできていません』

ちやうどニュースが目飛び込みその場所が海外にあるタイと聞いて二人は察する。

「まさか…」

「はい、二人の推測通り、和雪さんは…」

『入っついでいた少年達の中に日本人らしき者もいたらしく現在その者の詳細も追っています。そしてこれが監視カメラに映り込んだ顔です』

そしてさらに映像は切り替わり監視カメラの映像に切り替わると複数の少年達が映っついでその中に見知った顔が一人、和雪の姿があった。

そして更にエルフナインは答える。

「和雪さんは今タイにいます」

## 71話 突然の海外と少女

…時は少し遡り。

「…はえ？」

気が付けば自分の目の前の景色が水族館の中から突然切り替わって身に覚えのない場所にいた。

「……あの、ここ何処？」

辺りを見渡せば沢山の人ばかりとその市場、だからその人達の顔つきから日本人ではなくど海外の人だと感じそして市場の看板を見るとここは日本じゃない事に気付く。

「…タイ語か。…え、もしかしてここタイ!?もしかして今度は此処まで飛ばされたの!?!」

驚いて叫ぶと周りの人たちがなんだ?とした顔で少年を見ていて、一斉に注目を浴びた少年は「やばっ」とこぼして恥ずかしさからその場を離れる。

…そしてもう一人その後を追うように追いかけていく。

そして走って行くと近くにあった巨大な寺院を見つける。

「…確か見覚えあるぞ。えくと確か…」

結構有名な寺院だったのを聞いたことがある。あまり文字のタイ語とか読めなかったから母親の通訳のおかげでできた覚えがあった。

「でもなんで此処に…って一つしかないよなあ」

だがどうして急にこんなところに飛ばされてしまったのか考えようとするとなんとなく察する。

突然移動した時もこんな感覚だったのを思い出す。あの黒い髪が好きになった女の子に似ていた子。

…少し考えてから移動していくとまた誰かがその後を追う。

「…とゆうか一人は寂しいなあ…」

「…」

移動する。その後を追う。

「…」

「…」  
移動する。その後を追う。

「…」  
「…」

移動する。その後を…

「いやお前誰？」

「！……」

突如少年が止まって後ろを振り向き、着いてきていた者は振り返った少年を見て驚いて後ずさる。顔は布で隠しているのか素顔を見る事ができない。

「…あつあの…言葉わかります？」

返ってきたのは日本語でどこかで聞いたことのあるような女の子の声だった。

「あつ…うん。わかるけど、君日本人なの？」

「…いえ、日本人ではないんですけど少し日本語を勉強していたので…」

少年の返答に少女はわかりやすいような動きで喜び、少年は首を傾げて少女に問いかける。

「それで？どうして追いかけてたのかな？」

たとえ日本語がうまくても警戒するのは当然で問いかけたら少女は慌てるようなそぶりを見せ…

「いえ…その…私この国の事詳しくなくて…私知ってる言葉を使ってる人がいたから…」

「…あつうん。それ結構危ないやつだね」

どうやらこの子は一人ぼっちだったらしく全くわからない中彼を見つけて付いてきてたのだ。

「いちお知ってる言葉でも付いてくるのはダメだよ。悪い人だったらさらわれる危険もあるんだから…それで家族は？」

「うう確かにそうですね…すみません。家族は…一応姉がいました」

「一応？」

少女の返答に疑問に感じた少年は首を傾げると少女は思い出した

ように顔を上げる。

「あっ！ごめんなさい！自己紹介が遅れました。私は…」

布を取って素顔を見せ、答える自分の名前を答える。

「私はセレナ・カデンツヴァナ・イヴです」

「はあ!？」

なんと少女はあのマリアの妹、セレナであった。



## 72話 少年は絶好調になった

「まじかあ……」

少年はうわあ……と自分の顔を隠して上を向いて眩く。

装者達が来るのは慣れてはいたつもりだったが流石に此処タイで起こるのは想定していなかった。

そんな少年の行動を見てセレナはどうしたんだろうと首を傾げる。

「あの……どうかしたんですか?」

「あ……いやまあ……その辺も含めて話すか……」

「……?」

~~~~~説明中~~~~~

「……ええ!?!此処って別の世界なんですか!?!」

「……まあそうゆう反応するよね」

「それに姉さんの知り合いって本当なんですか!?!」

「うん……知り合い……だよ」

大まかな説明を終えるとセレナは少年の予想通り驚いていてマリアの事も（同棲している事は伏せて）教えれば嬉しそうな顔をしていった。

「とりあえず……どうにかして日本に帰らないといけないんだけど……、あつ出席日数がやばいことになりそう……とゆうか修学旅行だったのにいー!」

今はそれどころではないのだが少年は頭を抱えて涙目になって嘆く。

「……あつあの」

「……ん?」

嘆く少年の後ろからセレナが声を掛けて見てみると何か言わずらそうな雰囲気少年を見ていた。

「あの……できたらで良いんですけど私もその……一緒に……」

「……?何言ってるの」

何を言おうとしているのかわかったがそれについて少年は首を傾げ

て答えるとそれを聞いてセレナはビクツと一瞬震える。

「そつそうですよね…すみ「一緒に行くに決まってるじゃん」…え？」  
「だって元々君は此処の人じゃないしいるだけ大変でしょ。ちゃんと君のお姉…：マリアさんの所に会わせてあげる」

謝ろうとするセレナに少年は遮って返すと説明するとうんうんと頷いて更に続ける。

実際セレナは此処の世界の人ではなくあちら側の人、更にいてここは海外である。ここで一人にするなんて腹持ちは少年にはなかった。だから安心できるマリア達の元に送ったほうが賢明であると考えたのである。

「本当ですか？」

「本当本当」

「一緒に日本に連れて行ってくれるんですか！」

「モチのロンよ！お兄さんにドンつとまかせなさい！」

そう言つて少年は自分の胸にトンつと叩いて笑顔で答えるとセレナは嬉しそうに喜びお辞儀をする。

「ありがとうございます！お兄さん！」

「いえいえどういたしまして」

頭を下げるセレナに少年は照れ顔で返せば頭を上げてほしいと伝える。

「とりあえずこのままじゃあれなので今からある場所に行きます」

「ある場所…：ですか？」

ピンつと指を指して少年は提案をし、セレナは首を傾げる。

「そう…：此処は俺の母さんの母国でな…：日本と別にある俺の家があるんだ…：」

そう言つて少年は得意げに答えて歩き出していく。

「ん？今お兄さんって言った!？」

「え…：今ですか!？」

### 73話 海外のシロップって結構濃いめよね

「それでお兄さんは日本から此処に…」

「まあ…うん。そうなるね」

あれからセレナと行動を共にする事になった少年は歩きながらここまで経緯を説明していた。

「でも姉さんも無事で良かった」

此処に来たのにもかかわらず姉であるマリアの事を心配していてその様子を見て少年は少し安心したのか微笑む。

「まあきつとみんな無事だろうし、大丈夫だろう。… たぶん」

「たぶんなんですか…」

少年の一言でセレナはエエ…と呟いて少年をジト目で見つめている。

「だって皆向こうで世界を救ってるんだぜ？きつと大丈夫、やっていけるよ」

ギアを纏えるかは別として。

「あつ一度飲み物買おつか。ちようど近くにデパートが…」

そろそろ歩い疲れてきたので休憩しようと提案してそのデパートのある方向を見るがそこを見て目を見開きずつとその場を見つめる。

「？…どうしたんですか？」

その場から動かなくなった少年を視線の先を同じように見るとそこに見えたのは少年が先ほど言っていた立派なデパートは無く、大量の瓦礫によって崩れてしまい廃墟と化した元デパートだったものがそこにはあった。

「…ああ、そういえば此処だったな」

「…お兄さん？」

小さい声でなにかを呟いてそれに気付いたセレナが少年の方を見ると寂しげな顔になってその場所を眺めていた。

「…めんデパートはこっちじゃないみたい。たぶんあそこにあると思うからそっちに行こう」

「…はっ」

しばらく眺め続けた後少年は勘違いだったと謝り違うところに行こうとセレナの手を引いて連れていこうとする。そしてその手を引く少年の顔をセレナはずっと見ていた。

「(あそこにあったのって、もしかして崩れる前はデパートなんじゃ…。でもなんであんな寂しそうな顔したんだろ)」

もし彼女が彼に聞けば素直に答えてはくれるだろうだが、聞いてはいけない、踏み込んではいけない気がして彼女は大人しく手を引かれて行き違うところに連れていってもらうことにする。

所々崩れかけている廃墟デパート。そこには一台のボロボロになった日本製の車イスがあり、そしてその車イスには大木と書かれた名字が刻まれており名前には和雪と書かれていた。そしてその近くに一人の人影が二人を見ていたのだが二人はその視線に気付くことなく進んでいく。1

「わあ…この飲み物凄く味が濃い！」

「以外にこうゆうシロップ多めの飲み物ってクセになりかけるんだよね。まあ俺はやっぱり普通のコーラが良いと思います」

その後二人は飲み物を買って喉を潤してもう再度出発していた。

## 74話 以外と数年ぶりに会っても忘れる事はある

「いやあ…歩いたなあ」

「もう…クタクタです」

すでに夕方になっているか外も薄暗くなっていて二人はようやく少年が知りあいがいるとゆう母の元実家の前に辿り着きお互いへとへとになっていた。

「ところで来たのは良いんですけどどうやって説明するんですか？突然の訪問になるから驚きませんか？…」

「……………」

一息ついたところにセレナが少年に質問すると何かに気付いたのか少年途端に動かなくなりどうしたのだろうと覗き込むとダラダラと汗をかいて覗き込んだセレナに一言。

「…すっかり忘れてました」

「ええ!？」

「…そういえば連絡すれば迎えに来てくれる事もできたわ…お金かかるけど」

そう言つてポケットに手を入れて携帯を探して見てある事に気付く。

「あれ、…スマホがない」

携帯が見つからなかった。思えばあの時、こっちに飛ばされてから携帯を見ていなかった気がしていた。

「ええ…それじゃあどうするんですか?」

「まあ連絡はできないのはしようがないからここはひとつ。そのまま行ってみよう!」

「ええ!？」

連絡できないものは仕方ないので少年は玄関に付いている紐を引つ張り、鈴を鳴らす。

チリーン…

鈴が鳴り数秒…反応は無くもう一度鳴らす。

チリーン…

反応は無い。

「あれ？留守？」

「みたいですね…」

「…あつ開いてる」

「お兄さん!？」

ドアノブに手を掛けると簡単に開いてその行動にセレナが少年の服を引っ張る。

「あの、大丈夫なんですか？本当に」

「んくちよい待ち」

心配そうに覗き込むセレナに少年は手を前に出して待っててと促し、玄関を開ける。

「誰かいますかあ!」

今度は声を出して呼び出すと奥からどたとたと足音が聞こえて来

る  
「????????????」  
「?????!」  
「……」

奥から出てきたダボダボなシャツを着た女性は少年を見てしばらく沈黙した後、顔を真っ赤にして驚いて戻っていく。

「…あれ？」

「戻って行きましたねあの人……なんて言ったんです？」

「普通に挨拶だけだね……でも……」

「でも？」

「タイの知り合いにあんな女の子いたっけ？」

戻っていた女の子を見てセレナが少年に問いかけるが少年は疑問を浮かべては首を傾げる。

「でも明らか知ってる人の反応してるんだよなあ」

「でもなんで戻っていたんだろう」

そう言っていると先程とは別にスタスタと綺麗な音を出してこちらに向かっけてもう一度見ると。

「やつやあ……どうしたの和雪」

「え!？」

出てきたのは先ほどのようなダボダボな格好ではなく可愛らしい清楚系の綺麗な女の子が二人の前に現れてはさも先程の事はなかったかのように日本語で答えてくる。

「……」

「どうしたんだよ。黙ったままで」

「いや……あの……」

黙っているところに女の子がジト目で見ていると少年は腕を組んで女の子を見ながら。

「アンタ……だれ？」

その言葉を最後に女の子の拳が少年の顔面に炸裂する。

## 75話当時の彼は泣き虫だった

「そう、あれはまだ俺が小学生になる前だったころ」

「なんか始まりましたね」

「シート。言わせときましょ」

そう、あれは十年以上前。

両親と一緒にタイに行った時の事だ。

俺は初めての旅行でもあり、飛行機に乗った時はもう…

「びえ〜!!ごわい〜がえりだい〜!!」

離陸した瞬間恐怖でぎゃん泣きしていた。

当時小学生になる前の年齢でもあった俺は地元を離れる不安と慣れない初めての乗り物に対して離陸した瞬間怖くなって泣いていました。

そして日本からタイまで約5時間のフライト中、彼の絶叫と号泣を響かせてようやくタイの空港に到着した彼は車椅子に座っている父にひしつと抱き着いてぐずっていた。

「なあ和もう着いたんだから早く泣き止めろ。みっともない」

「だつて…グズツ…ゴワ…ズビ…ごわがっだんだもん…」

「将来の和に見せてあげたいわ…」

父にあやさされ、母には写真や動画を撮影された。

そしてほどなくして落ち着くと、ちょうどタクシーがやってきてそれを母が止める。

「さっ行くわよ和。面白いから」

「うん…（早く帰ってドラ○もんが見たい）」

早く帰って国民的アニメが見たがっている彼は母に勧められながら父と一緒にタクシーに乗り、目的の場所へと向かっていく。

尚、彼はこの旅行を日帰りだと思っており、2週間の滞在だと聞かされた時には再度号泣していた。

「わあ…此処がお母さんの家?」



「そうよ。今はおばあちゃんと姉もいて和と同じ年の子もいるよ。仲良くするのよ?」

「ほんと!?する!」

「よろしいじゃあそこで遊んで待ってて」

「うん!」

母の実家にやってきた大木家一行は結構大きな家に興奮しており、同じ年もいる事から興奮は最高潮に達し、庭の方に走って行く。

「和!」

「?...なに?」

「地下室は入ったらだめだからね!」

「はーい!」

そして走って行った彼は母の注意を聞いて元気な返事をして庭に入っていく。

「あつ!これ知ってる!寝ながらぶら下げるやつだ!」

二本の木に布が吊るされている通称ハンモックに大興奮しどうしても寝てみたいとよじ登って布に跨る。

「...あれ?なんか違う」

寝ようとしたつもりがなぜか跨ってしまったってもう一度チャレンジする。

「んしよ...あれ?...うまく...ああ!」

頑張って乗ろうとするとぐりんつとハンモックが半回転し、そのまま真下に落下して地面に激突する。

「いったあ...」

今にも泣きそうな顔になり、赤く腫れた顔をさすりハンモックを見るとその奥から覗かせている子供を見つける。

「...????」

「...誰?」

背丈は彼と同じくらいかちよつと小さいくらいの子が彼を和雪を見ていて和雪と彼女の言葉が同時に重なる。

## 80話 真実と襲撃

「そう、そして出会ったのがこのボク、ピナ・リーンってワケさ」  
「いや、どう見ても変わりすぎだろ」

「そりゃボクだって変わる事はあるさ。どうよ、カワイイだろ？」

「…さっきのダボダボな服」

「ん…何か言ったかな？もう一発入れる？」

「もう一発入れる？って…。」

「驚いたな、かわいらしい女の子の要素0じゃん」

彼女の話に首を傾げて疑問の言葉を向けると拳を固めて笑顔で言うものだったから和雪はそっぽを向いて眩く。

そんな二人の慣れた会話を聞いていたセレナは羨まそうな目で見ていた。

「…いいなあ。私もマリア姉さんに会いたい」

「…」

ずっと一人でいたから寂しいんだろうなと感じ取り和雪は無言でセレナの頭を撫でる。

「お兄さん？」

「…大丈夫、そのうち会えるよ」

「…あれ？突然シリアスになってない？」

撫でている和雪を見て彼女はんん？と首を傾げてアツと気付いて話題を変えようとする。

「そういえば和雪、あんたもしかしてだけど…この国に飛ばされたでしよ」

「あつうん突然来ちやって焦ったんだよ…」

「でしようね〜」

「…え？なんで知ってるの!？」

さりげなく話した後、数分考えるところで驚いて見る和雪に彼女は腕を組んで首を傾げる。

「なんでってあんたつい最近に感情が高ぶるような事なかった？」

「感情が…高ぶる?…」

「そんな事があつたんですか?」

セレナに言われて和雪はある事を思い出す。

『私ね、和君の事が好きなの!』

『アタシも、お前の事が好きだ』

「…あ」

そう、響とクリスの二人の告白。

確かに彼は二人からの告白を受け幸福に感情が高ぶっていた。

「確かに…あつたけどなんで?」

「簡単だよあんたが『4回』願いを叶えた後、『あの方』があんたを呼んだの」

「…4回?」

理由がわからず問いかけると4本指を立てて教えてくれ、それについて和雪はもう一度考える。

一つ目はクリスが欲しいと願い、クリスがやってきた事。

二つ目はクリスを寂しくならないようにと響がやってきた事。

三つ目は誰でもいいから助けてくれと他のみんなもやってきた事。

「…3回」

「ん？」

「3回しか叶ってない…けど」

「…え？」

そう言っつてピナが問かけようとするやと突如外から何か家の壁にぶつかり、壁が破壊され、近くにいた3人がそこを注視する。

「…なん!？」

破壊されたところを見て何が起きたのか確認しようと和雪は二人の前に出る。

すると外から人影の様なものが見えるとその影はまっすぐ和雪の傍に駆け寄り…

「お兄さん!？」

「和雪!」

「!?…お…まえ…」

その人影の正体に気付いたときには相手の拳が彼の腹部を…貫いていた。

「…ひび…き…う？」

「…」

ぽたぽたと流れる血液に彼の言葉に反応したのか、彼女…立花響はその拳彼からゆっくり引き抜き、彼の身体は倒れるように床に打ち付けられた。





## 81話 変化

和雪達がやってきた家の地下で少女は目覚める。

「…ツ!? 此処は…」

一糸纏わぬ姿で目覚めた彼女、錬金術師キャロル・マールス・ディーンハイムは自身の姿を確認する。

「どうして…」

起き上がって鏡を見た自分の姿を見て自分は どうして 此処にいるのか疑問に思いながら、先程自分が寝ていた所に振り向く。

そこには見た事のないような模様の形をした祭壇が佇んでいた。ただだがそれを見たキャロルは見た事があるのかその祭壇に再度近寄る。

「…これってあいつの…」

彼の夢、思い出の中で見た祭壇だった。

「…あいつは?」

自分がここにいることに気づくとハッと彼の存在を思い出してその場から出ようと一枚の布を拾い上げ、自分の身体に巻いて階段を駆け上がる。

扉を開けると目の前にはたくさんの瓦礫とそれの中に倒れている見覚えのある人物を見つける。

「おい! しっかりしろ!」

「……」

見覚えのあった人物の正体はあの少年だった。

声を掛けるも少年は反応はせず引っ張り上げようとするが小さな体で動かせるはずもなくキャロルは舌打ちをする。

「…ツチ。この姿では動かせないか…:なら」

そう言っ手て手を横に翳す。

ダウルダブラを呼び出そうとするが出てくることはなかった。

「…:なぜ出てこない!?!」

もう一度翳すがうんともすんとも言わない。

「どうゆう事だ…何故…」

まさかこの身体のせいなのか？と疑問に思っていると少年の身体が微かに動いた気がした。

「う…」

「！おい無事か？」

「…キャロ…ル？…あつ…っ！」

彼女の名前を呼び少年はどうして彼女が此処にいるのか考えようとするが腹部の痛みでそれどころではなく痛みが彼の身体に走る。

「お前、どこか痛むのか？今すぐこの瓦礫をオレの力で！」

そう言っただけで彼女が錬金術で何かしようとする後ろからの視線を感じとる。

「…」

動きを止めキャロルはゆっくりと後ろを振り向く。

人の気配はなく変わりに大量の蛇がこちらを眺めていた。

「なん…だ？」

大量の蛇に気付くと同時に複数の蛇が彼女の身体に飛びつく。

「しまっ!？」

組み着かれてしまったキャロルは引き離そうとするが複数の蛇は両手足を縛りあげ彼女の動きを止める。

組み着かれてしまったキャロルはバランスを崩して倒れてしまう。

「…っく…この…」

かなりの連携、統率の取れた動きに驚き振りほどこうとするが力が強く振りほどけずについてそれを見た他の蛇達は少年の方に向かっていく。

「…ッ?…」

近付いてくる蛇達に朦朧としながら見上げるともう一度気を失おうとする。

「何をするつもりだ…そいつに手を出すな！」

彼女の静止ももちろん聞かず蛇達はその大口を開け少年の身体に噛み付いていく。

「…!?アアアアアアアアアア!!」



噛まれた瞬間、失いかけていた意識が強制的に目覚め更に強烈な痛み  
みに身体が覚醒する。

「……和雪！」

キャロルの叫びも届かず少年の身体に噛み付く蛇達は離れようとは  
しなかった。

「アア……ギアアア……ア！」

ドクンツ

「!?……」

声を上げて叫び続けていると突然静かになる。

「……和雪？」

キャロルが呼ぶと彼の身体に噛み付いていた蛇達はその場に地面  
に落ちていき塵になつて消えていく。

そして蛇達が消えた後少年の身体は動き出し彼の上にあつた瓦礫  
も一瞬重さで落ちるが何事もなかったかのように起き上がる彼の横  
に落ちていく。

「……!?」

彼の身体を見たキャロルは驚く。

沢山の噛み跡、彼の腹部に開けられた傷がみるみる治っていく。

「……コレは」

これに似たようなことがあつたのをキャロルは思い出す。

彼がノイズから逃げ切った日病院で体の中の細胞が修復されてい  
たのを思い出す。

そして傷が治ると彼は縛られているキャロルの方に向かっていき  
口を開く。

「……■■■■」

聞き取れな言語で喋ると縛っていた蛇達は一度彼の方を見てから  
縛り上げていた力を緩め彼女から離れていく。

「……お前」

指示をしたであろう少年にキャロルは見上げる。

キャロルを見つめている少年の目は明らかに人間とは違う目をして  
いたが瞳を閉じると少年の瞳は元に戻り、キャロルを見てから傍に

よる。

「…え？なんでキャロルいるの!?!なにどゆこと？」

慌ただしくしゃべる彼の様子を見ていつもの様子に戻ったと確信すると彼女も起き上がる。

「なんでもない。気が付いたら此処の地下にいた。何か知っているか？」

「え？地下?…!」

眩いた瞬間彼は突然そっぽを向いたのだ。

「なんだ?どうした?」

「いや、お前服は!」

「服?…あ」

少年の言葉に彼女は自分の身体を見ると先ほどの蛇達に絡まれてしまつて布が取れてしまつたのか裸になつてしまつていたので。

「…いつも夢で見てるのだから問題はないだろ」

「…問題あるからね!」

「一緒にふろにも入つただろ」

「良いから服を着てくれます!」